

令和7年度

幼稚園・幼保連携型認定こども園

中堅教諭等資質向上研修

課題研究レポート

令和8年3月

沖縄県立総合教育センター

令和7年度幼稚園・幼保連携型認定こども園中堅教諭等資質向上研修 研究一覧

園名	氏名	研究テーマ
国頭村立くがみこども園	前堂 翠美	いろいろな遊びに興味をもってかかわる子の育成 －身近な環境にかかわる遊びを通して－
伊是名村立伊是名幼稚園	伊禮 修平	探求心を伸ばすための環境構成の工夫 －手作りピオトープを通して－
読谷村立喜名幼稚園	伊波 明日美	身近な人・物・環境に主体的に関わり、生活や遊びを充実させるための援助の工夫 －日々の生活や遊びを通して－
読谷村立読谷幼稚園	当真 麻理奈	「架け橋期」の自己充実を育む環境構成と援助の工夫 －子どもたちの育ちを共に考えた教師間の連携を通して－
沖縄市立室川幼稚園	川畑 安威美	健康な心と体を育み食への興味関心がもてる援助の工夫 －身近な環境を通して－
北谷町立北谷第二幼稚園	大城 さゆり	主体的に活動する幼児の育成 －幼児の興味や関心に寄り添った環境構成の工夫－
北谷町立北谷第二幼稚園	伊禮 春奈	友達の良さに気付き意欲的に活動する子の育成 －友達や年長児との関わりを通して－
北谷町立北玉幼稚園	島袋 伶菜	幼児の主体性を育む環境構成と援助の工夫 －身近な環境に関わり、わくわく遊びこむ体験をして－
宜野湾市立はごろも幼稚園	外間 有美子	一人一人のよさが活かされた集団の育ちを目指して －発達に合った援助を考える－
宜野湾市立長田幼稚園	赤崎 千明	友達との関わりを育み、遊びを展開していく子の育成 －教師の関わりや環境の工夫を通して－
西原町立西原幼稚園	西原 樹	「4歳児の主体的な遊びを促すICTの活用について」 －ICTを活用、子どもの探究心・気づき・関わりに与える影響－
浦添市立浦添こども園	呉屋 美奈	友だちと一緒に活動する楽しさを味わい、主体的に遊ぶ子の育成 －発達を考慮した保育環境づくりと援助の工夫を通して－
那覇市立城南こども園	屋嘉比 大輔	友達と協力して遊ぶ楽しさを味わうための援助の工夫 －集まりの場「じょうなんかいぎ」を通して－
那覇市立壺屋こども園	高江洲 大輔	一人一人が自己発揮をし、安心して自分の思いを伝え合うことができる環境構成や援助の方法について －レインボータイムの取り組みを通して－
那覇市立那覇こども園	伊良波 志奈子	話を聞く力、言葉で伝え合う力を育み、会話を楽しむ園児を育てるための工夫 －ドキュメンテーションを活用した振り返りの取り組み－
那覇市立与儀こども園	真栄田 麻子	友達と気持ちを通わせながら遊びや活動を楽しむ子を目指して －対話的な関わりを通して－
那覇市立天久みらいこども園	屋比久 千南	園児が体を十分に動かし遊びを充実させるための環境構成と援助の工夫 －様々な運動遊びを通して－
那覇市立久場川みらいこども園	吉澤 真由美	友達や保育者との関わりの中で、一人一人の良さを認め合う援助の工夫 －集団遊びや地域の行事参加を通して－
那覇市立小祿南こども園	新垣 真理子	園児の主体性を育む環境構成と援助の工夫 －園児の姿を踏まえ、遊びを継続させる環境の再構成－
那覇市立天妃こども園	糸数 菜津美	発見を楽しんだり、考えたりする子を育む －身近な環境に触れ、遊びに取り入れるための環境構成と援助の工夫－
那覇市立開南こども園	入里 史佳	幼児理解を深め、主体的な活動へ繋がる環境の構成と援助の工夫 －製作遊びを通して－
那覇市立那覇こども園	安里 笑美子	園児が夢中になって遊びこむための環境構成と援助の工夫 －“やってみよう”を実現するための環境構成と援助の工夫－
那覇市立城北こども園	幸良 亜希子	自分のよさに気づき、主体的に活動に取り組むための環境構成や援助の工夫 －自分が認められる体験やごっこ遊びを通して－
豊見城市立上田こども園	小嶺 千紘	友達との関わりの中で伸び伸びと表現する保育の展開 －幼児理解に基づいた造形活動を通して－
豊見城市立上田こども園	赤嶺 友海	わくわく食べる子ども達の育成 －食べる意欲を育む食育の工夫と保育教諭の援助の在り方－
糸満市立糸満南こども園	玉城 昇太	園児の探究心を育むための環境構成と援助の工夫 －身近な環境に関わり、遊びこむ体験を通して－
糸満市立真壁こども園	大城 由利子	一人一人が安心して自己発揮し、共に育ち合うための環境構成と援助の工夫 －友達と思いや考えを伝え合う遊びや活動を通して－
糸満市立糸満南こども園	久高 里佳子	園児の発想を膨らませ「つながる遊び」の保育実践の工夫 －ドキュメンテーションの活用を通して－

糸満市立喜屋武こども園	名嘉山 一未	一人一人が安心して自己発揮できる環境の構成と援助の工夫 －保育教諭や友達との関わりを通して－
糸満市立喜屋武こども園	垣花 類	友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わうための環境の構成と援助の工夫 －自然物との関わりや活動の充実を通して－
糸満市立真壁こども園	安里 健志	一人一人が安心して自己発揮し、共に育ちあう環境構成と援助の工夫 －心動かす体験や友達や身近な人との関わりを通して－
南風原町立北丘幼稚園	永山 知佳	自信をもって行動する子を育む －“探究プロセス”を大切にした保育実践を通して－
南風原町立翔南幼稚園	嘉陽 知華	学びの芽生えを育むための環境構成と援助の工夫 －心を動かし、主体的に遊ぶ子の姿を通して－
宮古島市立南幼稚園	伊良皆 恵美	自ら環境に関わり、生き生きと活動する幼児の育成 －栽培活動をきっかけとした環境構成を通して－
石垣市立あらかわこども園	苅田 倫子	思いを伝え合い、人と関わる楽しさを感じるようになるための援助の工夫 －対話する活動を通して－

いろいろな遊びに興味をもってかかわる子の育成

—身近な環境にかかわる遊びを通して—

国頭村立 くにがみこども園 保育教諭 前堂 翠美

I テーマ設定の理由

幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説に「乳幼児期の特性及び保護者や地域の実態を踏まえ、環境を通して行うものであることを基本とし、家庭や地域での生活を含め園児の生活全体が豊かなものとなるように努めなければならない」と示されている。

また、領域健康〔内容の取扱い〕(1)には、「心と体の健康は、相互に密接な関連があるものであることを踏まえ、園児の気持ちに配慮した温かい触れ合いの中で、心と体の発達を促すこと。特に、一人一人の発育に応じて、体を動かす機会を十分に確保し、自ら体を動かそうとする意欲が育つようにすること。」とある。

本学級は進級児の2歳児15名で編成されている。そのうち11名は前年度からの担任が継続しており新しい環境への変化を軽減されるよう配慮を行っているが、強い不安をもつ子や特定の先生とのかかわりを基盤にして遊びに取り組む子もいる。一方で担任が継続していない進級児においては新しい環境への変化に戸惑い、部屋を飛び出して前学級の部屋に行く姿や不安を和らげようと床に寝そべったり、安心するものを掴んだりして環境へ適応しようとする姿も見られる。

自身の課題として、月齢による発達の差を理解することや発達段階を捉えた遊びの内容を工夫していく必要があると感じている。

本園は身近に自然を感じられる環境が豊富なことと芸術に触れる機会をもてる公共施設があるため、自然に触れる遊びやわくわくするような環境の中で遊ぶことで心を動かされ、遊びの充実を図れるのではないかと考えた。

そこで本研究では、地域のよさを取り入れた保育や心と体の発達を促されるような子どもの興味に寄り添った遊びを工夫し、子どもたちの心を動かされる体験を増やしていく。そうすることで遊びの充実が図られ、いろいろな遊びに興味をもってかかわる子が育つだろうと考え本テーマを設定した。

II 課題に対する具体的な手立て

- 1 発達段階を捉えた意図的・計画的な遊びや教材の工夫
- 2 身近な自然や公共施設を活用した保育の計画

III 課題解決に向けた取組 (実践)

実践事例1 触れる心地よさを味わい、楽しみながら体の動きを促すことのできる教材の工夫

<幼児の姿>

園庭の芝生を裸足で歩くことを嫌がる子や体に触れる遊びに嫌悪感をもっている子の姿が見られる。

<保育教諭の願い>

触れる心地よさを感じたり、楽しみながら体の動きを促したりすることで感触や感覚への抵抗感が軽減され、いろいろな遊びに安心して取り組めるようになってほしい。

【感触や感覚を楽しめる教材の工夫】

いろいろな素材を使って手指や足裏などを心地よく刺激することで触れる感覚を楽しみながら体の動きを促していく。

プルプルケース遊び



どうにかして
つぶせないかな



なんか
きもちいい

いろいろな感触の足裏マットの上を歩く



ビー玉マットの上を歩く



いろいろな形や高さのある
スポンジのマットの上を歩く

ケースの中のジェルボールをつまむ動作に夢中になる子やぶるぶるの感触を楽しむ子が多かった。

くすぐったい・気持ちいい・少し痛い・歩きにくいなどの感覚を味わうとともにバランスをとろうと体を動かす子もいた。

【幼児の変容】

さまざまな感触に触れる体験を増やすことで心地よさに癒され、時には不快な感覚を経験することになったが不快な感覚であったとしても遊びながら体験することで、こんな感触があったんだと気づき、親しみ姿が見られるようになった。

実践事例 2 身近な自然や公共施設に親しみ、楽しんで遊ぶことのできる保育計画

<幼児の姿>

戸外で体を動かして遊ぶことを喜び、好きな遊びを繰り返し楽しんでいる。

<保育教諭の願い>

いろいろな遊びに興味をもってかかわれるような心を動かされる体験を取り入れたい。

身近な自然にかかわる中で、砂浜ではいつものようにうまく歩けない・立っていたいのに波に押されて踏ん張らないと立ってられない・油断すると体が倒れるなど自分の思い通りにいかないことを遊びの中で体験できるようにしたい。

【身近な環境に楽しんでかかわれるような計画】

・海遊びや海岸の散歩などの身近な自然にかかわる遊び・やんばる森のおもちゃ美術館で定期的に遊ぶ

海岸散歩・海遊び



う〜みは ひろいな
おおきいな〜♪

ふね いた!



いけるとこまで
いってみよ



海風の心地よさを感じながら海を眺めている時に船を見つけ「うみ」の歌を口ずさむ姿やサンゴや貝殻、ヤドカリに興味を示したことで、しゃがむ・つまむ・追いかける動きを経験していた。海遊びで海水の感触と引き波や押し寄せる波の感覚を感じることができた。

美術館で遊ぼう



緩やかな傾斜で玩具を転がしたり、時には滑ったりして楽しむ子や寝転がったり、木の卵をままごとやトングを使うなどして遊びが広がっていく姿が見られた。

【幼児の変容】

自然の中で遊んだり、美術館で子どもの好奇心を引き立てる洗練された玩具にかかわったりすることで、発見を楽しむようになり遊びが広がっていく様子が見られた。

実践事例3 子どもの興味に寄り添い、関心を高められるような環境構成の工夫

<幼児の姿>

リズムに合わせて踊ることを楽しむ子が多い。ボールを転がしたり投げたりすることを楽しんでいる子もいるが、やりたくても上手く掴めなかったり投げられなかったりして諦めてしまう子も多い。

<保育教諭の願い>

子どもの興味をもっていることを運動会の中に取り入れ、楽しんで参加できるよう工夫したい。

【喜んで体を動かしたくなる環境構成の工夫】

子どもの興味のあることを捉え、じっくりとかかわることのできる環境づくりや楽しみながら体を動かすことのできる遊びの教材づくりを行う。

夢中になって楽しむ中で体が動く体験



運動会で



いーやー
がーがー！！

お兄ちゃんお姉ちゃんのエイサーを真似っこ！

※お兄ちゃん達の演技を見ながら楽しく踊っています。

<室内遊び>

- ・大好きなレキオスがかかると思わず体が動きだす。
- ・やりたいことを十分にできるよう、ばーらんくーや場の確保を行う。
- ・遠くにボールをなげることを楽しめる遊びの環境づくりを行う。

ばーらんくーを
使って応援！！

【幼児の変容】

好きな遊びにじっくりと取り組めるよう十分な数の教具を用意し、場や時間の確保を行うことで夢中になって体を動かすことができた。

子どもの興味に寄り添い、好きなことを行事の中に取り入れながらすすめていくことで子どもたちの負担にならず、無理なく楽しみながら行事に参加することにつながった。

IV 実践の振り返り

1 成果

発達段階を捉えることで子どもたちに必要な経験や発達を促す遊びを探ることができた。

身近な環境にかかわる遊びを意図的に取り入れ、遊ぶ時間や場を確保したことで遊びが深まり、いろいろな遊びに興味をもって取り組む姿が見られるようになった。

2 課題

発達段階や幼児理解を深めていき、子どもたちの遊びや活動を充実させ、豊かな体験となるようにしていきたい。

V 今後の実践に向けて

身近な環境にかかわる遊びを特別な出来事として取り入れていくのではなく、年間を通して意図的計画的に行い、繰り返しかかわる中で子どもたちの遊びが深まるようにしていきたい。

<主な参考文献>

- ・幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説（2014）
- ・子ども理解からはじめる感覚統合遊び（2024）
- ・セラピストのための子どもの発達ガイドブック（2025）
- ・発達が気になる子の感覚統合遊び（2024）

探求心を伸ばすための環境構成の工夫

～手作りビオトープを通して～

伊是名村立伊是名幼稚園 教頭 伊禮 修平

I テーマ設定の理由

近年、生活様式の変化やデジタル機器の普及などにより、幼児が身近な自然の中で動植物と継続的に関わる体験は減少傾向にある。このような社会背景の中、幼稚園等においては子どもが自然や命と直接触れ合い、実体験を通して豊かな感性や探究心を育む環境を構成することがこれまで以上に求められている。

本園は、4歳児7名、5歳児13名の計20名による2年保育を行っており、周囲を自然に囲まれた恵まれた環境を有している。園庭では、季節ごとに昆虫や植物との出会いが見られ、子どもたちは自然に親しむ姿を日常的に見せている。しかしながら、動植物を育てたり観察したりする関わりは、その日の偶発的な体験にとどまり、主体的・継続的な活動へと十分につなげられていない現状がある。

幼稚園教育要領「環境」の領域（内容の取り扱い（3））では、「動植物への感動を伝え合い、共感することで自分から関わろうとする意欲を育てるとともに、命を大切にす気持ちや公共心、探求心などが養われるようにすること」と明記されている。

そこで、園庭の一角に手作りビオトープを設置し、動植物を育て・観察できる環境を構成し直すことで、子どもたちが自然と日常的に関わることを可能にし、生き物の誕生・成長・死といった自然のサイクルを体験しながら命の大切さを学び、さらに肥料の有無や日照条件による生育の違いなど、実験的な活動にも取り組むことができるかと予想する。

このような探究的な活動を通して、子どもたちは好奇心や思考力を育み、また、友だちと協力しながら取り組む中で、主体性や協働性も自然に育まれていくと考え、本研究テーマを設定した。

II 課題に対する具体的な手立て

1. 手作りビオトープを設置し、水辺・土・植物が共存する環境を構成する。
2. 餌の量や日照条件、灌水の有無などを比べる活動を取り入れ、試したり考えたりする体験を行う。
3. 子どもが主体的に関わろうとする意欲や思考の深まりを支える。
4. 実践後には成果と課題を振り返り、次年度の保育計画や環境構成の改善につなげる。

III 課題解決に向けた取組（実践）

実践事例1【ビオトープの設置】～トロ船を使った池の製作（8月）

【園の実態】

本園には、これまで池や水辺の生き物を飼育・観察できる環境がなく、子どもたちが水辺の自然に触れる機会は、雨上がりの水たまりなど偶発的な体験に限られていた。そのため、水辺の生き物に興味をもっても、継続的に関わったり、変化を追って観察したりする経験が十分にされていない状況であった。

【教頭の願い】

園の実態を踏まえ、教頭として、子どもたちが水辺の生き物の飼育を通して、自然や命に日常的に触れ、気づきや疑問を深めながら主体的に関われる保育環境を整えたいと考えた。

【場所の選定】

設置場所は、園庭の中でも子どもが日常的に行き来しやすく、活動の合間に自然と立ち寄れる位置とした。あわせて、日照や風通し、安全面を考慮し、日中に適度な日陰が確保でき、教師の目が届きやすい場所を選定した。

【製作の過程・池の内容】

池の土台にはトロ船を使用し、底に土や砂利を敷くことで水が濁りにくい構造とした。製作は、安全と十分な作業時間を確保するため、夏休み期間中に行った。また、トロ船がむき出しのままでは人工的な印象が強いため、周囲を板で加工した木枠で囲い、園庭の自然環境と調和するよう工夫した。

【活動の様子】

池の完成後、メダカとタイワンキンギョを迎え入れ、日々の保育の中で継続的に観察活動を行った。メダカに関しては、じっくりと観察するために、ケースに移して、成魚と幼魚の体の大きさを比べたり、オスとメスのひれの形の違いを比べながら観察を深めた。観察した内容は絵にしてに表し、違いをより認識しやすいようにした。



※トロ船で池の製作開始

※木枠で囲み、自然と調和

※元気かなと観察中

※メダカの特徴を観察中

【教師の援助】

観察の際には、「どんな違いがあるかな」「ひれのかたちはどうなってるかな？」などの声掛けを行い、気付いたことや疑問を言葉にできるよう援助した。また、すぐに答えを伝えるのではなく、子ども同士で考えたり、何度も見比べたりする時間を大切にし、探究が深まるよう関わった。

【幼児の変容】

本実践を通して、子どもたちは水辺の生き物（メダカ、タイワンキンギョ）に対して親しみをもち、給餌などを通して、日常的に関わろうとする姿が見られるようになってきた。

また、成魚と幼魚の体の大きさ、ひれの形などに着目し、オスとメスの違いを比べながら見る中で、生き物の特徴を捉えようとする姿が見られ、探求心の向上に繋がった。

実践事例2【花を日向と日陰で育てるのは、成長に違いが出る？】（11月）

【園の実態】

本園では、これまでも花や植物を育てる活動は日常的に行われてきたが、灌水や草取りなどの世話が中心となっており、対象に働きかけながら「見つける」「気付く」「考える」「試す」「工夫する」「表現する」といった思考を働かせる活動は継続的には行われていなかった。そのため、植物の成長を当たり前のものとして捉え、育つ理由や条件について考える機会は限られていた。

【教頭の願い】

教頭として、子どもたちが植物の成長を「世話をする対象」としてだけでなく、「不思議さに気付き、考え、確かめる対象」として捉えられるような環境を構成したいと考えた。環境条件の違いによる変化を比べる活動を通して、幼児期なりの探究心や思考力が育まれることを願い、本実践を計画した。

【環境構成】

同じ種類の花（ベゴニア）を用意し、園庭の中で日当たりの良い場所と日陰になる場所の2か所に分けて鉢を設置した。土や灌水の量は同じ条件とし、日照の違いによる成長の変化に気付きやすい環境にした。

【活動の様子】

約1ヵ月間、灌水しながら観察を行ったあと、両方の鉢を並べ違いに気付く時間を作った。花の量や葉の大きさ、色の違いなどを比べ、日向で育てた花と日陰で育てた花の違いについて考え、絵に表すことにした。



右が約1ヵ月、日陰で育てたベゴニア。ほぼ成長しておらず、その差は歴然。花（ベゴニア）が育つのに必要なものは？という質問に、「土」「水」「太陽」と自分の考えを表していた。



【教師の援助】

教師は「どうして大きさに差があるのかな？」「どっちが太陽から元気をもったのかな？」など、違いに目を向けられる声掛けを行った。すぐに答えを示すのではなく、気付いたことを言葉にする時間を大切にし、子どもの予想や考えを受け止めながら援助を行った。

【幼児の変容】

本実践を通して、子どもたちは花の世話をするだけでなく、「見つける」「気付く」「考える」といった姿が少しずつ見られるようになった。

IV 実践の振り返り

【成果】

ビオトープの設置や花の栽培活動を通して、子どもが自然や生き物に継続的に関わる保育環境を整えてきた。その結果、変化に気付き見比べたり、不思議さを感じて考えたりする姿が育ってきている。

【課題】

生き物や植物の管理や、教師間での視点や知識の共有については、今後も計画的に取り組んでいく必要がある。

【実践を通じた自身の気付き等】

本実践を通して、幼児期の自然体験は環境を意図的に構成することで、子どもの気付きや探究が深まることを実感した。教頭として環境づくりの基盤を整えることで、子どもの姿を共有しやすくなり、保育の広がりにつながった。今後も、子どもの姿から保育を振り返り、園全体の保育の質向上に生かしていきたい。

V 今後の実践に向けて

今後は、ビオトープや花の栽培を点の活動で終わらせず、季節の移り変わりと関連付けた年間を通じた実践へと発展させていきたい。教頭として、実践の意図や子どもの育ちを職員間で共有し、自然との関わりを大切にしたい保育が園全体に広がるよう、環境構成と研修の充実に取り組んでいきたい。

〈主な参考文献〉

- ・ 文部科学省 2018 『幼稚園教育要領解説』 フレーベル館
- ・ 文部科学省 2024 『幼児教育と小学校教育がつながるってどういうこと？』 東洋館
- ・ 秋田喜代美、石田佳織、辻谷真知子、宮田まり子、宮本雄太 著 2022 『園庭を豊かな育ちの場に』 ひかりのくに

身近な人・物・環境に主体的に関わり、生活や遊びを充実させるための援助の工夫

— 日々の生活や遊びを通して —

読谷村立喜名幼稚園 教諭 伊波 明日美

I テーマ設定の理由

近年、幼児を取り巻く環境は多様化しており、幼稚園においては、幼児一人一人が身近な人や物、環境に主体的に関わりながら生活や遊びを創り出していくことが、これまで以上に求められている。幼稚園教育要領においても、「環境を通して行う教育」を基本とし、幼児が自ら環境に関わる中で学びを深めていくことの重要性が示されている。

本園は5歳児（1年保育）2クラス35名（男児：16名 女児：19名）が在籍しており、話を聞いてもらうことを好み、自分の思いや経験を言葉で伝えようとする姿が多くみられる。友だちや教師との関りを楽しみながら、会話を通して人間関係を築こうとする姿が育ってきている。また、興味・関心を持って遊びや活動に取り組み身近な環境に目を向けながら意欲的に関わろうとする姿も見られる。しかし、遊びに取り組む中で、遊びがその場限りとなりやすく、友だちとの関りの中で、遊びをつなげたり、発展させたりするまでには至らない場面が多くみられる。

このような園児の実態を踏まえ身近な人・物・環境に主体的に関わりながら、生活や遊びをより充実させていくための援助の工夫について探る必要があると考え本テーマを設定した。

II 課題に対する具体的な手立て

1 遊びを通した総合的な指導の工夫

遊びを中心とした生活の中で、幼児が身近な人・物・環境に主体的に関わる事を大切に、遊びを通して多様な経験が関連し合うような総合的な指導を行う。幼児の気づきや興味を次の遊びや活動へとつなげ、遊びの流れが継続するよう援助していく。

2 経験の積み重ねを意識した関り

遊びの過程において、「感じる」「気づく」「考える」「工夫する」「興味を持つ」「関わる」といった経験が連続して生まれるよう、幼児の気づきや試行錯誤を大切にした関りをしていく。

一つ一つの経験を受け止め、次の遊びへとつながるよう援助していく。

3 興味・関心を引き出す環境づくり

子ども一人一人の興味や関心に寄り添いながら、試行錯誤し遊びを深めていけるよう、素材や用具の配置を工夫していく。また、すぐに答えや方法を示すのではなく、幼児自らが考え工夫できる環境を整えていく。

III 課題解決に向けた取組（実践）

《実践事例1 カバマダラとの出会いを通して》

【幼児の姿】

園庭で遊んでいる中で、幼虫を見つけ、「イモムシ」「どのような蝶々になるのか」と興味を持った。しかし、幼虫の名前や成虫についてわかる子がおらず、疑問を持ちながらも遊びがそれ以上広がらない様子が見られた。

【教師の願い】

身近な自然に主体的に関わり、疑問に思ったことを友だちと共有しながら、調べたり確かめたりする経験をしてほしい。また、虫にはそれぞれ名前がある事を知り、分からないことがあった時に、教師や友達と協力して解決しようとする姿を育てたいと考えた。



【教師の援助・環境構成】

幼児の疑問に寄り添いながら、絵本の部屋に虫が掲載されている本や図鑑がある事を伝え、子ども達と一緒に本を開いた。特徴を確認しながらページをめくり、友だち同士で予想を伝えるような雰囲気づくりを行った。また、すぐに答えを示すのではなく、幼児自信が調べて見つけられるよう援助した。

【幼児の変容】

今回の経験を通して、子ども達はカバマダラに限らず、様々なイモムシの名前や成虫になった姿にも関心を持つようになった。また、他の昆虫についても「この虫の名前はなんだろう」「成虫になるとどうなるのか」と自ら疑問をもち、図鑑を使って調べようとする姿や、友だちと一緒に観察を行う姿が見られるようになった。分からない事に出合った際に、教師に尋ねるだけでなく、図鑑や絵本を活用して確かめようとする姿勢が育ち、主体的に学びを深めていく姿へと変容していった。



《実践事例2 泥遊びを通して》

【幼児の姿】

入園当初から、砂場で砂を触ったり掘ったりする遊びを楽しむ姿が見られていた。土山が導入されると全身を使い、泥だらけになりながら、土の感触を楽しむ姿が見られ、感触を味わうことが中心となり、遊びが深まりにくい様子が見られた。

【教師の願い】

土や砂の性質や感触の違いに気づき、試したり考えたりしながら遊びを深めてほしい。また、友だちと関わりながら、自分達で工夫し、遊びを継続・発展させていく経験につなげたいと考えた。



【教師の援助・環境構成】

幼児の遊びに寄り添いながら、「水を多く入れるとどうなるかな」「砂を混ぜるとどうなると思う?」など、考えるきっかけとなる声掛けを行った。また、土・砂・水の量を調整できるように容器やスコップふるいなどの道具を用意し、子ども同士で試せる環境を整えた。さらに、すぐに方法を教えるのではなく、幼児が自ら試行錯誤できるよう見守り、気づきが生まれた場面では、言葉にして共有できるよう援助した。

【幼児の変容】

次第に遊びがままごとや泥団子づくりへと発展し、言葉のやり取りを楽しみながら関わる姿が見られるようになった。水を多く混ぜると柔らかくなる事、水を少なくしたり砂を加えたりすると固くなる事に気づき、試しながら遊ぶ姿が見られた。また、「きれいな丸を作るにはどうしたらよいか」「大きい団子や割れない団子を作るにはどうしたらよいか」と友だち同士で考えたり競争したりしながら、遊びを継続・発展させていく姿へと変容していった。

《実践事例3 運動遊び・縄跳びへの挑戦を通して》

【幼児の姿】

様々な運動遊びに取り組む中で、体を動かす楽しさを感じ、縄跳びにも挑戦する姿が増えてきた。一方では、運動遊びに対する意欲や関り方に個人差が見られ、特に縄跳びに対して、興味や自信の有無によって取り組み方が異なっていた。

【教師の願い】

やったことのない事や、苦手な事にも前向きに挑戦する気持ちを育てたい。また、できるようになった達成感を十分に味わい、次の目標へと意欲的につなげてほしいと考えた。

【教師の援助・環境構成】

努力の過程が分かるよう、チャレンジカードを用いて取り組みの様子を可視化した。また、前跳びが10回跳べるようになった園児には「縄跳び名人」として個人縄を渡し、20回跳べるようになったり、後ろ跳びや片足跳び等の技ができるようになったりした際には、努力の証として縄跳びにキラキラテープを付け、達成感を味わえるようにした。なかなか挑戦しようとならない子に対しては、無理に参加を促すのではなく、友だちの挑戦を見せたり、回数を一緒に数えたり、応援したりするなど、安心して関わられる役割を用意した。また、縄を回す、一緒に教師と2人跳びをする等、個々の実態に応じた関わり方をし、意欲が高まるまで見守りながら声かけを行った。その結果、自分なりのペースで挑戦しようとする姿が見られるようになった。



【幼児の変容】

次第に、自分のペースで運動遊びや縄跳びに関わろうとする姿が見られるようになった。飛べる回数や技にとらわれるのではなく、「やってみよう」と挑戦する気持ちが育ち、友だちの頑張りを応援したり、できるようになった喜びを共有したりする姿へ変容していった。

IV 実践の振り返り

成果

子ども達が意欲的に活動に参加し、自ら遊びを生み出し広げていく姿が見られるようになってきた。また、友だち同士で関わり合いながら試行錯誤を重ね、自分なりに考え、工夫しながら遊びを深めていく姿へと成長していることがうかがえた。

実際に触れて感じる体験を大切にすることで、物や環境の性質や特性に気付き、遊びの中から新たな発見や学びが生まれるようになった。さらに、達成の喜びを味わう経験に加え、教師の意図的な声かけや友だち同士の励ましが相互に作用することで、子ども達の意欲が高まり、次の挑戦へと向かう姿が広がってきた。

課題

子ども一人一人の育ちやペースを大切にしたい関りの重要性が明らかになる一方で、支援を必要とする幼児も含め、個々の姿に応じた関りや援助を、より計画的・継続的に行っていく必要性が課題として見えてきた。また、子どもの「やってみよう」という気持ちをその場限りのものにせず、遊びや活動が継続し、次の学びへと発展していくよう、環境構成や教師の援助の在り方について、今後検討していく必要のある課題が見えてきた。

V 今後の実践に向けて

子ども一人一人の育ちやペースに応じた関りを、より計画的かつ継続的に行っていく必要性が課題として明らかになった。今後は、日々遊びや活動の中で見られる子どもの姿を丁寧に捉え、子に応じた援助や関りを意識的に積み重ねていきたい。また、子どもの「やってみよう」という思いに寄り添いながら、遊びや活動が継続して広がっていくよう、環境構成や教師の援助の工夫を行い、寄り添いながら主体的な学びを支えていきたい。

〈主な参考文献〉

- ・文科科学省 2018年 「幼稚園教育要領解説」 フレーベル館
- ・公益社団法人全国幼児教育研究会 2017年 「明日の保育が楽しくなる実践事例集 ワクワク！ドキドキ！が生まれる環境構成～3. 4. 5歳児の主体的対話的で深い学び～」 ひかりのくに
- ・徳田克己監修 2013年 気になる子の保育のための運動遊び・感覚遊び ―その具体的な指導法― チャイルド本社

「架け橋期」の自己充実を育む環境構成と援助の工夫

— 子どもの育ちを共に考えた教師間の連携を通して —

読谷村立 読谷幼稚園 教諭 当真 麻理奈

I テーマ設定の理由

近年、乳幼児期からの質の高い教育がその時期の発達にとって重要であることや、その後の人生において長期にわたって多面的に良い効果をもたらすことなどが明らかにされている。

幼児教育では幼児が思わず関わりたくなるような魅力的な環境を意図的・計画的に構成し、幼児が主体性を十分に発揮しながらその環境に関わる遊びや生活を展開することにより幼児の発達を促す「環境を通して行なう教育」を基本としている。その中で教育的な意図をもって計画的に構成された環境の下、遊びを通して多様な体験をしながら、小学校以降の生活や学習の基盤となる芽生えを培うことができるよう工夫している。また小学校においてはその芽生えをさらに伸ばしていくことが必要であり、そのためには幼児教育と小学校教育を円滑に接続する事が重要となる。しかし、実際には幼児教育と小学校教育には教育課程の構成原理や指導方法等の様々な違いがあり、円滑な接続に至るまでに様々な課題を乗り越えなければならない。さらに小学校入学後の子どもが幼児教育と小学校教育の違いを感じ、戸惑いや悩みを抱えこむことによりその後の小学校での学習や生活に支障をきたす恐れがあることから、低学年の不安を感じている子どもへの支援の観点からも幼保小の接続期の教育の充実に取り組むことが重要だと感じる。

国においては「幼保小の架け橋プログラム」を推進しており、読谷村でも校区において「架け橋期カリキュラム」を作成し、自走・持続できる連携体制づくりを目指している。

このことから子どもたちの自己充実を保障するための環境構成、教材研究を進めていくと同時に小学校以降で進められている教育の方向性（個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実し、主体的・対話的で深い学び）が子どもそれぞれの興味、関心や一人ひとりの個性に応じた多様で質の高い学びを引き出す観点から幼児教育の「環境を通して行なう教育」の考え方とつながっていることに着目し、教育実践の研究を進めていきたい。そのなかで見えてきた育ちの姿を小学校の先生と共有し理解を深め、幼児教育と小学校教育の円滑な接続を目指したいと考え、本テーマに設定した。

II 研究内容

今年度初め、幼小連携のスタートにあたり、幼稚園と小学校の双方の教師が子どもたちの学びや育ちをどう繋ぐかを学ぶ機会を持ち、そこで園長の「子どもの主体性を尊重する」という方針に共感し、子ども達が「やってみたい」と思う主体的な活動を支えるための連携を目指すことにした。

幼小連携を進める上で、それぞれの教師が幼稚園での経験を小学校にどう繋ぐか、子ども達が安心して自己発揮できるようにするための方法を考えることが大切だと認識することができた。しかし、これまでの経験から交流活動が増えることで「大変だった」「今年だけ」といった声も聞かれ、持続的な連携に至らないことが課題だった。そこで本研究では園や学校の状況、教師の配置、子ども達の実態に左右されずに無理なく継続できる形での幼小連携を計画し、子どもの学びと発達を架け橋期で繋ぐことを目的とし取り組んだ。

○幼児期の教育は「環境を通して行なうこと」が基本であり、小学校では「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を目指している。そこで双方に共通する「環境を通した連携」に焦点を当て、子どもの主体的な活動を支える環境構成と援助の工夫について研究を進める。

○互いの教育を理解し合うことを目的に幼稚園と小学校の教師が授業・保育の見学や懇談をおこない、幼稚園で何が育ち、どのような援助がなされているのか、小学校の授業がどのように展開されているのかを実際に見聞きすることで幼児期と児童期の学びが連続していることを再認識する。



互いの環境を知り、教育観を共有する

○教室前のオープンスペースの活用について、小学校教諭と幼稚園教諭が協働で検討し、環境構成の工夫を計画し、その過程で小学校の教師が幼稚園の環境を見学し、子ども目線に立った掲示や構成、学びにつながる遊びの意図を共有することで教育観の共通理解を深める。

Ⅲ 実践事例

事例1 魅力あるオープンスペースを目指して～主体的に関わる環境を通して探求心を深める～

幼稚園の見学後、1年生のオープンスペースにおたまじゃくしの観察コーナーを設けたと聞き、1年生の反応や様子を見に行った。子ども達から「幼稚園の時も観察したよね」「その時にヤゴもいて一緒に観察して面白かったよね」といった声が聞かれ、幼稚園での経験が温かい記憶として子ども達の中に残り、それが小学校での学びや会話の中に自然に表れている姿にふれ嬉しく思った。

幼稚園の経験を思い出しながら「今年はヤゴに会ってない」と話すと、1年生のKくんが「家の近くにヤゴいるから幼稚園に持っていきようか」と提案し、実際に持参してくれた。Kくんの思いを大切に、園の環境に取り込み、観察コーナーを設定した。すると園児たちからも「これなあに？」と新たな出会いに興味津々になって観察し始めた。ヤゴの観察を通して、園児にも興味が広がり、双方の学びが連続する貴重な体験となった。



幼稚園の観察スペース



1年生オープンスペースの観察コーナー

本事例を1年生担任と共有したことにより、Kくんの興味・関心や得意な事が小学校の担任やクラスの友達にも伝わった。その結果「虫のことならKくんに聞こう」という雰囲気が生まれ、教師や友達から頼りにされる経験がKくんの自己肯定感の向上につながっている様子がみられた。さらにKくんがヤゴを持参した行動からは、幼稚園での心地良い体験が肯定的な記憶として残っており、その経験がKくんの思いにつながっていることがうかがえる。幼児期の経験が小学校での学びと自然に結びつき主体的に関わろうとする姿へと発展している点は、幼小接続における学びの連続性の重要性を改めて感じさせるものである。

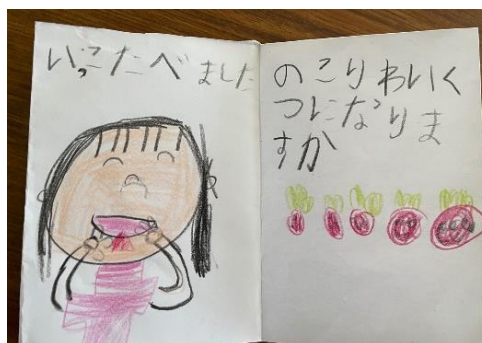
このように環境に主体的に関わる子どもの姿を幼稚園と小学校の教師が共有する事で、互いの教育観や子ども観において大切にしたいことが見えてきた。また、子どもの姿からみえてきた「学びと育ちの芽」を幼稚園、小学校それぞれの環境へと戻し、さらに広げていくことで新たな体験や学びの展開に生かすことがで

きた。「主体的に関わる環境」を中心に子どもたち、それぞれの教師が互いに響き合いながらつながっていくことを改めて実感した。

事例2 思いが花ひらく環境を求めて～創造力を育む環境から学ぶ意欲へつなげる～

子どもたちの興味関心や学習内容に合わせ、どのような環境がより豊かな体験につながるのかについて話し合いを重ね、オープンスペースの環境を更に再構成することにした。

1年生担任の思いから、学習に合わせた環境構成として、国語「おおきなかぶ」の音読劇に関連した絵本作りやお面作りコーナーを設置した。その際に幼小連携担当だけでなく学年で意図や安全面の配慮についても検討し、揃えることで子どもが主体的に活動に取り組むことができた。



1年生教室前オープンスペースでの絵本作り・お面作りコーナー

絵本作りでは、普段学習に苦手意識をもつ子が手先の器用さを活かしてミニチュア絵本を作り、友達に認められ、肯定されることで自信につながり、学習意欲が高まる姿がみられた。教師も子どもが自発的に関わる環境が学びを引き出すことを実感し、連携への意識が1学年全体に広がっている。

これらの取り組みを通して、幼稚園では保育環境や教材の工夫に活かすことができ、算数の単元「いろいろなかたち」に対応する教材を作成し、形の名称を知るきっかけや文字への興味を引き出す工夫も加えた。幼稚園で蒔いた「学びと育ちの種」が小学校就学後に芽を出すことを観察しながら、継続した幼小連携の重要性を確認した。



算数の単元「いろいろなかたち」に対応する教材



文字に親しむことができる環境

IV 実践の振り返り

今回の成果として、主体的に関わる環境を整えることで子ども自身の「学びたい」「育ちたい」という自己充実を引き出すことができたことが第一に挙げられる。また、環境に関わる子どもの姿を通して教師が気づき、子ども理解が深まることで教師の意識にも変化が生まれた。

小学校では、単元に関連した環境づくりが子どもの学びを深め、無理なく年間計画を立てて継続できるという意識の変化も確認できた。さらに、幼稚園と小学校が学年全体で子どもを中心に対話、協働する機会が増え、連携体制の強化につながった。

V 今後の実践に向けて

今後は小学校では年間を通し、単元にもつながる掲示物や環境構成を設置し、全ての子どもが関心を持てる工夫を継続し、幼稚園としては環境を通じた連携を進めつつ、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を

踏まえた事例研究やスタートカリキュラムの検討、編成に共に取り組みたい。そして、子どもの育ちや学びつなぎ、幼稚園と小学校双方の教育理解を深めながら、持続、自走できる幼小連携を目指して取り組んでいきたい。

〈主な参考文献〉

- ・文部科学省 中央教育審議会 初等中等教育分科会 幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会
「学びや生活の基盤をつくる幼児教育と小学校教育の接続について～幼保小の協働による架け橋期の教育の充実～」
- ・文部科学省 初等中等教育局 視学官 横山 真貴子
「幼児教育の質の向上・幼児教育と小学校教育との接続について」
- ・文部科学省 「幼児教育と小学校教育がつながるってどういうこと？」

健康な心と体を育み食への興味関心がもてる援助の工夫

—身近な環境を通して—

沖縄市立室川幼稚園 教諭 氏名 川畑 安威美

I テーマ設定の理由

沖縄県はかつて「長寿県」として知られ、野菜や海藻、たんぱく質などを多く摂る食事、伝統的な食文化により平均寿命が全国で最も長かった時期があった。しかし、近年では、平均寿命の順位が下がり、全国でも下位に位置している。核家族化や両親共働きにおける多忙化により、家庭での食に対する意識が低くなっていることが要因の一つではないかと考える。このような時代の変化から幼児の食生活も乱れつつあり、本園での活動にも影響を受けている。十分な量の食事や栄養バランスの良い食事を摂っていないことから、活動中に空腹を訴えたり、体を動かし遊んでいてもすぐに疲れて休んだり、活動や遊びに意欲的ではない子がいる。

本学級は、5歳児11名、4歳児3名、計14名が在籍しており、ほとんどの子が集団生活の経験があり、いろいろな遊びに興味をもち、友達と積極的に関わろうとする子が多く、友達を誘い合ったり、相談をしながら遊びを進めたりする姿が見られる。園庭の草花や栽培物にも興味をもち、喜んで世話をすることも多い。また、家庭の食事だけではなく、多くの食材を使った給食を経験している子がほとんどであるが、好き嫌いや偏食、食への無関心など、食事に対し関心が低く、野菜を食べることが出来なかったり、食事に長時間要したりなど課題がみられる。

そこで、前年度の研究成果や課題を踏まえ、幼児の姿から理想の幼児像や研究内容について考えるとともに幼稚園教育要領に示されている「健康」の領域について理解を深め、給食時間や日々の遊びなどの身近な環境や栽培活動を通して、食への興味関心がもてるような援助の工夫を研究したいと考え本テーマを設定した。

II 課題に対する具体的な手立て

- 1 幼児理解と育ちの読み取り（観察記録をとり、幼児の実態を把握する。）
- 2 理論学習（領域「環境」「健康」の理解を深める。）
- 3 指導内容の研究（食への興味関心を育む環境構成と援助を工夫する。）
(幼児の実態を踏まえ育てたいこと、評価の視点を明確にし、週、日案を作成する。)
- 4 指導計画の見直し・改善（幼児の実態・育ちの姿を把握する。）
(生活の流れ等を踏まえ、教育課程・指導計画の見直しを図る。)
(指導計画を見直し、指導改善に生かす。)
- 5 保育実践

Ⅲ 課題解決に向けた取組 (実践)

実践事例1：体をつくる食べ物や栄養素について、興味関心をもとう。(7月)

《幼児の実態》

歌をうたったり、絵本をみたりし、多くのことに興味をもって園生活を送る幼児が多い。しかし5月に園での給食が開始してから、食に関しての課題が見られるようになった。好き嫌いが多く野菜に全く手を付けなかったり、食事に時間がかかったり、朝ごはんを食べずに登園する幼児がいる。

《教師の願い》

食に興味関心を持ち、給食時間を楽しく過ごしてほしい。

《師の援助と環境構成》

赤(血や肉をつくる)、黄(力になる)、緑(風邪をひきにくくする)の栄養素の食材を歌や絵本などから楽しんで学び、食に興味関心をもてるようにする。給食献立表に記載されている献立に、赤、黄、緑の色分けをして、視覚的にも栄養素が分かりやすいように掲示をし、給食の献立や食べることに興味をもって食への意欲がわくような環境を整えていく。



栄養素の表示

月	火	水	木	金
1	2	3	4	
5	6	7	8	9
10	11	12	13	14
15	16	17	18	

栄養素の色分けをした献立表

えいようのうた

① からだをつくるの なんでもしょう
それは あかの たへものよ
おてくた さかなま まめ たまご
おほしにやう「さかなの のりわかめ

② ねつや ちがらに なるものは
それは きいろの たへものよ
ごはんじ うどんに いち さとう
あぶらや ばたが エネルギー

③ ちよよしを だすもの なんでもしょう
それは みどりの たへものよ
きやべつに きゆうりに ねぎ だいごん
にんじん かぼちゃに ほうれんそう

④ あか き みどりを とりぞろえ
きんごん たへねは じよふな
うんどう あそびに おてつたい
もりもり かつやく けんきなご

栄養のうた

《幼児の変容》

これまで食に興味がなかった幼児が、このような環境を整えていくことで、給食にどのような食材が入っているのか一つずつ見たり、食材名を友達や教師に伝えたりする姿が見られた。また、体調不良で欠席している友達がいると「緑の食材を食べた方がいいね。」プール活動で疲れが出ると「黄色の食材を食べて元気をつけな」といけな。などの声が出てくるようになり、食材の栄養素を意識し、食の大切さに気付く幼児が多くなった。

実践事例2：米を収穫して、白米と玄米の味、栄養素を知ろう。(11月)

《幼児の実態》

栽培活動に積極的に取り組み、栽培物の生長や変化を楽しんで観察する姿がある。7月から稲を栽培しており、そこに集まる昆虫を観察したり害虫を駆除したりして、米の収穫できる日を楽しみに喜んで世話をしている。しかし、家庭での食事の話や給食の様子から、米よりパンやめん類を好んで食す幼児が多く、給食にでてくる米を喜んで食べようとする姿はあまり見られない。

《教師の願い》

米が収穫できるまでの過程を学び、米を大切に作る気持ちや農業を営む方への感謝の気持ちがもてるようになり、米の美味しさや栄養価を知り、喜んで食すようになってほしい。

《教師の援助と環境構成》

導入では玄米ジュースを作って試食をし、米作りへ期待がもてるようにする。一人ずつプランターを用いて、稲を育てる田んぼを準備することで、稲の観察が身近にでき、親しみをもって育てられるようにする。収穫時には、実際に幼児自身で、稲刈りを行い稲架掛けで乾燥させ、脱穀、粳攪り、精米の順で白米と玄米を分けていく。

実際に精米まで行うことで、今と昔の米作りの違い（労働時間や労働力）を比較したり、収穫までの苦労など考えたりして、米作りの大変さに気付き、米を大切に食べられるようにする。また、玄米と白米をおにぎりにして、味や栄養価について知り、積極的に食べられるようにする。



玄米ジュース作り



稲植え



ヤゴなど生き物の観察

《幼児の変容》

幼児自ら米を育て脱穀、精米作業を行う事で、米を作ることの大変さを知ることができ、米一粒も大切に食べようという気持ちをもつことができた。米の美味しさを改めて感じ、玄米と白米の栄養価の違いを知り、体のために米を積極的に食べようとする姿が見られた。また、食に関してだけではなく、稲を育てることで園庭の様子にも変化が見られた。田んぼがあることで、水辺に生息する昆虫に触れることができ、更に興味をもって関わろうとする幼児が増えてきた。

IV 実践の振り返り

給食の献立から、体に必要な栄養素が考えられて提供されていることや、栽培活動を通して、米を作る事の大変さを知ること、食べ物を大切にしようとする気持ちが芽生えてきた。また、苦手な食材があっても、体のことを考えて食べようとする姿が見られ、食への興味関心へとつながっていったと考える。生活の中において食を意識した環境構成や食への意識を高められるような保育を行うことで食べ物を話題にする子や食べることに喜びを感じる子が増えた。

V 今後の実践に向けて

食への興味関心をもつことができたが活動の一つずつが分断的になっていた。それぞれの活動で季節や行事など関連性のある保育へとつなげていき、幼児の成長過程に合わせながら一年を通して、食に関わるような継続的な保育を意識して取り組んでいきたい。



稲刈り



脱穀

〈主な参考文献〉

文部科学省 2018 『幼稚園教育要領解説』 フレーベル館

総監修：師岡章 2006 『食を育む』 フレーベル館

監修：堤ちはる 2018 『図解でよくわかる新・食育ガイドブック』 株式会社メイト

主体的に活動する幼児の育成

—幼児の興味や関心に寄り添った環境構成の工夫—

北谷町立北谷第二幼稚園 教諭 大城 さゆり

I テーマ設定の理由

幼稚園教育要領「第1章 第1節 幼稚園教育の基本」では「幼児の主体的な活動を促し、幼児期にふさわしい生活が展開されるようにすること。」と明記されている。

幼児期に多様な活動を経験することによって、幼児は生涯にわたる学習意欲や学習態度の基盤となる好奇心や探求心を培い、学びの芽生えを育むことから、幼稚園での遊びを通じた教育は重要な役割をもつと考える。

本園園児の実態として、集団生活に慣れて気の合う友達を誘い合って遊ぶ姿が見られるが、新しい友達に声をかけられずひとり遊びをしている子、教師の側にいる事で安心して生活している子がいる。

そこで、幼児の興味や関心を捉えた環境を構成し、友達や教師と様々な感情体験を共有していくことで、主体的に活動する幼児の育成につながるのではないかと考え、本テーマを設定した。

II 課題に対する具体的な手立て

1 幼児の興味・関心を把握するための関わり

日々の遊びの様子やつぶやきを丁寧に観察し、何に興味を持っているのかを把握する。幼児の思いや経験をくみ取り遊びや環境構成に反映させる。

2 主体的に関われる環境構成の工夫

幼児自ら遊びを選択できるように、コーナー遊びを充実させ、素材や用具を手に取りやすい位置に配置する。また、遊びが継続・発展するように、幼児の姿に応じて環境を柔軟に見直す。

3 友達との関りを促す援助

教師との関わりを好む子、一人で遊んでいる幼児も安心できるよう寄り添い、幼児のペースを大切にする。教師が遊びの橋渡し役となり、友達との関りが生まれるきっかけをつくる。

4 教師の援助の在り方の工夫

幼児の気づきや考えを引き出す声掛けを心掛ける。必要に応じて見守りや共感を行い、幼児が「やってみたい」と思える気持ちを大切にする。

5 振り返りと共有の場の設定

活動後に振り返りの時間を設け、楽しかったことや発見したことを言葉で表現できるようにする。教師や友達と経験を共有することで、次の主体的な活動につなげる。

III 課題解決に向けた取組 (実践)

◆ 実践事例1 『夏遊び楽しいな!』

【幼児の姿(5、6月)】

- ・虫に興味を持ち、捕った虫を虫かごに入れて友達と一緒に観察する姿が見られる。
- ・友達と一緒にアサガオの花や様々な葉っぱをすり潰して水に色がつくことを楽しむ姿が見られる。

【教師の願い】

- ・身の周りの夏の自然に興味をもち、様々な方法で関わって遊ぶことを楽しんでほしい。

【教師の援助と環境構成の工夫】

◎色水遊びコーナー

- ・テーブルを用意しコップ、ペットボトル、ざる、ボール、じょうご、おたま、スプーン

ン、ストロー等を取りだしやすいように準備する。遊びに使っていい花を確認する。作った色水を置く場所を子供と考える。

◎砂、泥遊びコーナー

- ・土山コーナーの雑草を抜き、泥遊びができるスペースをスコップで掘り返しておく。
- ・テーブルやたらいを用意し、水を足したり、泥で絵を描いたり様々な経験ができるようにする。
- ・とい、バケツ、スコップ、皿、コップ等を子供の動線を見ながら取り出しやすい場所に準備する。

◎泡遊びコーナー

- ・色水遊びの近くにテーブルを用意し、石鹸、削り器、ボール、泡だて器、スポンジ、へら、スプーン、ストローを用意する。

◎虫捕り、虫の観察コーナー

- ・教師も一緒に虫捕りを楽しみながら、思いに共感する。
- ・捕った虫の観察ができるよう机と椅子、図鑑等を必要に応じて子供達と準備する。



【幼児の変容】

- ・捕った虫を「観察したいから図鑑外に持っていってもいい？」と友達と園庭で図鑑を広げ捕ってきた虫を見ながら飼い方が載っているページを見たり、虫の名前を調べたりする姿も見られるようになってきた。
- ・土山の上から水を流し、川が出来ていく様子をずっと観察する子、「気持ち悪い」と初めはなかなか触ろうとしなかった子も、教師や他の子が遊んでいる様子を見て足を泥に置いて遊び始める姿が見られるようになった。

◆事例2 『お化け屋敷へようこそ！』

【幼児の姿（8、9月）】

- ・気の合う友達と一緒に段ボールを使って、お化け屋敷遊びをする等夏休みの経験を遊びに取り入れて遊ぶ姿が見られる。
- ・ドッチボール遊びを楽しみにし、友達同士で教え合いながら遊びを楽しむ姿が見られるが、ルールを守らずトラブルになることがある。

【教師の願い】

- ・友達と一緒に考えやイメージを伝え合いながら遊びを進めることを楽しんでほしい。

【教師の援助と環境構成の工夫】

◎どんなお化けになりたい？

子供達のイメージするお化けは何か、どのようなお化けになりたいか話し合う。

◎衣装について

子供達から出てきた種類のお化けを、写真などで提示し、本物に近づけたり、お化けのイメージを膨らませたりしながら衣装づくりができるように援助する。

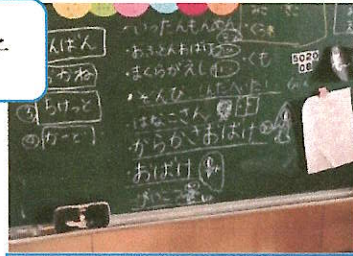
◎仕掛けや内装づくり

友達同士で考えやイメージを出し合いながら、必要な道具を取り出して作れるようにしてお化けがどこから出てくるか、子供達と演出を考えながら仕掛けや内装を作っていく。

◎順路について

どこに度のお化けのコーナーを作るか子供達と話し合い、入り口から出口までの順路を考える。地図などを書いて全員で共通理解して進められるようにする。

準備の様子



トイレの花子さんは
ここにころう！



話し合ったことを具体的にイメージ化していく

【幼児の変容】

- ・子供達と相談し一人一人の考えを取り入れながら活動を進めてきたことで、子供達が生き生きと意欲的に活動に取り組む姿がみられた。
- ・他のクラスや先生方がお客さんとして、お金や財布を作ったりして参加することで、遊びが深まり充実して活動を進めることができた。
- ・お化け屋敷を終えた後、帰りの会の創作ダンスで友達同士スクラムを組んで踊っている姿から仲間意識が深まり、達成感を味わっている様子が感じられた。

IV 実践の振り返り

- ・子供達の興味や関心がどこに向いているか観察し、子供達から始まった遊びをきっかけに実践を行ったことで、子供達が生き生きと自分のやりたいことを伝え合ったり、相手の思いを受け入れて、子供達同士で主体的に遊びを展開する姿が見られた。
- ・日々の幼児理解に努め、子供の興味関心を捉えた環境を構成したことで、個々の遊びから、友達の輪が広がり、友達同士会話をしながら遊びを楽しむ姿が見られるようになった。

V 今後の実践に向けて

- ・子供達一人ひとり今何に興味があって何を実現したいのか子供達のつぶやきをよく聞き、日々の記録をもとに、幼児理解に努めながら保育を進めていく。
- ・保育のねらいに対して評価をし、反省を次の保育に活かしていく。
- ・人的環境である教師が子供と共に遊びを楽しみ、子供の思いに共感し、子供と一緒に相談しながら保育を進めていく。

〈主な参考文献〉

文部科学省 2018年『幼稚園教育要領解説』 フレーベル館

岡田春奈 2019年春・秋『これからの幼児教育』ベネッセ教育総合研究所

友達の良さに気づき意欲的に活動する子の育成

—友達や年長児との関わりを通して—

北谷町立北谷第二幼稚園 教諭 伊禮 春奈

I テーマ設定の理由

中央教育審議会の令和3年の答申「第1部総論1. 急激に変化する時代の中で育むべき資質・能力」の中で、「一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるよう、その資質・能力を育成することが求められている。」と記されており、「他者と協働する」ことの重要性が述べられている。

幼稚園教育要領では、「第1章 第1節 幼稚園教育の基本 3 幼稚園教育の基本に関連して重視する事項」の③の中で「幼稚園生活では、幼児が友達と十分に関わって展開する生活を大切にすることが重要である」と記されており、「相互に関わることを通して、幼児は自己の存在感を確認し、自己と他者の違いに気づき、他者への思いやりを深め、集団への参加意識を高め、自律性を身に付けていく」と述べられている。

本学級は、4歳児（2年保育）21名の学級で、全員が今年度からの入園で家庭保育からの入園児が4名おり、集団生活のルールや友達との関わり方がまだよくわからない子や保育経験がある子でも母子分離が難しく、泣いて登園したり活動中に不安から泣いてしまう子の姿も見られる。そこで、遊びや活動の中で友達と関わる楽しさを味わう経験を重ねることで、友達の良さに気づき喜んで登園し、意欲的に活動したり、自律性を身に付けていくことができると考え、本テーマを設定した。また、4歳児の発達段階についての理解を深め、複数年保育での異年齢の良さを生かした保育についても考えていきたい。

II 課題に対する具体的な手立て

1 4歳児の発達段階、友達との関わりについての理論研究

○人間関係の広がり：「自分」から「友だちと共に」へ（『遊びと生活をひらく 保育内容総論』太田 光洋より要約）

周囲の人々に受容されながら伸び伸びと自己発揮してきた子どもは、次第に友だちに関心が向くようになり、3歳児の終わりから4歳児にかけてお気に入りの友だちができてくると、その友だちに積極的に働きかけ「自分たち」の世界を楽しむようになっていく。4歳児前半くらいになると、友だちのそばにいることや同じことをすることに心地よさを感じ、好きな友だちができたり、自分たちだけで遊んだりする姿が顕著になるが、子ども同士の意思疎通がうまくいかずトラブルになったり、お互いに自己主張を通そうとしてけんかになったりしがちで、保育者は子どもたちがやりたいと思っていることを尊重しながら、コミュニケーションの調整をしたり、必要に応じて遊びが発展するよう手助けをする。子どもの目線に立って辛抱強く見守る姿勢が必要である。

5歳児の保育では、ひとつの目標に向かって友だちと協力して進めていく協同的活動が重視される。それが可能となるためには「友だちと一緒にやって楽しかった」という協同的经验を積んでいることが必要である。そのため概ね4歳児の終わり頃までには、どの子も友だちと遊ぶ楽しさを感じたり、気兼ねなく自分を出せる友だちを見つけたりして、安心できる小集団の中に自分を位置づけてほしいものである。そのために保育者は、一人ひとりの特性や発達の様子に合わせながら、友だち関係が築けるよう保育を展開する。そして気の合う友だちとの関わりを基盤にしながら、時には大勢で遊ぶ楽しさも感じられるような遊びも取り入れる。

2 教材研究、環境構成・教師の援助の工夫

- (1) 子供の興味や発達に合わせた教材、遊びについて研究する。
- (2) 友達と一緒に遊びたいような環境構成や教師の援助の工夫をする。
- (3) 友達の良さに気付けるような教師の関わりや保育実践を工夫する。

Ⅲ 課題解決に向けた取組 (実践)

実践事例① 集団遊び「おおかみさん」を楽しむ中で



【幼児の姿】

- ・運動遊びの時間にみんなで楽しんだ「おおかみさん」が大好きになり、好きな遊びの時間にも教師に「おおかみさんやりたい」「おおかみ(役)になりたい」と伝え、遊びを楽しむ姿がある。
- ・おおかみ役になりたいという自分の思いを通そうとしたり、なれないと泣いたり、おおかみに捕まると泣いてしまう子もいる。



【教師の願い】

- ・大好きな遊びを通して、友達と関わる楽しさを感じてほしい。
- ・勝ったり、負けたりする経験を重ねることで気持ちを調整する力をつけてほしい。
- ・役を決める時に、教師に訴えることが多いので、友達と相談する力をつけていきたい。

【教師の援助・環境構成】

- ・好きな遊びの時間や学級のひとときで、おおかみさん遊びを取り入れ繰り返し楽しめるようにする。
- ・捕まえられると泣いてしまう子には、「捕まることもあるよ」と事前に話し合い、泣かずに気持ちの表現ができるように援助する。
- ・好きな遊びの時間は、年長児も一緒に遊ぶので、おおかみ役を決める時の相談の仕方を年長児に教えてもらえるよう声掛けをし、子どもたちで相談を進められるよう見守ったり援助したりする。



鬼決めて決めよう！
お、に、き、め、お、
に、き、め・・・
(一人一人の足を指
さしていく)



じゃんけんで決めよ
う！
おおかみやりたい人？

はい！

【変容】

- ・おおかみ役も逃げる役も繰り返し楽しむことで、捕まったからと泣くことはなくなり、勝ったり負けたりすることへの気持ちの調整ができるようになってきた。
- ・年長児と一緒に遊ぶ時には、役決めの方(じゃんけん、鬼決め等)を年長児がリードしてくれ、教師が見守ったり援助しながら、子どもたちで遊びを進めようとする姿が見られるようになってきた。
- ・おおかみ役になれないなら遊ばないという子もいたが、学級のみんなで取り組む時間も持つことで、どちらの役になっても気持ちを切り替えて参加できるようになった。

【考察】

- ・「おおかみさん」が子どもたちにとって大好きな遊びだということで、思い通りにならなくて泣いたりすることがあっても繰り返し楽しんで遊ぶことができ、繰り返し遊ぶことを通して、友達と役を交代しながら遊ぶ楽しさや勝ったり負けたりすることへの気持ちの調整をする力をつけていくことができたと考えられる。
- ・教師が援助しながらではあるが、年長児が役を決める方法をリードしながら遊びを進めてくれたことで、困ったことややりたいことをすぐに教師に訴えるのではなく、友達と相談して決めていく経験となった。

実践事例② 運動会での実践



【幼児の姿】

- ・リズムダンスを楽しむ子も多いが、恥ずかしさから踊らない子もいる。
- ・行事に対して緊張が強い子がいる。

【教師の援助】

- ・ペアやチームで協力して競う競技を3つ計画し、運動遊びの時間に全員で全種目をやってみて、どの種目を運動会で披露したいか、どの友達とペアでやりたいか等、子供たちと相談しながら、種目やペアを決定する。
- ・全体の運動遊びでは緊張が強く参加できない子もいたため、学級だけで取り組む時間も持ち、何度も取り組むことで安心感を持てるようにする。
- ・全学級混合でペアやチームを作ることで、年長児にリードしてもらいながら進められるようにする。



【教師の願い】

- ・初めての運動会が少しでも楽しい経験となってほしい。
- ・緊張の強い子も友達と一緒にだと頑張れるという経験となってほしい。

【練習での様子や運動会での子供たちの姿】

- ・ペアでのボール運びリレー、チーム戦の5色綱引き、全体競技の巨大オセロゲーム、隊形移動でのリズムダンスを披露したが、恥ずかしがってなかなかダンスを踊らない子も5色綱引きでは意欲的に競技に参加する姿が見られたり等、出番の中のどこかでは楽しむ姿を見ることができた。
- ・練習では、年長児がペアになった年中児を呼んで一緒に並んだり、隊形移動の仕方を教えたりする姿が見られた。
- ・練習の初めに大泣きしていた子がいたが、練習を重ねる中で泣かずに練習を見ることができるようになり、教師と一緒にだてできるようになったり、笑顔を見せる場面があったり、学級の友達もその子の様子を「今日は泣いていなかったね」等温かく見守る姿があった。

【考察】

- ・例年はかけっこリズムダンスを披露することが多い運動会だが、今年度は園児の実態から緊張が強い子も友達とペアやチームで挑戦する種目だと喜んで参加することができるのではないかと運動遊びで楽しんだゲーム遊びを披露する計画を立てて実践した。ペアや種目を自分たちで決めたことで、練習に意欲的に取り組む姿があり、本番では緊張する子もいたが、どの子にも笑顔で取り組む場面が見られ、初めての運動会に楽しんで参加できたと思う。なかなかペアを自分から決められない子もいたが、その様子を見ていた子が一緒にやりたいと誘ってくれ、友達を思う姿や新たな友達関係の広がりが見られた。

IV 実践の振り返り

【成果】

- ・子供の姿（好きなこと、苦手なこと）を受け止め、援助の仕方を工夫したり、全職員で連携して計画を立てて保育実践することで、子供たちが安心して自己発揮し、教師や友達と関わる楽しさを味わいながら遊びや活動に取り組むことができた。

【課題】

- ・友達との仲が深まり関わりが楽しくなって言葉や行動が荒くなることもあるので、相手の気持ちに気付いたり集団生活での決まり等に気付いて、みんなで楽しく過ごすための態度が身につけていけるよう援助していきたい。

V 今後の実践に向けて

- ・子供の姿を肯定的に受け止め、安心して過ごせる環境、援助を考えて関わっていくことで子供の育ちを支えていきたい。また、職員同士や家庭との連携を大切に、チーム保育を充実させていきたい。

〈主な参考文献〉

- 中央教育審議会 2021年「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）
- 太田 光洋 2022年 『遊びと生活をひらく保育内容総論』 ミネルヴァ書房
- 文部科学省 2018年 『幼稚園教育要領解説』 フレーベル館

研究テーマ 幼児の主体性を育む環境構成と援助の工夫

サブテーマ 一身近な環境に関わり、わくわく遊びこむ体験を通して一

北谷町立 北玉幼稚園 教諭 氏名 島袋 伶菜

I テーマ設定の理由

近年の子どもを取り巻く社会は、少子化、核家族化、都市化、情報化、国際化などの社会の急激な変化を受けて、人々の価値観や生活様式が多様化している一方で、社会の傾向としては人間関係の希薄化、地域社会コミュニティ意識の衰退、過度に経済性や効率性を重視する傾向が見られる。子どもが成長し自立する上で、実現や成功体験などのプラス体験はもとより、葛藤や挫折などのマイナス体験も含め「心の原風景」となる体験が必要不可欠である。しかしながら、少子化、核家族化が進行し、子ども同士が集団で遊びに熱中し、時には葛藤しながら、互いに影響し合って活動する機会が減少するなど、様々な体験の機会が失われている。

そのため幼稚園教育要領第1章の幼稚園の基本に、「幼児が一つ一つの活動を効率よく進めるようになることではなく、幼児が自ら周囲に働き掛けてその幼児なりに試行錯誤を繰り返し、自ら発達に必要なものを獲得しようとするようになることである。つまり、教師主導の一方的な保育の展開ではなく、一人一人の幼児が教師の援助の下で主体性を発揮して活動を展開していくことができるような幼児の立場に立った保育の展開である。活動の主体は幼児であり、教師は活動が生まれやすく、展開しやすいよう意図をもって環境を構成していく。」ことが必要だと記されている。

本学級は5歳児（3年保育）、男児15名、女児15名、計30名が在籍している。明るく素直で穏やかな性格の子が多い一方で、ぼーっと遊びを傍観している子や教師の指示を待っている子も多く、遊びに発展性が見られない。また、これまでの私の保育実践を振り返ると幼児の興味、関心を捉え「これをやりたい」「明日も続きがしたい」と幼児が思えるような環境構成の工夫や援助が十分ではなかったと考える。そこで、幼児一人一人の興味や関心を捉え、幼児が自己を発揮しながら遊びに夢中になり、遊びこむ環境構成の工夫と援助の工夫を探っていきたいと考え、本テーマを設定した。

II 課題に対する具体的な手立て

第1の視点 子どもの視線の先に（興味・関心）に目を留める

子の見ている先（興味・関心、あるいはつぶやき）に着目し、その環境を用意したことにより、その子が主体的に遊ぶように変化してくであろう。子どもの視点に立ってその子が見ている世界を共に見ようとすることを心がける。

第2の視点 環境の構成と再構成

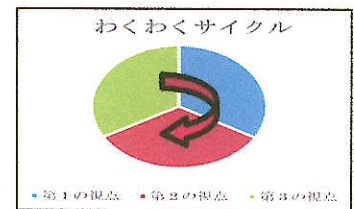
子どもが充実して遊び、豊かな体験や育ちにつながるためには、子どもがいくつかの選択肢から、自由に自分のやりたいことを選び取れる環境が不可欠となると考える。また、環境は一度構成すればよいのではない。目の前の子どもの興味・関心に応じて、新たな環境を用意したり、作り替えたりする「再構成」の視点が必要だ。

第3の視点 振り返り、記録、対話、保育展開の計画

子どもの姿を振り返り、記録し、対話し、明日以降の保育の展開を計画することで「わくわくサイクル」をつくること。第1の視点である子どもの声や興味・関心を大切にすること、それを受けて、第2の視点で、どう環境をつくり、再構成していくかということ、そして第3の視点として、それらを振り返り、保育者同士が対話していくこと。これを繰り返し行うことで子ども主体の「わくわくサイクル」が生まれるであろうと考える。

常に3つの視点を見直し、工夫していくことで保育改善に繋がるのではないかと考える。

2週に1度の週案検討の際に第1の視点から第2の視点を持って保育計画を行い、週案反省を行う際に第3の視点を持って振り返りを行っていく。



Ⅲ 課題解決に向けた取組 (実践)

【実践事例1】

第1の視点〈子どもの視線の先に(興味・関心)に目を留める〉

・5月中旬頃、製作絵本を見て「このオバケ作ってみたい!」とY男が教師に伝えてきた。その思いを受け止め、一緒に製作遊びを行った。

・一人で粘土遊びをすることが多いY男が、初めて他の遊びに興味を持ってくれたので製作遊びを広げていきたい。この製作遊びをきっかけに、友達と遊ぶ楽しさを味わってほしいな。

Y男の完成したオバケアイスを見て、他児も興味を持ち遊びが広がり始めた。そこで、学級全体で製作遊びの時間を設けた。

第2の視点〈環境の構成と再構成〉

- ・製作遊びに興味を持てるよう、学級に製作絵本を手に取りやすい絵本棚に置いた。
- ・教師も一緒にY男と製作遊びを行い、他児も興味や関心が持てるよう雰囲気づくりを行った。
- ・幼児が自由に製作遊びを楽しめるよう素材や道具を準備し遊ぶ時間の確保を行った。
- ・教師が事前にカエルで遊ぶ姿を見せ、作ってみたいという意欲を子ども達から引き出す。
- ・学級全体で製作活動をする際は一人一人が理解しやすいよう見本を見せながら手順を知らせ、丁寧に全体指導を行う。また、支援児については加配教諭や支援員と連携しながら個別に言葉かけを行う。
- ・完成できた喜びに共感し、友達と一緒に跳ばす楽しさが味わえるよう時間と場を十分に確保する。
- ・カエルのほかにも、オバケの製作が楽しめるよう作り方を掲示し明日も遊びの続きが楽しめるよう環境構成を工夫する。

第3の視点〈振り返り、記録、対話、保育展開の計画〉

- ・オバケカエルができたことを喜び、跳ばすことを楽しむ姿が見られた。
- ・作ることを楽しむことができた。しかし、友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わうという面は十分ではなかった。友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わえるよう環境構成の工夫が今後更に必要である。



【事例2】

第1の視点〈子どもの視線の先に(興味・関心)に目を留める〉

・10月中旬、エイサーが大好きな子どもたちが太鼓の音を響かせていた。また、お祭りで経験したことを遊びに取り入れる姿が見られる。お祭りごっこがクラス全体の取り組みとなり、年少児と年中児を招待したいというアイデアが生まれた。お祭りごっこを通して、Y男も友達と一緒に活動を進める楽しさを味わって欲しい。お祭りごっこの中で、友達や異年齢児とのやりとりを楽しんで欲しい。

第2の視点〈環境の構成と再構成〉

- ・エイサーが楽しめるよう、大太鼓やパーランクーを手に取りやすい場所に置いておく。

- ・お祭りごっこでの役割について話し合う場では、一人ひとりのアイデアを大切にしながら話し合えるよう雰囲気づくりを行う。
- ・材料を手に取りやすい場所に準備する。
- ・友達のアイデアも受け入れながら準備が進められるよう言葉かけをする。
- ・子どもたちで考えながら準備できるよう助言したり、難しいところは手伝ったりしていく。
- ・お祭りごっこ当日は看板など、これまでつくってきた物を目立つ場所に置く。子ども達の動線を考えながら店の場所などを調整する。
- ・エイサーやおはやし等の音楽を流し、雰囲気作りをする。
- ・異年齢児との関わりに戸惑っている様子の子どもには、教師がモデルとなりさりげなく仲立ちする。
- ・お祭りごっこへの気持ちが高揚し、身の回りのことに目が向かない子どもには加配教諭や支援員と連携を図りながら言葉かけを行う。
- ・子どもなりに取り組む姿を認め、自信や次の意欲へと繋がるようにする。

第3の視点〈振り返り、記録、対話、保育展開の計画〉

- ・子ども達の興味・関心に目を留め、環境構成を工夫したことにより Y 男も友達と一緒に活動を進める楽しさを味わう姿が見られた。また、異年齢児との関わりの方を設けたことで優しく接する姿も見られた。これから、運動会や発表会等の行事も友達と一緒に力を合わせて進めていく楽しさを味わえるよう引き続き援助や環境構成の工夫に努める。



IV 実践の振り返り

1. 支援児である Y 男の興味・関心を捉え、他児との関わる方を設けたことで少しずつ交友関係が広がり、主体的に他児と思いを伝え合ったり遊びを共有したりする姿が見られるようになったと考える。
2. わくわくサイクルを取り入れたことで、「幼児の姿を捉え、環境構成や援助の工夫、振り返り、翌週の保育展開計画」と年間を通して切れ目のない援助や環境構成の工夫ができたのではないかと考える。

V 今後の実践に向けて

幼児教育の基本に立ち返り、幼児が一つ一つの活動を効率よく進めるようになることではなく、幼児が自ら周囲に働き掛けてその幼児なりに試行錯誤を繰り返す、自ら発達に必要なものを獲得しようとする姿を大切に、活動が生まれやすく、展開しやすいものになっているか意図をもって環境構成の工夫を今後も継続して行っていく。そして、幼児の主体性を育む環境構成や援助となっているか日々の保育で振り返り更に深めていきたい。

一人一人のよさが活かされた集団の育ちを目指して

—発達に合った援助を考える—

宜野湾市立はごろも幼稚園 教諭 外間 有美子

I テーマ設定の理由

令和6年10月に文部科学省は、「今後の幼児教育の教育課程、指導、評価等の在り方に関する有識者検討会」の最終報告をまとめている。幼児教育施設間はもとより、保護者や地域、さらには全ての人において、幼児教育の適切な理解を得ることを課題とし、第一章では「社会と共有したい幼児教育の基本的な考え方」をあげている。

その「基本的な考え方」の一つに「幼児期の発達の特性」が示されている。それは、本園においても、昨年度より園内研究の中で意識しながら取り組んできたものである。「一人一人の発達の特性を踏まえ、一人一人に応じた指導の在り方」「その時期の園児にふさわしい生活とはどのような環境や関わりか」など、幼児教育の基本を確認し合いながら進めてきた。

具体的には、期の発達の道すじと照らし合わせながら、個々の姿や集団の姿を丁寧に捉え、今必要な経験は何か、という視点を大切に取り組んできた。適時適切な教師の関わりや環境の在り方を含め進めていく中で、年度最終時の園児の姿からは、主題に沿った一定の成果が見られたと考える。それと同時に、「教師の関わり方次第でもう一步前に進んだ園児の育ちが見られたのではないか」「一人一人の育ち、集団としての育ちを読み取る教師の専門性をより高めていきたい」などの課題も挙げた。そこで、今年度も引き続き、本テーマのもと、研究を進めていくこととする。

さて、今年度の園児の姿を見てみると、園の環境に興味を持ち、気の合う友達と好きな遊びを楽しんでいる姿や、周りの友達に声を掛け、意欲的に関わろうとする姿が多く見られる。また、これまで育ってきた経験の違いが随所で見られたり、全体での活動になるとその場を離れてしまう等、集団で過ごす楽しさをまだ感じていない子もいる。

幼稚園教育要領解説の序章第2節の2「幼稚園の生活」(1)において、「幼児は他の幼児と支え合って生活する楽しさを味わいながら、主体性や社会的態度を身に付けていくのである」とあり、「幼稚園において同年齢や異年齢の幼児同士が相互に関わり合い、生活することの意義は大きい」と明記されている。よって、園児たちはこれからの園生活の中で同年代からの様々な刺激を得ながら一人一人の発達が促され、育ちや学びとして見られてくるのだろうと考える。

これらのことを踏まえ、本研究では、日々の保育から幼児の姿を丁寧に読み取り、次に進むために今どのような経験が必要か考察し、そこから見出される教師の適切な関わりや学びある環境を子どもと共に考え整えていくことで、一人一人のよさが活かされた園全体の育ちへと繋げていきたいと考える。

II 課題に対する具体的な手立て

1 一人一人の発達の特性、発達段階を捉える

子どもたちはそれぞれその年齢に特有の特性や思考の仕方などがあり、保育者はさまざまな視点からその発達を見ることができる。しかし、その発達のとらえ方には、何かが「できる」「できない」という表面的な姿からではなく、幼児1人ひとりの育ちの道筋のなかにある課題をどう乗り越え、生きる力を得るような育ちをしているのかという視点が大切である。

佐藤哲也=編 2018『子どもの心によりそう 保育・教育課程論 改訂版』福村出版より引用

2 個々の良さが活かされる集団作りに向かう

幼稚園教育要領等における領域「人間関係」の内容の取扱い(2)には、「一人一人を生かした集団を形成しながら人と関わる力を育てていくようにすること」と示されている。『互いの信頼感で結ばれた温かい集団は、いわゆる集団行動の訓練のような画一的な指導からでは生まれてこない。集団

の人数が何人であろうとも、その一人一人がかけがえのない存在であると捉える教師の姿勢から生まれる』とも示している。そのためには保育者は

- (1) 幼児が安心して自分らしい動き方ができるような状況をつくる。幼児の様々なサインに込められたメッセージ、思い、よさを受け止める。
- (2) 保育者のまなざしを通して、幼児が自分のよさに気づき、自信をもって行動する喜びを感じられるようにする。
- (3) 一人一人が集団の中で認められ、そのよさや特徴が生かされる学級集団の在り方を考える。こうした保育者の姿を通して、幼児同士の中にも互いを大切に作る姿勢として取り込まれ、心のつながりをもった温かい集団として「育ちあう」ことになっていくのである。そして、学級の仲間として信頼感を持ち、共通の目的を実現しようとする協同性の育ちへとつながっていくのだろう。

全国公立幼稚園・子ども園長会 2024, 10 『幼児教育じほう』18項より引用

3 育ちを見通しながら一人一人、集団にとって必要な経験や学びを具体的に見出し実践していく。

Ⅲ 課題解決に向けた取組 (実践)

【実践事例】 「みんながかつやくする運動会」

<幼児の姿 クラスの実態>

2 学期頃、友達と繋がりがながら共に興味関心を広げていく姿や、目的のために気持ちを合わせたり互いに声を掛け合う姿が見られ始めてきた。しかし周りの状況や他児の思いに気を向けられず、自分の思いだけで動いてしまう子がいたり、前年度から友達関係が広げられないグループや、遊びが一定化している子がいる課題も見られる。

<経験してほしいこと 育てたいこと>

- ・仲間意識を育む。
- ・子どもの力で問題を乗り越えること。園児主体の行事(運動会)を目指す。
- ・自分の役割を持ち取り組む中で、自己有能感を育む。

<エピソード1>

小学生が運動会練習に取り組み始めたころ、一人一人が自分事と受け止め行事に向かっていくことを意図し、小学校の体育主任に出向いてもらい、幼稚園生も小学生と一緒に運動会に参加するか確認する場をもった。(写真1)「一緒にやりたい!」と声が多くあがったのを受け、体育主任から「そのためには自分の思いだけでなく、みんなで力を合わせること」「遠足に向けて自分たちで話し合いや計画をしている君たちならできるかもしれない」等の言葉を聞き、園児の気持ちが高まる様子が見られた。幼稚園の種目を決める話し合いの中で、園児の一人が「みんながかつやくする運動会にしたい」と発言し、その言葉をキーワードに運動会の取り組みを進めていった。各クラスで楽しんでいた“バルーンを見せたい”、夏休み頃から楽しんでいる“エイサーの道ジュネーをやりたい”と意見が出て、特色の違う2つを試行錯誤しながら一つの演技にしていっていった。



写真1 小学校体育主任の先生の言葉を聞く子ども達

<教師の援助 環境構成>

- ・一人一人の思いや考えを出せる雰囲気や、選択・決定ができる場を作っていく。
- ・園児から出た言動をひろい、全体に繋げる役割。“みんなが活躍”するにはどうしていくか、自分はどの役割で活躍したいか等話題に出し、共に考えていく。
- ・練習動画を見て振り返る機会を持ち、気づいたことを出し合ったり、より良くするためにはどうしていくか考えたりして次に繋げていけるようにする。(写真2)
- ・自分だけでなく、周りの友達の思いや頑張りにも目が向けられるよう場を捉え言葉をかけていく。時には手や口を出さず、一步引いた教師の立ち位置を意識し、子どもの言葉を引き出したり、任せたりする場を持つ。



写真2 動画を見ながら意見を出し合う

<エピソード2>

それぞれが自分で選び、決めた役割に取り組む中、エイサーチームはさらに旗頭、太鼓、手踊り等必要な役割を出し合い選んでいった。どの役割も大切に、それぞれの力が発揮されると全体が良くなることを話し

合ったり、味わったりしながら進めていき、自分の思いだけで動くことが多かった子達が周りや全体を意識しはじめ、取り組みに意欲的になってきた。その中で、旗頭を選び取り組んでいる Y 児は、緊張を感じたり、気持ちの切り替えが難しい場面で周囲からふざけているように見える行動をとってしまうことがある。運動会に向けての取り組み中も、やりたい意欲は見られるものの自己調整が難しい場面があった。そこで教師は、旗頭の意味やみんなのための役割を確認し合う“旗頭会議”の機会を持った。旗頭はどんな役割か問いかけると、「リーダー」「盛り上げたりする」等の声があった。教師からも「旗頭には、みんなを引っ張る、ところをひとつにする大切な役目があるらしい。その役目をやってみたい気持ちはある？」と言葉をかけた。一人ずつ「できる」「やる」と真剣に答えていく中、教師が Y 児に声を掛けた時、旗頭仲間の R 児が「Y はできると思うよ。頑張っているところを見た。」と発言した。その言葉を聞き、Y 児は「できる」と答えた。その日の練習に真剣に取り組む Y 児。重たい旗を力いっぱい上下に振り列の目印となる動きを張り切る姿や、思いを込めて旗を作っていく姿(写真3)、練習の動画を見ながらどの場所でどんな動きをしたらより良くなるか意見を出し合う姿が出てきた。



写真3 エイサーの旗頭作り

運動会で同じエイサーの種目に取り組む6年生の応援を受け、旗頭、エイサーチーム、幼稚園全体の気持ちの高まりを感じながら迎えた当日。小学生と一緒に取り組んでいる実感や色々な人の応援の力を感じながら、自分たちの演技に自信をもって取り組む姿があった。(写真4)



写真4 6年生に見守られながら自信を持って演技をする子供たち

< 考察 >

- ・運動会の取り組みの中で、話し合いの場や動画での振り返り等を通して自分の行動を振り返ったり、友達の頑張りにも目を向けられるよう関わりを意識した。自分の成長や友達の頑なりに気付く、伝える、認められる嬉しさを体験するなど、友達との繋がりを感じながら目的に向かう姿が見られたと考える。また“みんなで”大きな目的に向かうには、自分の思いばかりでなく、自分の行動をコントロールしないとイケない場面を園児が感じ、調整しようとする場面が多く見られた。
- ・小学校の体育主任による運動会への参加確認がきっかけとなり、それぞれが当事者意識を持ち、共通の目的に向かって取り組む姿が見られた。また、日常的に繋がっている小学校との関係が土台としてあることで、大きな行事である運動会の取り組み（特に6年生との関わり）が幼小接続を感じるものとなった。さらに運動会后、小学校体育主任と一緒に振り返り、園児の頑張りや成長した姿を認める言葉や、今後の園生活・行事への期待に繋がる言葉を掛けてもらった。その後の園生活がより意欲的になるよう繋げたい。

IV 実践の振り返り

- ・活動や行事等を単発的に行うのではなく、目の前の子どもの姿を捉え、研究主題や育ちの過程と照らし合わせ、一人一人に経験してほしいことを職員間で共有しながら進めることができ、子ども達も私自身も多くの学びを得る機会になった。
- ・今回の行事で得た満足感や自信が次の育ちに繋がるよう進めていきたい。

V 今後の実践に向けて

- ・今後も園児の「個の育ち」と「集団としての育ち」を読み取る教師の質の向上に努めていく。一人一人が集団の中で認められ、その良さが活かされる学級、園集団の在り方を考えていく。
- ・子どもの育ちや園の取り組みを保護者や関係者、小学校等へ共有していき、共に子どもの育ちを支えていけるようにする。

<主な参考・引用文献>

- 文部科学省 2018 『幼稚園教育要解説』 フレーベル館
 佐藤哲也=編 2018『子どもの心によりそう 保育・教育課程論 改訂版』 福村出版
 全国公立幼稚園・子ども園長会 2024, 10 『幼児教育じほう』

友達との関わりを育み、遊びを展開していく子の育成

—教師の関わりや環境の工夫を通して—

宜野湾市立長田幼稚園 教諭 赤崎 千明

I テーマ設定の理由

近年、家族構造が変化し、さらには地域コミュニティの希薄化、スマートフォンの普及やデジタル化の進行により子どもの生活や行動様式に変化が見られ、一人遊び中心になりやすく他者との関わりを通じた成長機会が減少している。これらの変化が、子どもの育ちや保育の場に影響を及ぼしている。昨年度本園では「互いの良さに気づき、共に育ち合う子の育成—教師の関わりや環境の工夫を通して—」という人間関係をテーマとして取り組んだ。成果として、教師が保育の中で子ども達の様子に疑問を持ち考えていくことで、自分達で生活や遊びを作り出していききっかけとなったことが挙げられたが、課題として園児数の大幅な減少により、友達との関わりが生まれるような環境の構成の工夫や教師の援助（集団としての育ちの保障）がより重要になってくることが挙げられた。幼稚園教育要領第1章第1節4「計画的な環境の構成」においても「教師は幼児が本当にやりたいと思い、専念できる活動を見付けていくことができるように、つまり、いろいろあり得る活動の中から興味や関心のある活動を選び取っていくことができるように、しかも、その活動の中で発達にとって大切な体験が豊かに得られるように環境を構成することが必要である。」と記されており、少人数なりの援助や環境の在り方を考えていかななくてはならない。

5歳児（2年保育）の本学級は12名（うち進級児6名）が在籍している。幼児の姿として、元気で明るく素直な子が多い。新しい環境に慣れるのも早く、いろいろな遊びに興味を持ち、自分のやりたい遊びや気の合う友達を見つけて遊ぶ子、反対に一人遊びを好む子、友達とどのように関わっていいかわからない子がいる。また言葉よりも先に手が出たり思いを上手く言葉にできずいたり、友達との関わりには課題がある。全体的に自分の話をするのは上手だが、人の話を聞くことは苦手である。今年度も園児数が少なく、一つ一つの遊びに取り組む子が分散され、友達との関わりが限定的になってしまうという実態がある。これらの実態を踏まえながら教師の関わりや環境の工夫をすることで、遊びを通して友達と関わる力を育て遊びを展開していくことで充実した園生活を送ることを目指していきたいと考え、本テーマを設定した。

II 課題に対する具体的な手立て

- 本園の幼児の姿から、幼児同士のつながりが生まれるような環境構成や教師の援助を行う。
- ドキュメンテーション等を活用し、幼児と遊びの振り返りを行い、翌日の遊びにつなげていく。
- 一人ひとりの発達の課題を捉え、それに応じた援助を行い、集団を育てていく。

III 課題解決に向けた取組（実践） 教師の援助・環境構成 幼児の変容

○実践事例1 集団遊び「なべなべ」 9月

《幼児の姿》

クラスで数名が始めた「なべなべ」の遊び。教師が何気なくピアノを弾いてみると友達同士で誘い合いながらその輪がどんどん広がり、最後にはクラス全員でやることになる。もう少して成功しそうだったが、上手くいかずにどうすればよかったのかみんなで考えることになる。

《教師の願い》

何気なく始まった集団遊び。友達関係が広がり、クラスでの集団遊びも楽しめるようになってきた。上手くいかなかった経験をチャンスと捉え、みんなで考え相談する中で成功した時に相手と気持ちを通わせる喜びやクラスとしてのまとまりを味わうことができたらしい。

《幼児の姿》

1学期からクラスで相談をする際には作戦会議を行ってきた。今回も「なべなべ作戦会議」と名前をつけてどうしたら上手くいくのか考えることになった。(写真1)「入る順番を決める」「最初は2人でやって数をどんどん増やす」とアイデアが出てくる。実際にやってみると途中までは上手くいくが、人数が増えると楽しすぎて自分の思いが先行するA児や動きの大きいB児がいたり上手くいかなくなる。その時に、A児やB児に対して大声で言ったり足で蹴ったりする姿が見られた。教師が子ども達を座らせて話をする。

「協力するとはどんなことか」「楽しいゲームをしているはずなのに悲しい顔をしている友達がいる」と子ども達に問いかける。すると、「優しく教えてあげる」「C児とD児は背が高いからトンネルを作ったほうがいい」などさらなるアイデアが出てくる。A児とB児もみんなの思いに気が付き始め、真剣な表情で話し合いに参加する姿が見られた。

遊びを繰り返す中で「もしクラス全員12名で成功したら年中児も合わせて23名でやってみよう!」という目標が子ども達の中に出てくる。一つの目標ができたことでクラスのまとまりも見られ、成功すると大喜びしていた。

そして年中児にも声をかけ毎週火曜日の「ながたっこ集会」で挑戦することになった。年中児とやる前に教師が話をする。「ひまわり組さん(年長)は今まで何回もなべなべをやってきたけど、さくら組さん(年中)はやったことがあるか分からないよ。すぐに23名全員でやることができるかな。」すると子ども達から「最初はひまわり組とさくら組で2人ペアになる」「ひまわり組さんが教えてあげる」という言葉が出てきた。さくら組とやってみると年中児ということもあって人数が増えて相談する場面が増えると集中が続かなかつたりするが、年長児の子ども達が話をしながらまとめようとする姿が見られた。1度で終わるのではなく日々継続して全体で楽しんでいる。(写真2)

《考察》

何気なく始まった遊びを教師がすかさず捉えてみんなで楽しめるようにしていった。人数が増えると上手くいかないことも出てくるが、どうしたら上手くいくかをみんなで考えることで、できたときの喜びも大きかった。また、個々の個性を受け入れながら遊びを進めていくためにはどうしたらよいかと教師も改めて考えるきっかけとなった。ひとつの気付くきっかけとしてクラスで「いいところ探し」を行った。自分のいいところや友達のいいところを見つけることで、あの子にはこんないいところがあるということに気付いて遊びを進めていけたらいいなと願いを込めた。それぞれ得意なこと苦手なことがある、こうすれば苦手な子もできるということを子ども達自身が自然と感じてくれたらいいなと思っている。今後も、遊びを通して子ども達の心を育てていけるようにしたい。

○実践事例2 生活発表会に向けての取り組み「劇遊び」 11月

《幼児の姿》

12月に生活発表会があることを知らせ、どんなことをしたいかクラスで話し合う。読み聞かせで怖い話が好きな子ども達は、絵本の中に出てくる歌をよく口ずさんでいたということもあり「めっきらもっきらどおんどん」がやりたいと声上がる。

《教師の願い》

子ども達のやりたいことや幼稚園生活で楽しんできたことを取り入れながら主体的に取り組むことができたらいいな。

《幼児の姿》

「めっきらもっきらどおんどん」の話をアレンジして子ども達がおばけに変身し、園生活の中でそれぞれの好きなことや得意なことを披露していくことになり、みんなの好きな遊びや集団遊びを書き出していった。その中から舞台上でできるものを子ども達と相談し内容を絞っていく。紙飛行機・虫探し・製作・あやとりのグループに分かれて行うことになった。その後は、おばけ達みんなで普段から楽しんでいる集団遊び(お寺のおしょうさん・かもつ列車・ひらいたひらいた・なべなべ)をすることになる。グループに分かれて行う場面ではどのように見せるのか各グループで相談し進めていく。クラスの時間だけでなく遊びの時間に自分達で声を掛け合いながらできるように



写真1



写真2



写真3

していった。その都度各グループに進み具合を聞いたり、発表会までの日数を知らせたりすることで、意識的に取り組む姿が見られた。(写真3) また、クラスの振り返りの時間に紹介をしたり困っていることを共有したりすることで、グループ以外の子からアドバイスをもらったり、時には手助けしてもらったりしながら進めていく姿が見られた。(写真4)



写真4

集団遊びでは、じゃんけんで負けて悔しい思いをしながらも劇を進めていくために自己調整しながら頑張る姿や、中心になって全体に声をかける子など個々の育ちが見られた。劇の最後には、おばけ達がお家に帰っていくということで、大好きなソフトブロックを使っておばけ達の家作りに挑戦する。お家のイメージを共有するためにどんな家を作りたいのか聞くと「12名が入るお家」「玄関や屋根がある」などの案が出てきて実際に作ってみる。最初は自分のやりたいようにやる子が多く、上手いかなかったりトラブルになった。どうすればいいのか子ども達に問いかけると「並べる順番を決める」「みんなで力を合わせる」と声上がる。さらにみんなで力を合わせるとはどんなことか教師が聞くと「声を掛け合う」「みんなで頑張る」などが出てきた。上手くいく時といかない時がありその都度子ども達と振り返ることで、次につなげていけるようにした。(写真5)



写真5

《考察》

いろいろな集団遊びを経験する中で、上手くいかない場面があるとみんなで作戦会議を立てながら繰り返し楽しんできた事で、仲間の考えや気持ちに気付くことや受け入れることの大切さを知らせることができた。クラスとしてのまとまりも見られるようになり、「ひとりでできないことが、みんなとだからできた」「みんなと一緒に楽しいことができる」「みんなの力が集まると大きな力になる」ということを体感していると考察する。最初はばらばらだった集団が、発表会で劇をするという共通の目的に向かって活動する中で、「みんな違ってみんないい」「それもいいね」と心の繋がりが見られ、認め合う仲間になっていく過程が見てとれた。

子どもの興味関心を捉え、どんなことを楽しんでいるか感じ取りながら進めてきた。子ども達のやりたいことをどう実現させていくか手立てや方法を考えることで教師力も高まった。

IV 実践の振り返り

(成果)

- ・教師は遊びを育てるのではなく、遊びの中で何が育とうとしているのか内面理解することが大切である。育ちを見極め、その発達の過程を促すことができるような環境構成や援助が大切であることが分かった。
- ・困ったことが起きたときに教師がすぐに答えを出すのではなく、育ちのチャンスと捉えて子ども達にどうしたらよいか投げかけたり、クラスで話題にすることによりみんなで考えて解決する方向に繋がった。
- ・よさを認め合える集団作りを目指し教師が一人ひとりの存在を大切に考え、ありのままの姿を受け入れる姿勢が子ども達にも影響を与え、よさを認め合う集団になりつつある。

(課題)

- ・園児数が少ないので、その中で友達との関わりが生まれるような環境の構成の工夫や教師の援助が今後もより重要になってくる。そのため年長、年中の枠にとらわれず柔軟に保育を展開していく。

V 今後の実践に向けて

子ども達が安心して園生活を送ることができるように信頼関係の基盤を作り、主体的に活動できるよう試行錯誤できる時間を確保する。その中で子どもの遊びを深める声かけや環境の構成、子ども同士の関係を育てる配慮などをしていく。そしてその背後にある子どもの育ちに目を向け、育てている姿・育とうとしている姿・育てたい姿に視点を置き子どもの心育てる保育を展開していくことができるようにする。そのためには教師間の連携も大切になってくるため、同じ方向性で意識的に保育を行っていくために、教師間の振り返りの時間を継続的に行っていくことも大切にしていきたい。

〈主な参考文献〉

- 文部科学省 2018 『幼稚園教育要領解説』 フレーベル館
- 濱名 浩 編 2018 『保育内容 人間関係』 みらい
- 秋田喜代美 増田時枝 安見克夫 箕輪潤子 編 2021 『保育内容 環境』 みらい
- 秋田喜代美 2017 『秋田喜代美の写真で語る保育の環境づくり』 ひかりのくに

「4歳児の主体的な遊びを促す ICT の活用について」 ～ICT を活用、子どもの探求心・気づき・関わりに与える影響～

西原町立 西原幼稚園 教諭 氏名 西原 樹

I テーマ設定の理由

本学級は、4歳児（2年保育）13名で構成されている。子どもたちは、遊びが一方向に進みやすく、発展しにくい姿が見られる一方で、生き物への興味・関心が高く、虫を見つかったり、飼育している生き物をじっくり観察したりする姿が多く見られる。しかし、童謡やわらべうたなどの表現活動には関心が薄く、活動への広がりや課題となっていた。

このような姿から、子どもたちが「なんだろう」「やってみたい」といったワクワク感や好奇心をもって、自ら遊びを広げていけるような保育を行いたいと考えるようになった。

近年の保育現場では、子どもの主体的な学びをどのように支えるかが重視されており、その手段の一つとして ICT の活用が注目されている。特に好奇心旺盛な4歳児にとって、ICT は視覚的・聴覚的に興味を引き出しやすく、遊びや探求のきっかけとなる可能性がある。また、ICT を介することで、友だちとの関わりや新たな気づきが生まれ、保育者の援助によってその体験がより深まると考えた。

以上のことから、本研究では ICT の活用と保育者の援助が、4歳児の主体的な遊びにどのような影響を与えるのかを明らかにすることを目的とし、本テーマを設定した。

II 課題に対する具体的な手立て

①ICT を活用した「ワクワク感」を引き出す導入

生き物や自然をテーマにした動画や画像を導入として活用し、子どもの「見てみたい」「やってみたい」という気持ちを引き出す。ICT を遊びの出発点とし、実体験につながる環境を整える。

②ICT を通した子ども同士の関わりの促進

ICT を通して得た情報を共有する場を設け、子ども同士が会話をしたり、一緒に遊びを展開したりする姿を大切にす。友だちとの関わりの中で、気づきや学びが深まるよう援助する。

③ICT と対面活動を組み合わせた表現活動への展開

動画や音楽をきっかけに童謡や表現遊びにつなげ、ICT に偏りすぎないように、歌や手遊びなど対面での関わりも大切にしながら活動を展開する。

III 課題解決に向けた取組 （実践）

◆実践事例1：「幼稚園にいっぱい生き物があるよ」（7月頃～）

<幼児の実態>

園内で見られる生き物に興味を示し、立ち止まって眺めたり、教師に知らせたりする姿が見られていた。一方で、「ちょうちょ」「うさぎ」など単語で伝える姿や、気づいたことを一方的に話す場面も多く、友達同士で思いや気づきを伝え合う姿は少なかった。また、生き物の変化や成長についても断片的に捉えており、継続して関心をもつことが難しい様子が見られた。

<教師の願い>

身近な生き物との関わりを通して、「気づいたこと」「不思議に思ったこと」を言葉にし、教師や友達と伝え合う楽しさを感じてほしい。また、観察を重ねることで生き物の成長や変化に気づき、大切にしようとする気持ちや愛着を育んでほしいと願った。

<環境構成>

- ・園内で見られる生き物（幼虫、バッタ、ウサギなど）を、日常的に観察できる環境を整える。
- ・飼育ケースを設置し、毎日変化を見られるようにする。
- ・生き物に関する図鑑や絵本を手に取りやすい場所に用意する。
- ・写真や動画を撮影し、クラス全体で見返せるようにする。



<教師の援助>

- ・幼児の気づきに寄り添い、「どんな蝶になるのかな?」「どんなふうになってきたかな?」と問いかけ、言葉で表現するきっかけをつくる。
- ・友達同士と一緒に観察できるよう声をかけ、感じたことを伝え合う場を大切にする。
- ・図鑑や絵本を提示し、「調べてみようか」と幼児の探究心を支える。
- ・生き物の成長の様子を写真や動画に残し、クラスで共有することで、継続した関心や愛着につなげる。

<幼児の姿>

- ・蛹を見ながら「どんな蝶々になるのかな?」と教師や友達に問いかけたり、蝶になる様子を楽しみにする姿が見られた。
- ・うさぎと触れ合う中で、「うさぎさんがお散歩してるよ」と気づいたことを伝え、友達と一緒に観察する姿が増えていった。
- ・「図鑑で調べてみたい」と自ら図鑑を手に取り、生き物の名前や特徴を確かめる姿が見られた。
- ・おたまじゃくしが生まれた水場を発見すると、「おたまじゃくしがいっぱい生まれたよ」と毎朝様子を確認し、友達と成長を喜び合っていた。
- ・写真や動画を見返すことで関心が深まり、生き物の名前を考えたり、飼育の仕方を話したりと、愛着をもって関わる姿が見られた。
- ・登園時や降園後に、保護者へ生き物の成長の様子を伝え、「今日はおたまじゃくしに足が出てきたよ」など、家庭でも会話を楽しみにする姿が見られた。

<考察>

身近な生き物を継続して観察することで、幼児は小さな変化に気づき、それを言葉で伝えようとする姿が育っていった。写真や動画を用いて成長の過程を共有したことで、興味や関心が深まり、友達同士で同じ生き物を見ながら気づきを伝え合う姿へとつながった。また、生き物の様子を保護者に伝える経験を通して、自分の思いが受け止められる喜びや満足感を味わい、伝え合うことへの意欲が高まったと考えられる。

◆実践事例3：「みんなで歌って楽しいね」（9月頃～）

<幼児の実態>

毎朝の歌の時間では、教師の歌声やピアノに合わせて口ずさむ姿は見られていたが、気分や体調によって参加に差があり、積極的に表現する姿は限られていた。また、歌を「聴く・歌う」ことが中心で、歌詞の意味やイメージを共有しながら楽しむ姿は少なかった。

<教師の願い>

童謡に親しみながら、友達と一緒に歌う心地よさや楽しさを感じてほしい。また、歌に込められた季節感やイメージを身体や言葉で表現し、昔から大切に引き継がれてきた童謡の魅力を味わってほしいと願った。さらに、ICTだけに頼るのではなく、教師が共に歌い、音を奏でることで生まれる温かい関わりを大切にしたいと考えた。

<環境構成>

- ・毎朝の歌の時間に、季節に合った童謡を取り入れる。
- ・教師がピアノを弾き、幼児が安心して歌える雰囲気をつくる。



- ・生き物の成長や季節の出来事と結びつけ、歌が生活とつながるようにする。
- ・必要に応じて、写真や動画を用いて振り返りができる環境を整える。

<教師の援助>

- ・幼児の興味や経験に寄り添い、「おたまじゃくしが大きくなったね」「この歌、かえるさんがでてくるね」とイメージを言葉にして伝える。
- ・幼児から出た表現のアイディアを受け止め、「やってみようか」と全体に広げる。
- ・歌うことそのものを楽しめるよう、正確さよりも気持ちや表現を大切にする。
- ・教師自身も一緒に歌い、身体を動かしながら表現する姿を見せる。

<幼児の姿>

- ・おたまじゃくしの成長を見守る中で「かえるのうた」を繰り返し歌うようになり、次第に大好きな歌となっていった。
- ・歌の時間に、一人の幼児が「カエルさんの真似をしよう」と提案したことをきっかけに、ジャンプをしながら歌う姿が広がり、毎朝の楽しみとなった。
- ・身体を動かしながら歌うことで、友達と気持ちが揃い、自然と笑顔で歌い合う姿が見られた。
- ・この経験を通して、他の季節の童謡にも関心が広がり、「次はどんな歌？」と楽しみにする姿が増えていった。
- ・発表会でも、日常で親しんできた童謡を取り入れ、自信をもって表現する姿が見られた。

<考察>

生き物の成長と童謡を結びつけたことで、幼児は歌を生活の一部として捉え、親しみをもって楽しむようになった。幼児から生まれた表現を受け止め、友達と共有する中で、歌う楽しさが広がり、主体的な表現へとつながったと考えられる。また、教師がピアノを弾き、共に歌うことで生まれる温かな雰囲気は、幼児に安心感を与え、童謡という昔から大切に歌い継がれてきた文化を自然な形で受け継ぐ機会となった。ICTによる共有だけでなく、直接的な関わりの中で味わう音や歌声の大切さを改めて感じられる実践になった。

IV 実践の振り返り

本実践では、身近な生き物との関わりや童謡に親しむ活動を通して、幼児が自分の感じたことや気づきを言葉や表現で伝えようとする姿が多く見られた。生き物の成長を写真や動画で記録し、クラス全体で共有することで、幼児は変化を振り返りながら興味や関心を深め、友達と同じ対象を見て伝え合う経験を重ねていった。

また、童謡の実践では、日常生活や経験と歌を結びつけることで、幼児一人ひとりのイメージが広がり、友達と気持ちを揃えて表現する楽しさを味わう姿が見られた。幼児から生まれた表現を受け止め、活動に取り入れていくことで、主体的に関わろうとする意欲が高まり、クラス全体に温かな一体感が生まれたと感じている。

これらの実践から、ICTは幼児の興味を広げたり、経験を振り返ったりする「きっかけ」として有効である一方で、教師や友達と直接関わる中での言葉のやり取りや共感的な関わりが、幼児の伝えたい気持ちを支えていることを改めて実感した。

V 今後の実践に向けて

今後は、ICTを活用して記録・共有することに加え、幼児が「何を伝えたいのか」「誰に伝えたいのか」をより意識できるような援助を工夫していきたい。生き物の観察や歌、遊びの中で生まれた気づきや思いを、友達や保護者へ伝える場を意図的に設けることで、言葉や表現への自信につなげていきたいと考える。

また、童謡や対面での関わりなど、昔から大切にされてきた保育の営みを土台としながら、ICTを補助的に活用することで、幼児の主体性や探究心がより深まる環境づくりを目指したい。幼児一人ひとりの「伝え

たい」「やってみたい」という思いを丁寧に受け止め、安心して表現できる関係性を大切にしながら、今後の実践へとつなげていきたい。

〈主な参考文献〉

文部科学省 2018 『幼稚園教育要領解説』 フレーベル館

高山静子 著 2014 『環境構成の理論と実践 - 保育の専門性に基づいて』 エイデル研究所

無藤隆 編著 2018 『「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」(10の姿)と重要事項(プラス5)を見える化! 10の姿プラス5・実践解説書』

守屋陽一 発行 2021 『ほいくあっぷ 2021年12月号 保育記録をなんとかしよう』 株式会社 学研教育みらい

友だちと一緒に活動する楽しさを味わい、主体的に遊ぶ子の育成

～発達を考慮した保育環境づくりと援助の工夫を通して～

浦添市立浦添こども園 教諭 呉屋 美奈

I テーマ設定の理由

幼児期は、他者との関わりを通して自己を認識し、社会性や情緒の基礎を培う重要な時期である。特に4歳児は、友だちへの関心が高まり、同じ場で遊ぶことから、思いや気持ちを共有しながら関わる遊びへと発展していく時期である。しかし、生活体験や人との関わり方の量・質の違いにより、友だちとの関わり方には個人差が大きく見られる。近年、社会環境の変化により、幼児が人と関わる経験が以前に比べて少なくなっている。その影響から、自分の思いを十分に伝えられない、相手の気持ちに気づきにくい、友だちとのトラブルが生じやすいなど、対人関係に課題を抱える姿も見られるようになってきている。

幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説の領域「人間関係」では、「身近な人と関わり、信頼感や愛情をもって生活する」「自分の思いを伝え、相手の思いに気づき、協調しながら生活する力を養う」ことが示されている。また、友だちとの関わりの中で生じる葛藤や思いの違いを経験することは、相手を理解しようとする気持ちや、社会性の育ちにつながる重要な学びであるとされている。

本学級は、4歳児（二年保育）22名で構成され、進級児に加え、新たに7名の新入園児が在籍している。友だちと関わりながら遊ぶ姿が見られる一方で、自分の思いを優先してしまいトラブルになる子、友だちとの関わりに不安を感じ保育教諭の側を離れられない子、関わり方が分からず一人遊びに留まる子など、対人関係におけるさまざまな姿が見られる。そこで、友だちと一緒に活動する中で「楽しい」「もっと一緒に遊びたい」と感じられる経験を積み重ねることが、友だちへの親しみや信頼感を育み、主体的に人と関わろうとする姿につながるのではないかと考えた。そのためには、幼児が自然に関わり合える保育環境の構成や、気持ちをつなぐための保育教諭の援助が重要である。以上のことから、友だちとの関わりを通して人と関わる楽しさを味わい、主体的に遊ぶ子の育成を目指し、発達を考慮した保育環境づくりと援助の工夫を実践・検討することを目的として、本テーマを設定した。

II 課題に対する具体的な手立て

1 子どもの発達と幼児理解

- (1) 4歳児は、自我が確立し始めるとともに、自分なりの考えや意図をもって行動する姿が多く見られるようになる。また、友だちとの関わりが深まり、共通の目的をもって遊ぶ経験が増える時期である。
- (2) 自園が3年保育であることから3・4・5歳児の年齢別の発達について学び直し、個々の幼児がどの段階に当てはまるのか照らし合わせながら一人ひとりの幼児理解を深める。

2 子ども主体の保育と保育教諭の役割

- (1) 子ども主体の保育を『自分で決めて、試して、友だちと関わりながら深めていけること』と捉え、環境構成と保育教諭の援助の工夫でどう支えるか、という視点で考える。
 - ①「やりたい」が生まれる環境づくり
 - ②子どもが理解しやすい表示の工夫（絵表示・写真の活用）
- (2) 保育教諭の役割
 - ①子どもの思いや考えを受け止める関わり
 - ②子ども同士の関わりが生まれる環境のレイアウト（テーブルの配置や道具の共有、集団あそび）
 - ③スケジュールやルールの視覚化で見通しをもって安心して活動ができるよう支える。
 - ④挑戦や失敗を肯定的に捉える言葉かけや関わり

3 チームで作る環境構成と援助の工夫

- (1) 自分で選べる遊びの環境
 - ①自分で取り出しやすく片付けしやすい遊具や用具の環境の工夫
 - ②コーナーでじっくりと遊べる場の確保（動と静の遊びの場が重ならず、集中して遊べる場）
- (2) 日々のミーティングを通して職員間で共有、子どもの実態に合わせて環境を再構成する。

Ⅲ 課題解決に向けた取組（実践）

実践事例1：「友だちと遊ぶの楽しいな」（5月～11月）－集団遊びを通して－

【 幼児の姿 】

進級して新しくクラスメイトが増えたが、年中組から一緒の子は気の合う友だち同士で一緒にいることが多く、新入児は保育教諭との関わりを求めたり一人で好きな遊びをしたり、遊びを転々としていることが多くみられた。歌や手遊び、ダンスなど学級での活動に笑顔で参加する子が多い一方で、誘ってもなかなか入ろうとしない子の姿もある。

【 保育教諭の思い・願い 】

- ・新しいクラスが自分の居場所として「安心できる場所」になってほしい。
- ・やらないのは興味がないのではなく、わからなくて新しいことに不安を感じて戸惑っているからかな？
- ・関わりが少ない子とも接する機会が持てたら互いの良さに気づき、一緒に遊ぶ楽しさを感じられるかな

【 環境構成 】

- ・みんなで集まる際、手遊びや歌、ダンスなどを取り入れ、楽しんで集まれる雰囲気づくりをする。
- ・広い遊戯室を利用し、簡単なルールのある集団遊びをクラスの活動として取り入れていく。音楽やピアノに合わせて体を使った遊びを多く取り入れ、体を動かす楽しさをみんなで共有していく。

【 保育教諭の援助 】

- ・参加したがる子には、参加しなくても入ってきて良い、見ているだけでも良いということにする
- ・初めは保育教諭も一緒に参加し、ゲームのルールをわかりやすく伝え、楽しさを全体に共有していく。
- ・色々な友だちと触れ合ったり、協力したりすることができるようなゲームを意図的にいれていく。
- ・遊んだ後に振り返り、楽しかったこと、困ったこと、次やりたいことなどをみんなで話し合う場を作る

- ・リトミック⇒音楽に合わせて、多様な動きや表現を楽しみ、心と身体をほぐす。
- ・じゃんけん列車・あくしゅでこんにちは・おいもの天ぷら⇒色々な友だちとの関わり
- ・フルーツバスケット⇒仲間を感じる



【 幼児の変容 】

- ・はじめは見ているだけだった子も内容がわかると参加するようになり、繰り返すことで楽しんで参加するようになった。「みんなの時間でゲームやりたい」という子が増え、活動に意欲的になった。
- ・ゲームを通して、色々な子と関わりが持て、互いに誘い合う姿が増え、笑顔も増えた。

【 考察 】

- ・安心して過ごせる環境の中で、自然に触れ合える場やきっかけを意図的に構成することが重要である。
- ・触れ合いや楽しさを共有する経験の積み重ねが友だちへの信頼感や親しみの気持ちにつながった。

実践事例2：「明日も〇〇しよう」（10月）-お弁当づくりを通して-




【 幼児の姿 】

年長さんから「お祭りごっこ」に招待されたことをきっかけに、「自分達もやりたい！」と意欲をみせるが、どのようにしたら良いのかわからない様子がみられ、自分達だけでは発展しなかった。

【 保育教諭の願い 】

- ・一人一人がイメージをもって表現する楽しさを味わってほしい。
- ・友だちと一緒に製作をしたり友だちの作品を見たりしながら、互いのよさに気付いてほしい。

活動内容	園児の様子	◎保育教諭の援助 ★環境構成
10月28日～ お弁当やさんの商品を作ろう♪	<ul style="list-style-type: none"> ・「どうやって作ろうかな」と製作方法を考えたり、製作に必要な材料を探したりと、作ることを楽しみにする。 ・絵本や写真を見てイメージが膨らみ、友だちや保育教諭と一緒に「自分のオリジナルお弁当」を作ることを楽しむ。出来上がるとさらに製作意欲が増してきた 	<ul style="list-style-type: none"> ◎食べ物に関する絵本の読み聞かせをしたり、目につく所に絵本を掲示したりし、お弁当のイメージが膨らみやすいようにした。 ★使えそうな材料をワゴンに種類ごとに分け、選んで使えるようにした。 ◎保育教諭も一緒に作り、難しい所を手伝ったり友だちのやり方に気づけるよう声掛けをした

活動内容	園児の様子	◎保育教諭の援助 ★環境構成
<p>「いらっしゃいませ〜チョコバナナもありますよ。」</p>	<p>・お弁当以外にも様々な食べ物などを作り、品物が増えると「お店できそう」と作った物を並べて「いらっしゃいませ〜。」と売り子のように言葉を発する子が出てきて「おにぎりください。」とお客さんになる子どもでできた。</p> <p>・「お店だからお金も必要だよ。」とお金や財布を作り出す。</p> <p>・「明日はお店屋さん交代ね。」と友だち同士で意見を交わしている。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>	<p>りし、製作活動を楽しめるよう配慮した。</p> <p>★一人一人のやりたい製作ができるように材料や教具を数種類用意し、製作過程で必要な材料や教具が出てきた時には、子どもの要望に応じてその都度用意した。</p> <p>★友だち同士、向いあって互いの作品を見たり会話を楽しみながら活動できるようテーブルの配置を工夫した。</p> <p>◎遊びの振り返りで作品や発表する場を作り、どんな風に遊んでいるのか、友だちの遊びに興味を持てるようにした。</p> <div style="text-align: right;">  </div>

【 幼児の変容 】

自分なりのイメージや好きな製作方法で作ることを楽しむことができた。友だちと一緒に遊びを共有することを楽しみ、会話が增え、「明日もお店屋さんしたいね」と遊びの継続に繋がっていった。

遊びの振り返りで友だちの作品をみたり、意見を聴いたり、自分の考えを伝えることができた。

【 考察 】

- ・遊びの場や教材の配置を工夫することで、子ども同士が自然に関わり合えるきっかけが生まれ、人間関係が広がっていったと考えられる。
- ・必要に応じて材料を用意することで友だちと一緒に製作することを楽しみ、遊びが継続していった。

IV 実践の振り返り

1 成果

- (1) 自分から友だちに声をかけたり、誘い合って遊びを始めたりする姿が増え、友だちと関わることに安心感をもって過ごす様子が見られるようになった。
- (2) 「一緒にやろう」「順番ね」など相手を意識した言葉が増え、遊びを友だちと継続して楽しむ姿へとつながっていった。
- (3) トラブルの場面においても、保育教諭が双方の思いを受け止めながら仲立ちを行うことで、子ども自身が相手の気持ちに気づき、再び一緒に遊ぼうとする姿が見られるようになった。これらの変化から、友だちと一緒に活動する楽しさを味わう経験が、主体的に人と関わり、遊びを広げようとする力の育ちにつながったと考えられる。

2 課題

- (1) トラブルが生じた際、子どもの思いを尊重しようとするあまり、援助のタイミングを逃してしまい、子どもが自力で解決できずに関係が途切れてしまう場面も見られた。
- (2) 関わりが深まる子ども同士に援助が集中し、周囲で様子をうかがっている子への配慮が十分でなかった場面もあった。

V 今後の実践に向けて

本実践を通して、友だちとの関わりは、環境や援助の在り方によって大きく広がることを改めて実感した。今後も、子ども一人ひとりの育ちや関係性の変化を丁寧に捉えながら、保育領域「人間関係」の視点を大切にした実践を積み重ねていきたい。また、本研究で得られた気づきを日々の保育や次年度の計画に生かし、主体的に人と関わり、遊びを楽しむ子どもの育成に努めていきたい。

〈主な参考文献〉

- 大豆生田 啓友 監修 おおえだ けいこ 著 2024年 『子どもが中心の「共主体」の保育へ』 小学館
 田澤 里喜 著 2024年 『子ども主体の保育と保育者の役割』 世界文化社
 柴崎 正行 著 2013年 『子どもが育つ保育環境づくり』 学研

友達と協力して遊ぶ楽しさを味わうための援助の工夫

—集まりの場「じょうなんかいぎ」を通して—

那覇市立城南こども園 保育教諭 屋嘉比 大輔

I テーマ設定の理由

中央教育審議会では、急激に変化する時代の中で育むべき資質・能力について、「あらゆる他者を価値ある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手になることができるよう、その資質・能力を育成すること」と示している。

幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説(以下教育・保育要領解説)では、資質・能力が育まれている園児のこども園修了時の具体的な姿の一つである「協同性」について、「友達と関わる中で、互いの思いや考えを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになる」と示している。これらのことから、園児が互いの思いを伝え合いながら、協力して遊ぶ楽しさや充実感を味わえるような環境構成や援助の工夫をすることが重要だと考える。

本学級は、5歳児(2年保育)計24名で、実態としては、自ら好きな遊びを見つけたり、気の合う友達を誘ったりし、興味のある遊びを楽しむ姿がよく見られる。しかし、自分の考えを友達に表すことはできるが、友達の考えを受け入れる等、折り合いをつけ遊ぶことが難しく遊びが発展しない様子がある。このことから、友達の考えの良さに気付く、協力しながら遊んだり活動したりする楽しさを感じている園児が少ないということが捉えられる。また、私の保育実践を振り返ると、友達の考えに興味をもち、自分なりに遊びに取り入れるような手立ての工夫は行ってきたが、友達と思いや考えを共有し、一緒に遊びを進めることで友達と協力して遊ぶ楽しさを味わえるような、援助が十分ではなかったと考える。

園児が友達と協力して遊ぶ楽しさを味わうためには、共通の目的をもつための手立てが必要だと考える。そこで、気付いたことや思いなど友達と考えを共有できるよう、園児同士をつなぐ援助の工夫をしたり、共通の目的が生まれるきっかけとなる園児の実態を捉え、集まりの場で紹介したりすることで、友達と協力して遊ぶ楽しさを味わえるのではないかと考え、本テーマを設定した。

II 課題に対する具体的な手立て

1 集まりの場『じょうなんかいぎ』で考えを共有し、共通の目的をもつための手立ての工夫

園児が友達の遊びや考えに興味をもち、クラスで相談しながら様々な活動を進めていく楽しさを味わえるよう、絵本「こどもかいぎ」の読み聞かせを通して、話し合い活動への興味を引き出した。また、主体的に参加できるよう、園児と一緒に集まりの場の名前を考え、『じょうなんかいぎ』と名付けた。

『じょうなんかいぎ』を通して、共通の目的をもつための手立ての工夫を下記にまとめた。(表1)

表1 『じょうなんかいぎ』の手立ての工夫

◎援助	
◎一人一人の参加の仕方や考えを認め、保育教諭の言葉掛けを工夫することで、安心して思いが表現できるようにする。	
◎タブレットを活用することで、遊びや活動を振り返られるようにし、様々な考えを共有できるようにする。	
◎共通の目的をもつきっかけとなるような園児の表現を見逃さず捉え、共有できるようにする。	
◎興味関心が広がり、様々な考えが出るように、内容に応じて「じょうなんかいぎ」を行う時間を工夫する。	

2 園児同士をつなぐ援助の工夫

集団遊びや行事への取組の中で、園児が友達と共通の目的をもって遊ぶことを楽しめるよう、遊びの場や『じょうなんかいぎ』の場で、園児同士をつなぐ援助の視点や工夫を下記にまとめた。(表2)

表2 共通の目的をもって遊べるよう、園児同士をつなぐ援助の工夫

◎援助	【援助の視点】
◎園児が自信をもって表現できるよう、考えを肯定的に受け止める。	【考えを認める】認
◎思いや考え等を共有し、互いの考えに関心をもてるようにする。	【関心をもたせる】関
◎園児の考えを引き出せるように言葉掛けを工夫する。	【考えを引き出す】考
◎共通の目的をもって遊ぶきっかけとなる園児の姿や考えを共有する。	【共通の目的をもたせる】共

Ⅲ 課題解決に向けた取組

実践事例1 共通の目的をもつための援助の工夫 ～ドッジボールの作戦会議をする姿を通して～(7月)

《これまでの園児の様子》

進級児から「ドッジボールがやりたい」との声があり、クラスでドッジボールを楽しんでいる。初めて参加した園児も、繰り返し遊ぶ中で少しずつルールを理解し始め、ボールを当てられないように逃げたり、友達を当てようとしたりする等、一人一人が楽しんで参加している。しかし、同じチーム同士で投げたボールを追いかけたり、ボールの取り合いをしてトラブルになったりする姿も見られた。

《共通の目的をもつことにつながる園児の捉え》

ドッジボールの試合観戦中、A児のチームが丸くなって座り話し合いを始めた。保育教諭が「何しているの？」と聞くと、「作戦会議している」とA児が答えた。

《保育教諭の願い》

これまでそれぞれの思いで楽しんでいた園児が、作戦会議をしている姿やA児の考えを『じょうなんかいぎ』で共有することで、共通の目的をもってドッジボールを楽しめるようになってほしい。

《『じょうなんかいぎ』やその後の園児の様子》

援助の視点【考えを認める】認【関心をもたせる】関【考えを引き出す】考【共通の目的をもたせる】共

タブレットの写真を見せながら、作戦会議をしている姿を『じょうなんかいぎ』で紹介し、全体で共有できるようにした**関**。A児に「なにしていたの？」と聞くと、「作戦会議をしていた」と答えた。A児から考えを引き出せるように、『作戦会議』ってかっこいいね。どうして『作戦会議を』したの？」と聞くと**認考**、「試合で勝つために作戦を考えてた」と説明する姿があった。A児の考えをわかりやすく代弁することで、他児の考えを引き出せるように「今日の試合で負けたから、次は勝てるように、チームで作戦を考えていたんだね。みんなは、なんで作戦会議したら勝つことができると思う？」と全体に問いかけた**関考**。すると、「みんなで力を合わせないと勝てないからだよ」「はさみうちするために相談するんだよ」等の意見が出た。そこで、“勝つために力を合わせる”という共通の目的を明日のドッジボールにつなげられるよう「そうなんだ。勝つためには力を合わせる必要があるんだね。みんないいことに気付いたね」と言葉掛けをした**認共**。

次の日、園児のやりたいという声からドッジボールを行うと、A児が所属していないチームでも、友達同士で声を掛け合って丸くなり、作戦会議をする姿が見られた。また、これまで投げたボールを追いかけ、ボールの取り合いをすることが多かった園児が、友達に「はさみうちしよう」と声を掛ける様子が見られた。

《考察》

作戦会議している姿が共通の目的をもつきっかけとなると捉え、『じょうなんかいぎ』で紹介したことで、A児の「試合で勝つために作戦会議をする」という考えを共有することができた。また、作戦会議をする意味を全体で考えられるように言葉掛けを工夫したことで、様々な考えを引き出すことができ、“試合に勝つために力を合わせる”という共通の目的を同じチームでもつことができた。さらに、共通の目的をもたせたことで、次の日の試合では、A児が所属していないチームも作戦会議を行ったり、「はさみうちしよう」と声を掛けあったりする姿が見られたことから友達と協力して遊ぶ楽しさを味わうことができたと考えられる。

実践事例2 クラスで協力する楽しさを味わうための援助の工夫 ～運動会の取組を通して～(10月)

《これまでの園児の様子》

11月に小学校と合同で運動会があることを伝え、城南こども園は何をするのか『じょうなんかいぎ』で相談すると、去年の経験を思い出した進級児から「バルーンをやりたい!」との声があがった。他児から「バルーンってなあに？」と疑問の声が出たことで、園児のアイデアからバルーンを知らない友達のために、過去の運動会のDVDを視聴することになった。DVDを視聴し、様々なバルーンの技を知ると、ほとんどの園児が興味をもち、友達同士で「やってみたい!」と話す様子があった。

《共通の目的をもつことにつながる園児の捉え》

バルーンの練習中、タイミングが合っていなかったり、ふざける園児がいたりして、技を失敗することが続いた。その中で、ふざけている友達に注意するB児の姿や失敗したことを残念そうにするC児の姿が見られた。しかし、バルーンをやる楽しさから気持ちが高まりあまり失敗を気にしない園児や友達から注意されても繰り返しふざけてしまう園児もいた。

《保育教諭の願い》

『じょうなんかいぎ』で運動会について話し合うことで、B児やC児の思いを共有し共通の目的をもって運動会への取組を進め、クラスで協力する楽しさを味わってほしい。

《『じょうなんかいぎ』やその後の様子》

援助の視点【考えを認める】認【関心をもたせる】関【考えを引き出す】考【共通の目的をもたせる】共

共通の目的をもって運動会に取り組んでほしいと思い、『じょうなんかいぎ』で「みんなはどんな運動会にしたいかな?」と言葉掛けをすると**考共**、B児から「かっこよくやりたい」という意見や、C児から「お母さんたちにすごい!!って言ってほしい」という意見が出た。B児やC児の考えを受け止め、全体で共有できるように「そうだね!せっかく運動会をやるなら、かっこいいところ見せたいね!みんなはどう思う?」と問いかけると**認考共**、全員が肯定的に返事を返す姿があった。そこで、バルーンをかっこよく披露するためにはどうしたらいいか考えられるように「どうしたらかっこいいところを見せられるかな?」と聞くと**関考**、「バルーンの技を成功させる」という意見が出た。園児の考えを認め具体的な考えを引き出せるように「先生も技を成功できたら、とっつてもかっこいいと思う」と言葉掛けをし、練習中に撮影したバルーンの動画をみんなで視聴した**認関考**。視聴後、園児から感想を聞くと「みんなバラバラに動いている」「ふざけている人がいる」という声があった。「どうしたらもっとかっこよく成功できるかな?」と問いかけると**関考**、「心をひとつにする」「みんなで協力してがんばる」「声を出して合わせる」等の考えが出てきた。それぞれの意見を繰り返し言葉にして認め、次の練習に繋がれるように、「みんなで心をひとつにして、技が成功できるように声を出して合わせるんだね!じゃあ次の練習は声を出してやってみようか!」と言葉掛けをした**認共**。次の日、『じょうなんかいぎ』で共有した考えや共通の目的を振り返る場をもち**共**、技の掛け声の練習をしてバルーンを行った。すると、ほとんどの技を成功させることができ、園児自ら「技が成功したから楽しかった」「もっと練習したい」と保育教諭に伝える姿が多く見られた。

《考察》

保育教諭が運動会について『じょうなんかいぎ』をもち、園児同士をつなぐ援助の工夫をしたことで、B児やC児の運動会に向けた思いを共有することができた。また、思いを共有したことで「かっこよく技を成功させたい」という共通の目的をクラスでもつことができ、そのためにはどうしたらいいのか考えを出し合うことができた。そして、『じょうなんかいぎ』で出た考えを次の日の練習で取り入れ、たくさんの技を成功させたことで、園児から「もっと練習したい」という意欲的な声が多く聞こえた。そのことから、クラスで協力して取り組む楽しさを味わうことができたと考える。

IV 実践の振り返り

1 成果

- (1) 保育教諭が園児同士をつなぐ援助の視点を持ち、『じょうなんかいぎ』で援助や言葉掛けを工夫したことで、友達と思いや考えを共有することができ、共通の目的をもつことにつながった。
- (2) 集団遊びや行事への取組の中で、共通の目的をもつきっかけとなる園児の姿を見逃さず捉え、集まりの場で共有したことで、共通の目的をもち協力して遊ぶ楽しさを味わうことができた。

2 課題

- (1) ほとんどの園児が『じょうなんかいぎ』に主体的に参加しているが、自分の思いや考えを言葉で発表することが苦手な園児もいるので、様々な方法で表現できるよう援助や環境構成の工夫が必要。
- (2) 集団遊びに意欲的に参加しているが、友達との対話があまり見られない一部の園児には、友達と言葉のやりとりをしながら遊ぶ楽しさを実感できるような援助の工夫が必要。

V 今後の実践に向けて

- (1) 園児一人一人の『じょうなんかいぎ』の参加の仕方を認めながら、文字や絵等で表現できるよう環境構成を工夫したり、事前に個別で考えを聞き、代弁する等の援助の工夫をしたりすることで、それぞれの園児が自信をもち、自分の思いや考えを表現できるようにしていく。
- (2) 遊びや生活の場面で、友達と言葉のやりとりをしながら遊ぶ楽しさを味わえるように、場面に応じて園児の思いを認め、具体的に言葉にして代弁する等、一人一人に応じた援助を工夫していく。

〈主な参考文献〉

内閣府・文部科学省・厚生労働省 2018 『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』 フレーベル館
關章信・兵頭恵子・高橋かほる 監修 2019 『遊びや生活のなかで10の姿を育む保育』 チャイルド本社

一人一人が自己発揮をし、安心して自分の思いを伝え合うことができる 環境構成や援助の方法について

— レインボータイムの取り組みを通して —

那覇市立壺屋こども園 保育教諭 高江洲 大輔

I テーマ設定の理由

本学級（5歳児、男子13名女子10名計23名）は、人懐っこく自分から友達や保育教諭に関わっていく子が多い。一方で、友達との関わりの中で過激な言葉や強いジェスチャーを用いて思いを伝えたり、自分の話を優先して友達や保育教諭の言葉を遮ったりしてしまう姿が見られた。こうした姿の背景には、デジタルメディア・インターネットの急速な普及で、テレビや動画配信、SNS、ゲームなどを通して刺激的・攻撃的な言葉や表現に日常的に触れる環境にあるからではと考えられる。そのため、相手の気持ちに気づかず一方的に思いを伝えてしまうため、トラブルにつながる場面も多く、状況に応じて言葉を選び、相手の思いを想像する力の育ちに課題があると感じられた。幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説の第2章（4）言葉の獲得に関する領域「言葉」の中で「保育教諭等は、園児が言葉で考えたいような経験を重ね～ 中略 ～そのように言葉によって伝え合う中で確かなものになっていく。」と示されている。これまでの集団生活の中で、園児達には言葉でのやり取りを楽しむ基礎が育ってきており、適切な環境と支援があれば、相手の思いに気づきながら自分の思いを伝える力をさらに育むことができると考える。そこで本研究では、園児が安心して思いを表現し、友達の気持ちにも気づくことができるような環境設定や保育教諭の援助の仕方について検討し、園生活の中でより豊かなコミュニケーション力が育つことを目指し、このテーマを設定した。

II 課題に対する具体的な手立て

- 1 自分の言葉の使い方や友達への影響に気づくことができる環境構成
「嬉しい言葉」「悲しい言葉」など、日常で使う言葉の違いについて園児達と話し合い、分類しながら一緒に掲示物にまとめる。言葉の整理が視覚的にでき、自分の表現を見直す機会に繋げていく。
- 2 安心して自己表現し思いを伝えることができる場の設定
 - (1) 日々の保育の中で自分の思いを自由に話す場として「レインボータイム」を設ける。
 - (2) 発表する子の気持ちに寄り添い、保育教諭が共感することで、安心して思いを伝えられるようにし、友達の気持ちにも気づくことができるようにしていく。

III 課題解決に向けた取組 （実践）

◆実践事例1：「言葉の使い方に気づき、自他の気持ちを大切にする力を育む

～“ふわふわことば“と”ちくちくことば“を“考える～”

《園児の実態》

5月下旬、連休明けで園生活に慣れ始めた頃、遊びや生活の場面において、過激な言葉やジェスチャーで思いを伝えようとする子や、一方的に思いを伝えられて困惑する子の姿が見られた。また、互いの思いが十分に伝わらず、トラブルにつながる場面が増えていた。

《保育教諭の願い》

- ・園児が気持ちを伝える際に、適切な言葉や方法を選び、穏やかに表現できるようになってほしい。

- ・友達や保育教諭など相手の気持ちに気づき、他者の思いを受け止められるようにし、「ふわふわことば」の心地よさや温かさを実感しながら、日々の生活の中で優しい気持ちを持って過ごしてほしい。



《保育教諭の援助》

- ・園児一人ひとりの経験をもとに「言われて嬉しい言葉」と「言われると嫌な気持ちになる言葉」についてクラス全体で話し合い、出てきた言葉を文字にして、嬉しい言葉を「ふわふわことば」、嫌な言葉を「ちくちくことば」として園児達と一緒に整理・分類していく。
- ・園児があげた言葉を掲示物としてまとめ、保育室の見やすい場所に掲示することで、日々の生活の中で意識し、自ら振り返ることができるようにする。

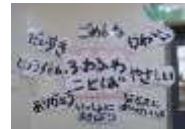


《園児の姿》

- ・園児は、嬉しかった言葉や嫌だった言葉を発表して気持ちを伝え、「ふわふわことば」と「ちくちくことば」に分類することで、言葉が友達の気持ちに与える影響に気づいていた。
- ・一緒に掲示物を作成した事で掲示物に関心を持ち、友達同士で読んで確認する姿も見られるようになった。

《園児の変容》

- ・園児が自分なりにふわふわことばとちくちくことばを考え、ちくちくことばを使うと互いに教え合うようになり、ふわふわことばの心地よさを感じることで過度な表現やジェスチャーも見られなくなった。
- ・道具の整理整頓や物の貸し借り、順番を譲り合う行動を子ども自身が「ふわふわこうど」「ふわふわゆずり」と名付けて意欲的に取り組む姿が見られるようになった。



《考察》

- ・「ふわふわことば」「ちくちくことば」を掲示して見えるようにしたことで、園児は日常的に使う言葉を意識し、自分の言動を振り返ることが増えた。また、気持ちを共有する話し合いを通して、友達も同じように喜びや悲しさを感じることに気づき、相手の立場を考える力が育っていった。
- ・「ふわふわことば」の心地よさが行動にも広がり、園児の優しい関わりが増えたことから、言葉を分類して可視化し気持ちを共有する場をもつことが、思いやりある言葉や行動の育ちに役立つことが分かった。褒められたい思いだけでなく、誰かに見られていなくても良い行動を自ら行うことの大切さに気付いていた。相手の気持ちを考えて気持ちよく過ごそうとする姿が広がり、言葉づかいだけでなく行動面にも思いやりのある前向きな変化が見られるようになった。

◆実践事例2：「『レインボータイム』を通して、思いや考えを伝え合う力を育む」

《園児の実態》

- ・園児は「聞いて！」と自分の思いや経験を積極的に伝え、話した後には「みんなにも話したい！」と発表を求める姿も見られ、話す意欲や聞いてもらう喜びを強く感じている。
- ・遊びや生活の中で思いがうまく伝わらず誤解やトラブルになる場面があり、気持ちを言葉で伝える力や相手の思いを受け止める力が十分でないことが原因となることがある。

《保育教諭の願い》

- ・レインボータイムを通して、自分の気持ちを安心して伝えたり友達の話に耳を傾けたりしながら、ふわふわ言葉の心地よさや相手の気持ちに気づく大切さを感じ、互いを思いやって関わるようになってほしい。
- ・友達の思いや感じていることに気づき、自分とは違う意見にも耳を傾けながら互いの考えや気持ちを受け入れ、安心して過ごせるクラスへと育ってほしい。

《保育教諭の援助》

- ・園児の気づきや考えをクラスで共有できるよう「レインボータイム」で話すことを促し、発表時に共感し、安心して表現できる温かな雰囲気づくりに努める。
- ・言葉にすることが難しい子には、一緒に気持ちを表現する言葉を探しながら思いを代弁する。また、「皆はどう思う？」と問いかけ、クラス全体で考えを共有するきっかけを作っていく。

《園児の変容》

- ・取り組みを重ねる中で、友達と協力した経験を嬉しそうに発表する園児が増え、友達と活動したことを共有することを喜ぶ姿が見られるようになった。
- ・友達の良い行いや努力に気づいて発表する姿が増え、認められた園児が嬉しさから前向きに行動するなど、互いを認め合う関係が育ちつつある。



《考察》

- ・園児は個人の発表だけでなく、友達と一緒に発表することを楽しみ、協力した経験を共有する姿へと変化した。レインボータイムが協同的な関わりを促す機会となったと考えられる。
- ・友達の良い行いや努力に気づき、「嬉しかった」「すごいと思った」と肯定的に伝え合う姿が増えた。こうした言葉のやり取りは他者理解や共感の育ちにつながり、認められた園児が生活の中で前向きな姿を見せるなど、自己肯定感の向上につながった。

IV 実践の振り返り

1. 成果

- ・一人一人が相手の気持ちを考えて言葉を選べるようになり、安心して自分の気持ちや友達の気持ちを、言葉で伝え合えるようになった。
- ・「ふわふわ言葉とちくちく言葉」を整理して話し合い、環境構成として掲示物にして貼り出し可視化することで、言葉の影響に気づき、日常生活の中でも優しい言葉や関わりを選ぶ姿が増えた。
- ・レインボータイムを通して、安心して気持ちを伝え合い、友達の良さを認め合いながら、全体で共有できるように援助していくことで、クラスの関係性と雰囲気がより温かくなった。

2. 課題

- ・一人一人が自分の思いや気持ちを言葉で伝え、友達の話聞いて受け止めようとする姿が育ってきている一方で、気持ちが高ぶると行動が先行し、言葉で十分に思いを伝えられない場面がある
- ・掲示物で可視化することは効果的であったが、時間が経つと日常の風景の一部となり、意識されにくくなっていった。園児自身が関わり、言葉を更新して追加していくなどの生きた掲示物にしていく必要がある。

3. 実践を通じた自身の気づき、考え

- ・今回の実践を通して、相手の気持ちを考えて言葉で思いを伝え合う姿が育ってきている一方、気持ちが高ぶると行動が先行する場面も見られた。今後は、日常の関わりの中で感情に寄り添いながら、落ち着いて気持ちを言葉にする経験を積み重ねていきたい。
- ・掲示物は効果がある一方で、時間とともに意識されにくくなる課題が明らかになった。言葉の育ちは継続的な関わりの中で深まると考え、今後は園児が関わる「生きた掲示物」を活用し、安心して気持ちを言葉にできる環境づくりを進めていきたい。

V 今後の実践に向けて

安心して思いを話せる場を大切にし、意見の違いや葛藤が生まれたときには話し合う機会を作り、感情が高ぶる場面を学びの機会と捉え、園児が主体的に関わる「生きた掲示物」や振り返りの時間を通して、言葉の大切さを継続的に育んでいきたい。

〈主な参考文献〉

内閣府文部科学省厚生労働省 平成30年 『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』 フレーベル館
 大豆生田哲友 豪田トモ 著 2022年 『子どもが対話する保育「サークルタイム」のすすめ』 小学館
 今井和子 著 1996年 『子どもとことばの世界～実践から捉えた乳幼児のことばと自我の育ち～』 ミネルヴァ書房

話を聞く力、言葉で伝え合う力を育み、会話を楽しむ園児を育てるための工夫

—ドキュメンテーションを活用した振り返りの取り組み—

那覇市立那覇こども園 保育教諭 伊良波 志奈子

I テーマ設定の理由

幼稚園教育要領および幼保連携型認定こども園教育・保育要領には、指導計画作成上の留意点の一つに、「言語活動の充実」が挙げられており、園児が伝えたいことを伝えたい誰かに向けて言葉にしたり表現する言語環境を整えていくことが求められている。また、領域「言葉」のねらいには、「人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう」ことが示されている。このようなことから、周りとの温かい関係の中で、言葉での伝え合いを通して、相手の話を聞き相手のことを理解したり、共感したりすることで、互いの思いが分かる楽しさや喜びが味わえるようになると大切だと考える。

本学級の実態としては、4歳児（2年保育）計25名の園児が在籍しており、内2名は初めての集団生活である。入園当初から好きな遊びを見つけてじっくりと遊ぶことが好きな子が多く、保育教諭等との関わりの中で安心して園生活を過ごす姿が見られた。一方で、一人遊びで満足している子が多く、好きな遊び以外にはあまり興味を示さず友達との関わりが少ない様子や、会話が一方的になったり途中で途切れてしまうなど友達とのやりとりがうまくいかない姿が見られる。また、毎日の活動をクラスで振り返る場では集中が切れてしまい話を最後まで聞くことが難しかったり、自分の思いを言葉で伝えることに戸惑いが見られる園児の姿も見られる。

このような実態を踏まえ、会話のきっかけ作りをすることで自分なりの言葉で経験したことや思いを伝えようとしたり、活動の振り返りから、相手の思いや考えを聞く楽しさや大切さを感じることができるよう、ドキュメンテーションを活用し“話を聞いてみたい”“伝えたい”と思えるような工夫をしていきたいと考えた。

II 課題に対する具体的な手立て

- ① 「伝えたくなる」なるような経験と、ドキュメンテーションを活用した振り返りの場において、話を聞きたくなるような援助や環境構成の工夫
 - ・ドキュメンテーションを見ながら活動を振り返ることで、自分の思いや経験を「話してみたい」「伝えると楽しい」という経験を積み重ねていく。また、友達の思いに気付いたり興味を持っている遊びを知ることによって、「やってみたい」「もっと聞いてみたい」「知りたい」という意欲につなげていく。
- ② 家庭での会話につながるドキュメンテーションの工夫
 - ・園児の活動内容だけでなく、どんな育ちにつながっているのかを書き出したり、園児だけでなく保護者にもわかりやすい内容にする。また、掲示時間や掲示場所の工夫をし、親子での会話につながるような言葉かけの工夫をする。

III 課題解決に向けた取り組み（実践）

【実践事例】「友達はどんな遊びをしているのかな～ドキュメンテーションでの振り返り～」

(1) ドキュメンテーションを活用した振り返りの場において

【幼児の姿】入園当初から5月中旬ごろ

- ・好きな遊びを見つけて、一人遊びをじっくり楽しんでいる。
- ・友達の話を知っているが、最後まで聞くことや相手の思いを受け止めることが難しくいざこざになることがある。

【保育教諭の読み取り】

- ・一人遊びで満足していて、友達との関わりが少ない。
- ・友達の話を知っているものの、最後まで聞くことが難しい。

【保育教諭の願い】

- ・友だちの話を知り、自分の思いを自分なりの言葉で伝える経験を重ねてほしい。
- ・友だちが楽しんでいる遊びに興味をもち、友達との関わりが増えることで、話すことや聞くことを「楽しい」と感じ、会話への意欲が高まってほしい。

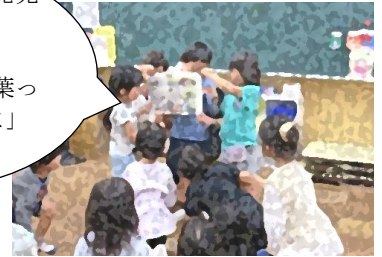


ドキュメンテーションは保育がどのように展開したかを可視化する記録であり、友達の思いや姿に気付いたり、自分自身の成長を感じることができきっかけとして取り入れていく。

【○環境構成 ㊦保育教諭の援助】

○振り返りの時間には、園児の目線に合わせて当日の活動のドキュメンテーションを見たり、友達の話の聞いたりできるような環境をつくる。また、日々のドキュメンテーションをファイリングし、いつでも活動を振り返って見ることができるようにする。
 ㊦発言の途中で言い直したり評価したりせず、うなずきや表情など大切な関わりとして受け止め、一人一人安心して話せるような雰囲気作りをする。

A「面白いことを発見しました」
 B「どれ？」
 A「この大根の葉っぱに虫がいたよ」
 B「どんな虫？」



【変容】

- ・ドキュメンテーションを活用した振り返りを継続することで、友達の話に興味を持ち、耳を傾けようとする姿が徐々に見られるようになった。
- ・自分なりの言葉で出来事や思いを伝えようとする姿が増え、言葉で伝え合う力の育成につながった。
- ・保育教諭等や友達に聞いてもらう経験を重ねたことが自信になり、話すことや会話を楽しむ姿が増えた。

(2) ドキュメンテーションを通して広がる園児と保護者の会話

【実態】

- ・家庭で園の出来事など話題になることが少なく、園での様子が十分に伝わっていない。
- ・園児が何を伝えたいのかわからず、「園での様子がわからない」という保護者の声がある。



【保育教諭の読み取り】

- ・保護者は園での様子を知りたいが、園児の言葉だけでは伝えたいことがうまく伝わっていないのかな。
- ・園での出来事を伝えたい気持ちはあるものの、言葉だけでわかるように伝えることが難しいのかな。

【保育教諭の願い】

- ・自分なりの言葉で伝えようとする姿や、進んで話そうとする姿が増え、言葉を交わす喜びや楽しさを感じてほしい。



【○環境構成 ㊦保育教諭の援助】

○園児や保護者が自然に立ち止まり、指を差しながら見られる高さに掲示することで、自分や友達の姿を見つけやすいようにする。
 ○園児の発言や様子を短い言葉で添えることで、園児が保護者に伝えやすくする。また、見るポイントを明確にすることで、話題が広がるようにする。
 ㊦保育教諭等が保護者に説明するのではなく、園児が伝える主体となれるよう、「今日はどんなことがあったかお父さんやお母さんに教えてね」と声をかけ、園児自身の言葉で伝えられるよう見守る。
 ㊦ドキュメンテーションは、保護者にとって園での様子を知り園での生活と家庭を結ぶツールとして、毎日掲示する。また、保護者が園児の興味・関心を知り、会話へ繋がるきっかけとなるような援助をする。

保護者「今日は、どんな事をして遊んだの？」
 園児「砂遊びをしたよ。友だちと一緒に水も流してみたよ」



保護者にも園児にもわかりやすく簡潔な言葉で記入する



園児のつぶやきや気づき等、色鉛筆などで色を付けて見やすいように工夫する

遊びや活動の中で、友達の遊びに気付いたり、会話のきっかけになるような写真の精選をする

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の視点から、活動や遊びの中で育まれているであろう姿にはハートマークを付けて表示する

【変容】

- ・ドキュメンテーションをきっかけに、園児は園での活動を伝えやすくなり、保護者は園での様子が分かりやすくなったことで会話が弾むようになった。
- ・送迎時だけでなく、登園時間にもドキュメンテーションを掲示したことで、園児自ら保護者に園での出来事を伝えようとする姿が見られるようになり、家庭での会話へと広がっていった。

IV 実践の振り返り

①成果

- ・ドキュメンテーションを「見るための掲示物」とするのではなく、園児の姿を「見える化」し「話を生み出す環境」として構成することで、その時に自分が何を考えていたのか、会話を思い返すきっかけとなった。
- ・園児の言葉を受け止め、つなげていく関わりをしたことが会話を楽しむ雰囲気づくりとなり、振り返りの場でも安心感を持って話す姿が増え、話を聞く力や言葉で伝え合う力の育成につながった。また、発言に消極的だった子も自分の思いを少しずつ言葉で伝えようとする姿が見られるようになった。会話を通して気持ちが伝わる経験を重ねたことで、話すことや聞くことを「楽しい」と感じる園児が増えた。
- ・園児が保護者に向けて園での出来事を伝えようとする姿が見られるようになり、園での経験が家庭での会話へと広がっていった。

②課題

- ・振り返りの場で発言する園児が固定化しやすく、全員が十分に言葉を交わせる環境づくりが難しかった。
- ・話を聞こうとする姿勢や言葉を伝える力には個人差があり、発言まで時間を要する園児や支援が必要な園児へ更なる配慮や援助の工夫が必要である。

③実践を通じた自身の気づき、考え

- ・話を聞く力や言葉で伝え合う力は、温かい関係の中で聞いてもらえる経験の積み重ねによって育まれるものであると改めて感じた。保育ドキュメンテーションは園児の姿を「見える化」することで、会話のきっかけを生み、友達の思いや考えに気づき、目を向ける大きな役割を果たしていたと考える。
- ・ドキュメンテーションを見た際に、文字が読めない園児でも自分の学びや達成したことを確認できたことで、「伝えたい」「聞いてみたい」という気持ちや自己肯定感が育まれていったと考える。

V 今後の実践に向けて

○課題の改善策、今後取り組んでいきたいこと

- ・ドキュメンテーションを振り返りの場だけでなく、日常の遊びや生活の中でも活用し、園児同士の自然な会話につなげていきたいと考えている。掲示したドキュメンテーションをきっかけに、園児自らが友達に話しかけたり、遊びの中で会話が生まれる環境づくりを進めていく。
- ・一人一人の育ちを丁寧に捉え、話を聞く力や言葉で伝え合う力の小さな変化を積み重ねていくことを大切にしていきたい。また、園児が安心して話し、会話を楽しめる集団作りを目指し、話す人と聞く人の互いの顔が見えるような環境を整えるなどの工夫をしながら、保育教諭自身も園児との信頼関係を深められるよう関わりを振り返りながら援助の工夫をしていく。
- ・友達の意見を聞くことや話し合いをする経験を通して、主体性や意志決定ができる力につながるよう園児と一緒にドキュメンテーションを編集する機会を作っていきたい。

〈主な参考文献〉

内閣府・文部科学省・厚生労働省 2019年 「幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説」 フレーベル館

浅井 拓久也 2019年 「活動の見える化で保育力アップ！ドキュメンテーションの作り方&活用術」 明治図書出版

斎藤 政子 2023年 「保育内容「言葉」と指導法 理解する・考える・実践する」 中央法規出版

友達と気持ちを通わせながら遊びや活動を楽しむ子を目指して —対話的な関わりを通して—

那覇市立与儀こども園 保育教諭 真栄田 麻子

I テーマ設定の理由

現代社会においては、人間関係が希薄になり、他者との関わりに困難を感じる若者や大人が増えていると言われている。SNSなどの影響もあり、他者と深く関わる経験が乏しくなりつつある昨今、幼児期における直接的な関わりの中で育まれる「人との関わり」や「感情のコントロール」「折り合いをつける力」などの社会的スキルの重要性は、ますます高まっている。

幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説の領域「言葉」では「経験したことや考えたことを自分の言葉で表現しようとする」「相手の話を聞こうとする」ことの大切さが示されており、また、「自分の思いや考えを伝えたり、相手の話を聞いたりしながら、互いの思いを共有しようとする力」が協同的な関わりの中盤であるとされている。このことから、子どもが安心して言葉で思いを伝え合い、他者とのやりとりを重ねる経験を積むことの重要性が読み取れる。加えて、「那覇市こども計画」の施策の一つである第4章こども施策に関する重要施策(2)「多様な遊びや体験、活躍できる機会づくり」では、子どもが多様な他者と関わりながら自分の思いを表現し、対話を通して関係を深めていくことの重要性が掲げられている。これは、幼児期における友達や保育者との関わりを通して相互理解を深める本研究の主題と関連していると考えられる。

本学級は『5歳児(2年保育)計19名』で構成されており、そのうち12名が進級児である。ほとんどの子が集団生活の経験があり、基本的な生活習慣や集団ルールを理解し、安定して過ごす姿が見られる。日々の保育の中では、遊びの中で自分のやりたいことを見つけたり、友達と関わって遊びを進めたりする姿も多く、年長児としての自覚や主体性が育ち始めていると感じる。一方で、自分の思いを一方向的に主張するだけで、友達と折り合いをつけることが難しかったり、自分の考えをうまく言葉で表現できずに関わりを避けてしまったりする子も見られる。また、友達との関わりの中でトラブルが起きたときや意見が合わなかったときに、自分の気持ちを抑えて譲ったり、逆に怒って関係を断ってしまったりする場面もある。このような実態を踏まえ、子ども達が自分の思いを安心して表現できる環境の中で、互いの考えや気持ちに触れあいながら、友達と協同して遊びや活動を深めていける力を育てたいと考えた。対話やサークルタイムという日常的な関わりを通して、子ども達が言葉での表現や友達との関わりをどのように深めていくかを見取り、そこから幼児期の人間関係の育ちを探っていきたい。

II 課題に対する具体的な手立て

1. 安心して話せる雰囲気づくり
 - (1)肯定的に受け止め、「そうだったんだね」等と気持ちに共感する言葉かけを行い、誰もが安心して話せる場を作る。
2. 一人一人のつぶやきを逃さず、言葉で表現する
 - (1)遊びや生活の中での小さなつぶやきや表情に気づき「〇〇したかったの？」等と、思いを表現しやすいように保育者が言葉にする。

3. 友達の思いに気づけるようなやりとりをつなぐ援助

(1)それぞれの思いを言葉で整理し伝え、「どうしたら楽しめるか」を問いかけながら話し合いにつなげる。

Ⅲ 課題解決に向けた取組 (実践)

実践事例 『Y児の変容をおって』

(Y児の実態、保育者の願い)

Y児は進級児であり、これまでの園生活の中で周囲の友達に対し優しく接する姿が多く見られていた一方で、自分がイメージしている遊びや活動にこだわりがあり、相手と意見が異なる場面では自己主張を強め、相手の言葉に耳を傾けにくい様子が見られた。本児の思い描く役割分担や遊びの展開を優先しようとし、思い通りにならない場面では相手に対して強めに言葉で訴えたり、時には遊びから離れたりしてしまう姿もあった。友達との関わりの中では、相手の表情に気づいているが、折り合いをつけることが難しい場面も見られ、友達との関わりは良好に見えても、深まりきれずに表面的な関わりにとどまることも多かった。Y児自身は「友達と一緒に遊びたい」「自分のことを分かってほしい」という願いをもっており、その思いと実際の関わり方のズレに葛藤をしているように見えた。Y児の「友達と気持ちを通わせたい」という思いを大切にしながら、友達の良い気持ちや意見に気づき、自分の行動に結びつけていく力を育てることを目指した。

4月『ままごと遊び』

(幼児の実態)

ままごと遊びでは、役割を決める際にY児が「自分はお母さんがいい」と主張し、同じ役を希望する友達に対して「〇〇は違うのにして」と強い口調で言い切る場面もあった。また、本児の思い描く理想のごっこ遊びがあり、そこで他児が違う流れで遊びを進めようとする「違うよ」「それはほしくないだよ」と制止する姿も見られた。関わりの中で本児の意に添わないことがあると、急に静かになったり、遊びから離れたりしてしまい、関係が途中で切れてしまう場面があった。

(保育者の願い)

本児の思いを表現することと同時に、相手の思いや考えにも耳を傾け、受け止める経験を積んでほしい。遊びの中で自然とやり取りが生まれることを期待しつつ、相手の気持ちを知ったり、自分とは違う意見も受け止めようとしたりする経験を積むことで、Y児が友達と心地よい関係を築けるようになってほしい。

保育者の
配慮

役割をめぐって意見が異なった際にすぐに仲立ちするのではなく、Y児がどのような言葉を使って友達に伝えているかを丁寧に見取る。そのうえで、「お母さん役をやりたいたね」「〇〇さんも、お母さん役が気に入っているみたいだよ」と互いの気持ちを言語化し、互いに見える形で共有する。同時に、役割が複数あってもいいことや、交代したり、一緒に考えたりする選択肢もあることを伝える。また、サークルタイムでは、日々の遊びの中の対話に活かせるようにやりとりを絵で表示したり、具体的に伝えたりと工夫した。

(Y児の変容)

・最初は役を独占しようとする姿が多かったが、保育者が互いの気持ちを丁寧に言葉で表現していく中で、Y児は次第に相手の様子を見ようとしたり、「〇〇はお母さんにする？お姉さんにする？」と自分から提案する姿が見られたりなど、遊びが継続する場面が増えてきた。友達が作った料理に対して「おいしそうだね」「作ったのは皿に置いたら？」と相手の行動を受け止めようとする表現が自然に出るようになってきたが、本児の意に添わない言動があると、表情が曇ったり、その場から離れようとしたりする場面も見られた。

9月『お店屋さんごっこ』

(幼児の実態)

集団での役割意識が高まり、お店屋さんごっこで必要な物を作る場面や話し合いの中で積極的に意見を出す姿が見られた。遊びの段階で友達の意見が自分の考える方向と異なると「こんなじゃないよ」「そんなしたら変になるさ」と否定的な言い方も聞かれ、険悪な雰囲気になることもあった。一方でY児はごっこ遊びが好きで、友達と協力して一つの世界を作ることに興味、関心も高く、うまくいかないと落ち込む姿も見られた。

(保育者の願い)

ごっこ遊びの魅力である「イメージの共有」「役割を通した関わり」が、Y児の育ちに必要経験だと考えた。遊びの過程での「対話」と「友達との関わりを深める」を大切に、Y児が友達の言葉に耳を傾けながら、自分の思いも丁寧に伝えられるようになってほしい。

保育者の
配慮

遊び始める前に「どうしたいか」を一人一人が言葉にする時間を設け、サークルタイムでイメージを共有する。また、意見が異なったときは、「どうしてそう思ったの？」「どうしたらいいと思う？」と互いに問い返し、自然な対話が生まれるよう促した。保育者が友達同士を“つなぐ存在”として関わり、友達のやりたいことの背景を知る機会を増やしていった。

(Y児の変容)

役決めで意見が分かれた際には、相手の提案をすぐに否定するのではなく、「何でこれがいいの？」と、相手の気持ちを確かめる言葉が自然にでたり、「順番に交代する？」と自分から折り合いの方法を提案する姿も

見られたり、友達と関わりながら遊びを進めたいという思いが育っている場面も多く見られた。店作りの準備中には、材料を運ぶのに困っている友達に気づき、「手伝う？」と声をかけるなど、周りに目を向けた関わりもあり、開店してからも友達の表情や反応を見ながら言葉を選び、関わりを楽しもうとする様子もあった。これらの姿から Y 児は自分の思いを言葉で調整しながら相手と関わろうとする力や友達と一緒に遊びを作り出したり、進めたりする喜びを実感し始めており、対話的な関わりの方が高まってきていると読み取れる。

IV 実践の振り返り

1. 成果

日々の対話を継続することで Y 児が自分の気持ちを言葉で表現し、相手の考えを最後まで聞こうとする姿勢が徐々に育っていったことが成果である。特に Y 児は自己主張が強く、自分の考えを通そうとする傾向が強かったが、保育者が本児の思いに寄り添ったり、気持ちを代弁したり、相手の意見の背景を可視化する援助を行うことで、少しずつ他児の気持ちへと意識が向けられるようになっていった。

2. 課題

Y 児は全体で何かを決める際に、依然として自己主張が強くなり、相手の言葉を拒否してしまう姿が見られる。また、対話の経験が不十分な子は、話し合いに積極的に声を出すことが難しかったり、自分の意見を控えてしまったりすることも見られる。対話やサークルタイムの経験が自然に日常の遊びに活かされる子がいる一方で、状況によっては対話の習慣が定着しにくい子もおり、個々に応じた支援の必要性が残った。

IV 今後の実践に向けて

本研究では、対話やサークルタイムを通して子どもが自分の思いを言葉で表現し、友達と気持ちを通わせながら遊びや生活を進めようとする姿を目指して実践を行ってきた。その中で、「一部の子が意見を独占してしまう」「違う考えが出た場合の折り合いのつけ方が難しい」といった課題が見られた。しかし、保育者が意図的に発言の機会を保障し、仲立ちを行い、さらに話し合った内容を遊びや生活に反映させていくことで安心して少しずつ自分の考えを表現したり、相手の意見を聞いたりして、折り合いをつけようとする姿が見られるようになってきている。また、自分の思いや考えが尊重される経験を通して自信をもち、互いの思いを共有しながら生活を進めるようとする変容も見られた。これらの姿は幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説の領域「人間関係」に示される「友達と折り合いをつけながら共に活動する」ことや「言葉」における「自分の思いや考えを相手に分かるように話す」「人の話を聞いて理解し、自分の考えを深める」という方向性に一致している。今後も対話やサークルタイムを通して、自分の思いや考えを言葉で表現することや相手の話を聞くことが自然にできる環境をさらに整えていきたい。そして、多様な意見を尊重しながら、折り合いをつけようとする経験を積み重ねる中で自分の思いを大切にしつつ、仲間と協力し合って生活を楽しむ姿を育んでいきたい。

〈主な参考文献〉

- 文部科学省 2018 『幼保連携型認定こども園教育・保育要領 解説』 フレーベル館
- 那覇市 2025 『那覇市こども計画 こどもまんなか社会の実現に向けて 2025(令和7)年4月～2030(令和12)年3月』
- 秋田喜代美 2017 『保育の心意気』 ひかりのくに株式会社
- 岡上直子 2021 『ワクワク！ドキドキ！が生まれる環境構成 ～3,4,5 歳児の主体的・対話的で深い学び』 ひかりのくに株式会社

園児が体を十分に動かし遊びを充実させるための環境構成と援助の工夫 —様々な運動遊びを通して—

那覇市天久みらいこども園 保育教諭 屋比久 千南

I テーマ設定の理由

近年、幼児の運動能力の低下が問題視されており、運動遊びの重要性が再認識されている。幼児期は、運動能力の基礎が形成される重要な時期であり、遊びを通して様々な動きを経験することが大切である。しかし、現代社会では、外遊びの減少やスクリーンタイムの増加など、運動不足になりがちな状況も指摘されている。

文部科学省「幼児期運動指針」（平成24年3月）によれば「主体的に体を動かす遊びを中心とした身体活動を、幼児の生活全体の中に確保していくことは大きな課題である。」と示されている。また、幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説では、領域「健康」において、「園児の興味や能力などに応じた遊びの中で、自分から十分に体を動かす心地よさを味わうことができるようにすることが大切である。」と示されている。保育教諭は園児の興味・関心に沿った活動の充実や環境構成の工夫が重要である。個に応じた声かけや援助を行うことで、園児が自分の体を十分に動かし、進んで体を動かそうとする意欲を育てることも大切と考える。

本学級は、5歳児（5年保育）計19名のほとんどが進級児である。また、新入園児（6名）も保育経験があり園生活に慣れるのも早かった。本園は在籍期間が長い子が多く、友達とイメージを共有して遊びを進めたり、戸外遊びでは思い切り体を動かしたりと楽しむ姿が多く見られる。一方で、室内遊びを好み、体を動かして遊ぶことに消極的な園児や、熱中症対策にともない戸外遊びの時間短縮などの課題も見えてきた。場や時間の確保をしながら、園児が体を動かす遊びを中心とした身体活動を園生活の中で保障する必要性を感じる。このように学級の実態を読み取る中で、園生活において多様な動きが経験できる様々な遊びを取り入れ、運動遊びを展開していくことが必要と考える。そこで本研究では様々な運動遊びを軸に、園児が体を十分に動かし遊びを充実させるための環境構成と援助の工夫について研究したいと考え本テーマを設定した。

II 課題に対する具体的な手立て

1 園児が体を十分に動かすための環境構成の工夫

色々な経験を通して園児自らが、主体的に遊びを展開していくことは大切であると考え。保育教諭との関わりを通して「もっと動きたい」「体を動かすって楽しい」と、園児の興味・関心に即したものになるよう環境の構成を行っていく。

2 運動遊びにおいて体を十分に動かし遊びを充実させていくための保育教諭の援助の工夫

保育教諭の援助として最も大切なのは、園児がどのような遊びに興味・関心を持っているのか、そして、そこにどのような面白さを感じているのかを見極めることである。しかし、体を使った遊びにおいては興味・関心のある環境の工夫を整えるだけでは遊びが豊かに展開するわけではないと考える。保育教諭がモデルになって一緒に楽しむこと、園児一人一人に合わせた具体的な声かけ、園児の気持ちや方向に合った援助を進めていく等を大切にしていく。

3 多様な動きが経験できる運動遊びを取り入れる工夫

様々な遊びの中で、多様な動きに親しむことは、幼児期に必要な基本的な動きを身に付ける上で大切である。鬼遊びでは走るだけでなく、止まったりよけたり、跳ぶ動作をすることもあり、また、製作活動では転がしたり飛ばしたり、友達と一緒に運んだりという動作をすることもある。園児が興味や関心を持って繰り返し広げていく遊びや活動を通して、多様な動きを積極的に遊びの中に取り入れていく。

Ⅲ 課題解決に向けた取組 (実践)

◆実践事例「なわとび学校楽しいね！」

《園児の実態》(4月～6月)



- ・5歳児のほとんどが進級児であり、友達とイメージを共有して遊ぶことができる。4月から楽しんでいる紙飛行機作りでは紙飛行機を投げる、走って取りに行くなど、体を動かす体験を重ねることで、学級みんなで体を動かすことの喜びを感じている。その中でもA児は紙飛行機遊びにとても関心があり、友達と一緒によく飛ぶ折り方など調べ、リーダーとなって遊びを進めていく姿が見られる。また、様々な遊びの中でA児は中心となる事が多く、周りの友達からも一目置かれる存在である。
- ・6月頃より数人の園児がなわとびに興味を持ち、テラスや遊戯室で友達と一緒に楽しむ姿が見られるが、A児は体を動かすことには興味を示すことがなかった。周りの友達が跳んでいても「跳べないから」とブロックや製作など遊びを転々とする姿が見られ、友達が楽しそうに体を使って遊んでいる姿にも関心がない様子だった。

《保育教諭の願い》

- A児も学級全体の遊びの中で体を動かすことに興味を持って欲しい。また、A児だけでなく遊びを展開していく中で、一人一人が様々な運動遊びの楽しさを味わって欲しい。
- なわとびを通して、跳ぶ・走る・回すなど様々な多様な動きを経験してほしい。

《○環境構成◇援助の工夫》

- 上手になわとびが跳べるようになった子から「みんなに見せたい」という声があがり、お披露目を子ども達と計画し実施した。
- ◇A児もなわとびを跳ぶ友達を見ている姿があり、本当は挑戦したい気持ちもありながら友達に跳べない所を見せたくないという心情があるのだろうと思い、タイミングを見てなわとびに誘ったり見守ったりした。
- ◇お披露目会では、披露した園児の自信に繋げていけるよう、具体的に良かったところをみんなの前で褒めていった。また、その姿を見て「すごい！やってみよう！」等、園児が跳びたいという気持ちが波及していった。

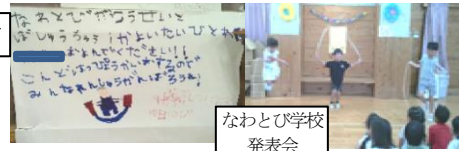
《園児の変容》《○環境構成◇援助の工夫》(9月～10月)

- ・お披露目会がある事を知り、A児もなわとびを手取る姿が見られ、跳べるようになるまで繰り返し取り組んでいる姿が見られた。すぐに跳べる回数が増え、本児も驚いている様子であった。自信がついたのか嬉しさが表情に表れていた。
- ◇A児がなわとびを手を取った瞬間を見逃さず、挑戦してみようと思った気持ちやすぐに跳べるようになった事場面を具体的に認めていった。また、周りの友達にも本児の頑張る姿を知らせていった。
- ・A児は跳べるようになったことで、お披露目会に意欲的に参加し達成感を味わっていった。その達成感が自信へと繋がり、遊びの中でA児が中心となって「なわとび学校」ごっこを展開していく姿も見られた。

○跳べる技を自分たちで考えたり、跳べた回数を競い合う姿が見られたので、メモを掲示し自由に記入できるような環境を整えた。

- ・子ども達自身からなわとび学校の生徒ポスターを作成したり、A児が先生役になって友達になわとびを教えたりしていくことで、自然と学級全員が楽しみながらなわとびに取り組むようになり、「なわとび学校の発表会」を学級全員で行うことができた。

生徒募集のポスター



◇保育教諭も一緒になわとび学校に参加し、体を動かす楽しさに共感し、自分たちで遊びを進めていく団結力を沢山褒めていった。また、全員が挑戦するようになった事やみんなの前で一人一人の頑張りを認め合う場を設け、充実感や達成感を感じられるようにした。

- ・発表後も達成感から学級全員が様々な運動遊びに主体的に取り組むようになった。「先生、跳び箱しよう」「今日は逆上がり練習したい」など目標を立てて一人一人楽しみながら行っている。
- ・運動遊びに苦手意識がある子に対して、A児「僕も最初は自信がなかったけど、沢山練習してできるようになると楽しくなったよ。」と励ます姿も見られるようになった。

《考察》

- *学級の実態を丁寧に読み取り、興味・関心を捉えた環境構成や援助を行ったことで遊びの内容が充実し、運動遊びへの意欲が高まったと考える。
- *頑張る姿を褒める際に、園児自身がどこを褒めてほしいのかを察知し、遊びの過程にも焦点をあてて話をするように心掛けたことで、自ら体を動かして遊ぼうとする意欲に繋がったと考える。

IV 実践の振り返り

1 成果

- (1) 園児が活動に興味・関心を持ち、自ら心を動かし活動意欲を満足させるように体験を積み重ねることで、学級全体が運動遊びに意欲的になり、目標に向かって取り組む姿が見られるようになった。
- (2) 園生活の中で様々な活動に意欲的に取り組み、友達同士で教え合う姿が見られるようになった。

2 課題

- (1) 研究テーマを5歳児担任に共有したことで、運動遊びや環境構成の在り方について日常的に協議するようになり、今後も振り返り等大切にしながら保育を展開していきたい。
- (2) 様々な保育教諭の視点で運動遊びに取り組むことで、学年全体が運動遊びに意欲的になり子ども達の姿も活気づいていった。今回の研究で学んだことを同学年だけでなく、園内研修などの機会を活用し他学年の職員と共有することで、園全体でも運動遊びについて深めていく。

V 今後の実践に向けて

実践を振り返ると、研究テーマを念頭に置いて子どもの姿や学級の実態を観察し分析することで、改めて「子どもが何を楽しんでいるのか」という視点で保育を行う面白さを実感することができた。今後も本研究で培ったことを大切にしながら、目には見えない子どもの心情を探り保育を豊かにしていきたい。

〈主な参考文献〉

- 文部科学省 ■平成24年 ■『幼児期運動指針』
- 内閣府・文部科学省・厚生労働省 ■平成30年 ■『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』 ■フレーベル館
- 河邊貴子・柴崎正行・杉原隆 ■平成21年 ■『保育内容「健康」』 ■ミネルヴァ書房
- 柴崎正行・若月芳浩 ■平成21年 ■『保育内容「環境」』 ■ミネルヴァ書房

「友達や保育者との関わりの中で、一人一人の良さを認め合う援助の工夫」

—集団遊びや地域の行事参加を通して—

那覇市 久場川みらいこども園 保育教諭 吉澤 真由美

I テーマ設定の理由

中央教育審議会では、『人間関係形成・社会形成能力』は、多様な他者の考えや立場を理解し、相手の意見を聴いて自分の考えを正確に伝えることができるとともに、自分の置かれている状況を受け止め、役割を果たしつつ他者と協力・協働して社会に参画し、今後の社会を積極的に形成することができる力である。この能力は、社会との関わりの中で生活し仕事をしていく上で、基礎となる能力である。特に、価値の多様化が進む現代社会においては、性別、年齢、個性、価値観等の多様な人材が活躍しており、様々な他者を認めつつ協働していく力が必要である。」と示している。

また、幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説（以下教育・保育要領解説）では、人との関わりに関する領域「人間関係」の中で、「一人一人を生かした集団を形成しながら人と関わる力を育てていくようにすること」その際、「集団の生活の中で園児が自己を発揮し、保育教諭等や他の園児に認められる体験をし、自分のよさや特徴に気付き、自信をもって行動できるようにすること」と示されている。これらのことから集団遊びや地域行事等の参加を通して園児が様々な他者と自分の違いに気付き、色々な考えがあることを知る必要があると考える。

本学級は、4歳児（5年保育）16名、5歳児1名である。実態としては、自ら好きな遊びを見つけて、気の合う友達を誘い、興味のある遊びを楽しむ姿が見られるが、自分の思いを通そうとしたり、逆に自分の思いを我慢して伝えられなかったり、相手の特性に戸惑い、関わる相手を選びながら遊ぶ姿がある。また、自身の保育を振り返ると、園児個々の発言には注目し、一緒に振り返りをしたり、確認をしたりする場をもつ援助等を行っていたが、互いの考えを認め合いながら生活や遊びを進める援助や環境構成が十分ではなかった。

園児が自分と友達の違いに気付き、良いところもそうでないところも受け入れられるようになってほしい、また、遊びや地域との関わりの中での様々な経験を通して、自分や友達の「良さ」を知り、遊びや生活の中でお互いの存在を受け入れ合い、うまくいかないことや失敗も自然に認め合える関係ができるようになってほしいと願い、本テーマを設定した。

II 課題に対する具体的な手立て

1. 保育教諭も園児達と一緒に遊び、生活する中で、実態把握を行う。
2. 日々の活動の後に振り返りの場を設け、園児の思いを受け止め、他児へ共有し、お互いの存在を認め合えるよう援助する。
3. 伝承遊びやうちな一ぐち遊び、集団遊びを取り入れる。

III 課題解決に向けた取組 （実践）

【実践事例1】負けたら悔しいよね

〈園児の姿〉

好きな遊びを通して、気の合う友達と関わって遊ぶ園児がほとんどである。自分の思いを通すあまり遊びが中断してしまったり、自分の思いが伝えられずに遊びに入れなかったり、中には手が出てしまう園児もいる。また、特定の友達とだけ遊ぼうとし、他児とトラブルになることがある。最初は保育教諭の真似をして行っていた伝承遊びを「じゃんけんれっしゃ」「あぶくたった」「なべなべそこぬけ」等の集団遊びに変えていく中で、友達と一緒に遊ぶ楽しさを感じ始めている。

〈保育教諭の願い〉

- ・遊びを通して勝って嬉しい、負けて悔しい等の自分と同じ気持ちや違う気持ちに友達もなることを知り、相手の思いに少しずつ共感できるようになってほしい。
- ・遊びに入れない子は集団遊びを通して仲間と遊ぶ楽しさを味わってほしい。

〈保育教諭の関わりや援助〉

- ・子ども達一人一人の気持ちに寄り添い、必要に応じて思いを代弁し、悔しい気持ちがあるから次がんばれると伝えたり、諦めないでまた挑戦したら次勝てるかもしれないということを繰り返し全体に知らせるようにした。
- ・負けて泣いている友達に水筒を持ってきた園児を集まりの場で、「友達の悔しい気持ちに気づいているね。すごいことだよ」と紹介し、次、勝つためにはどうしたらいいか子ども達と一緒に考える場をもち、子どもから出たアイデアを全体に知らせた。また、上手くいかなかった時も園児達と一緒に考えるようにした。
- ・友達が優しくしてくれたことや苦手なことを頑張っている姿に気づき発表する園児も出てくるようになっていた。「ありがとうの花」の歌を歌う機会を設け、ホワイトボードに優しくしてくれた園児や気付いた園児の名前を記入し、子ども達と一緒に共有するようにした。

じゃんけんれっしゃ（4月）



こんどのあいてはきみだ！

あぶくだった（5月）



おふろにはいってごしごし

なべなべそこぬけ（6月）



そこがぬけたらかえりましょ

〈幼児の変容〉

- ・集団で遊ぶ楽しさを感じ、最後まで遊びを楽しむ姿が見られている。
- ・困っている子に優しく声をかけたり、水筒をもってきたり、相手の気持ちに寄り添う姿が見られた。
- ・集団遊びを通して、仲間と遊ぶ楽しさを感じ、気の合う友達と意欲的に遊ぶ姿が見られている。
- ・集まりの場で、「〇〇がテーブルを一緒に運んでくれた」と発表し、友達の良い所に気づいて紹介する園児が少しずつ増えてきている。
- ・「今は〇〇と遊びたいから後で遊ぼう」や「おやつと一緒に座ろう」など言葉でのやりとりが増え、様々な友達との関わりも少しずつ見られるようになってきている。

〈考察〉

- ・繰り返し遊ぶ中で、みんなで集団遊びの楽しさを味わい、友達と一緒にまた遊びたい気持ちや

思いが伝わり、優しく関わる姿が見られたのではないだろうか。

- 日々の遊びの中で様々な気持ちを味わった体験や保育教諭が提案した具体的な解決方法が子ども達なりに身につき、生活や遊びを自分達で進めようとする姿に繋がってきているのではないだろうか。
- 友達と一緒に遊びや生活する中で、相手の良いところや苦手なこと、自分とは違う相手の気持ちがあることが少しずつわかり、受け入れることができつつあるように思う。引き続き、個々の実態に合わせて、友達同士の関わりが深まるよう援助や声かけ等を工夫していく。

【実践事例2】エイサーやってみよう！

〈幼児の実態〉

お盆で見たエイサーに「旗頭もいたよ」「しましまの靴下はいていたよ」と目を輝かせ、興奮しながら知らせる姿があった。そこで、パーランクーとエイサーの衣装を用意すると、興味をもち、音楽に合わせて、友達と一緒に体を動かすことを楽しんでいった。ちょうど運動会の演目について話し合う機会があり、子ども達からすぐに「エイサーやってみよう」と声が上がった。運動会の演目となった。子どもが見た役に合わせた衣装や小道具も準備すると、その中で、踊り子の衣装を選んだ男児や大太鼓を選んだ女児に違和感をもっている園児もいた。

〈保育教諭の願い〉

一人一人が自分の好きなエイサーの役になりきって、運動会で披露することで友達と一緒に自己表現する楽しさを味わい、それぞれの良さを認め合い、自信をつける場になって欲しい。

〈保育教諭の関わりや援助〉

- 子ども達が見たエイサーを再現できるよう旗頭、パーランクー、大太鼓、四竹等、役に合わせた衣装を用意した。
- エイサーの映像を見せる場を設け、幼児がイメージをもてるようにした。
- 幼児の運動会練習の動画を撮り、自分や友達の姿を振り返りする場をもった。
- 一人一人の好きなものに触れ、それらを肯定的に受け入れ、その人が好きなものは好きで良いということをいろいろな機会に子ども達にポジティブに伝える場をもった。
- 3, 4歳児クラスをオープンにして、一緒に遊ぶ時間を設け、自然と異年齢交流ができるようにした。



〈幼児の変容〉

- 一人一人の好きなものを子ども達が受け止め、それぞれの配役チームの一員として、仲間意識も芽生え、一緒に踊ったり、時には助け合ったりしながら、運動会後もエイサーを楽しんでいた。
- 数回見た動画の振り返りから、自分の姿ではなく友達の良い姿を言葉で知らせる姿が見られた。
- 問題が起きた時も自分達で話し合い、じゃんけんやにらめっこ等、色々な方法で折り合いをつけるよ

うになりつつある。

- ・友達の競技中、名前を呼んで応援したり、遊びのルールを教えたりする姿が見られている。
- ・遊びや生活の中で、相手の良いところを認め、関わる姿がたくさん見られている。

〈考察〉

- ・園児が経験したこと、興味をもっている活動を運動会で披露するようにしたことで、伸び伸びと自分のやりたい配役になりきってエイサーを披露し、たくさんの拍手から自信をつける場になった。また日々の練習から友達のありのままの姿を受け止められるようになりつつある。

IV 実践の振り返り

〈成果〉

- ・様々な体験や経験の中で、色々な人と関わり、園児自らが様々な感情を感じる中で、友達や身近な人との接し方等を学んでいる過程であるということがわかった。
- ・特定の友達も一緒に色々な子を誘い遊んだり、生活を進めたりする姿が見られている。
- ・遊びや生活の中で自分の気持ちを言葉で、伝えられるようになっている。
- ・友達の良いところに気付き、言葉で保育者や友達に知らせる園児もいる。
- ・特定の先生から気の合う友達へ遊びや生活の輪が広がっている園児もいる。

V 今後の実践に向けて

今後も集団遊びや地域の行事に参加する経験を通して園児のもつ自身の気持ちを大切にすると共に、他者に対しての自分とは違う相手の気持ちを知り、どう受け止めていくのかを知らせる場を引き続き設けていく。また園児の身近にいる大人の存在が子ども達に与える影響は大きい為、大人の姿をよく見ているということ、人格形成の基盤である気持ちや感情にも影響を与えてしまうことに責務をもって、保育者自らが園児のお手本として誠実に行動していく。

〈主な参考文献〉

- 内閣府 文部科学省 厚生労働省 2018年 【幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説】 フレーベル館
酒井幸子 中野圭子 2023年 【みんなにやさしいインクルーシブ保育】 ナツメ社
内閣府 文部科学省 厚生労働省 2022年 【園児が心を寄せる環境の構成】 フレーベル館

園児の主体性を育む環境構成と援助の工夫

-園児の姿を踏まえ、遊びを継続させる環境の再構成-

那覇市立小緑南こども園 保育教諭 新垣 真理子

I テーマ設定の理由

『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』においては、「園児が生活を通して身近なあらゆる環境からの刺激を受け止め、自分から興味を持って環境に主体的に関わりながら、様々な活動を展開し、充実感や満足感を味わうという体験を重ねていくことが重視されなければならない」と示されている。また、園児の姿や遊びの過程を踏まえ、園児の興味や活動の広がりに応じて環境を見直し、再構成していくことの重要性が示されている。園児が自ら興味を持ち、主体的に環境と関わりながら遊びを深めていく経験は、その後の学びや生きる力の基盤となる重要なものである。そのためには、園児の興味・関心や季節に応じた環境構成と、保育教諭の援助の在り方が大切であると考えられる。

本学級の5歳児（2年保育）18名は、友達を誘い合って好きな遊びに取り組む姿が見られる一方で、遊びを十分に展開する前に他の活動へと移ってしまい、継続して遊び込む姿が少ないという実態がある。私自身、これまで園児の気づきや発見を大切にしながら関わってきたが、保育を振り返る中で、園児が、「もっとやってみよう」と感じられるような意図的・計画的な環境構成や援助の工夫が十分ではなかったと感じている。そこで、園児の興味や関心、一人一人の実態を踏まえた遊びや活動を通して、園児が主体的に活動へ関わり、夢中になって遊び込むことができる環境構成と保育教諭の援助が重要だと考え、本研究テーマを設定した。

II 課題に対する具体的な手立て

1 園児の興味・関心を捉えた環境構成の工夫

園児の日常のつぶやきや行動、友達とのやりとりの姿を丁寧に捉え、園児の「やってみよう」「気になる」といった思いが遊びとして表出しやすいよう、環境構成を工夫する。園児の関心が高まっている題材に関連する素材や用具を複数用意し、園児が自分で選び使い方を考えながら関わられるよう配置する。また、活動内容を一斉に提示するのではなく、コーナー化することで、園児一人一人が自分のペースで遊びに向かえる環境を整える。

2 主体性を引き出す保育教諭の援助の工夫

保育教諭は、園児のつぶやきや発言を丁寧に受け止め、その思いや考えを言葉にして返す関わりを大切にする。すぐに答えや方法を示すのではなく、「どうしたいと思っているの?」「〇〇って考えたんだね」と園児の思考を整理するような声掛けを行い、自分の考えを安心して表現できる雰囲気づくりを心掛ける。

3 遊びを継続・発展させる環境の再構成

その日の活動や遊びの様子を振り返り、園児の発言や姿をもとに、翌日の環境を再構成する。園児が取り組んだ作品や遊びの途中の状態を残したり、活動の絵や月刊誌など掲示を通して「続きがしたい」「もっと工夫したい」という思いが次の日につながるようにする。また、園児同士で遊びの面白さや工夫した点を共有する時間を設けることで、遊びへの見通しをもち、主体的に関わり続ける姿を引き出す。

III 課題解決に向けた取組（実践）

1 実践事例 宇宙ランド作り

《園児の実態》

1学期後半頃から、園児たちは友達と誘い合いながら遊びを始め、「こうしようよ」「こっこのほうがいいんじゃない?」と意見を出し合う姿が増えてきた。一方で、興味をもって活動に取り組んでも、十分に遊び込む前に他の活動へ移ってしまい、継続して取り組む姿は少なかった。

ある日、絵本コーナーに置いていた月刊誌（宇宙特集）を手にした園児たちが「土星って黒いんだ」「太陽ってこんなに大きいんだ」「地球って小さい」などと、友達同士で夢中になって会話を始めた。

《保育教諭の援助》

園児が月刊誌をきっかけに宇宙への興味を深め、友達と夢中になって会話を始めた様子を受け、この関心を翌日以降の遊びへとつなげていきたいと考えた。そこで、まずは園児の「やってみたい」という思いを共有し合える場として、クラスで相談タイムを設けた。

保育教諭：「さっき“宇宙つくってみたい”って声があったけど、どんな宇宙にしたい？」

園児：「大きい地球つくりたい！」

園児：「宇宙人もほしい！」

保育教諭：「なるほど。どうやって作る？材料は何が使えるのかな？」

園児：「新聞紙丸めたら星になりそう」

園児：「風船でもできるよ！」

保育教諭：「風船で張り子にすると丸い星が作れそうだね。やってみる？」

園児全体：「やりたいー！！」

《保育教諭の願い》



・園児の「宇宙を作ってみたい」という思いを受け止め、風船や新聞紙などの素材を使いながら、張り子の方法で星や地球を作るなど、イメージを友達と共有し、試行錯誤しながら遊びを広げて欲しい。

《園児の遊びから捉えた環境の再構成と援助の工夫》

園児同士のアイデアが行き交い、遊びが広がっていく様子を受け、月刊誌や惑星の写真、園児が描いた宇宙の絵を掲示して興味を可視化するとともに、新聞紙や風船、のり、絵の具などの素材を手に取りやすい位置に配置し、思い立ったときにすぐ製作に取りかかれる環境を整えた。また、「どうやって作る？」「どこに飾る？」など、園児自身の考えを引き出す言葉がけを意識した。以前に映画館ごっこで黒のカラービニール袋を使って空間を構成した経験を園児が思い出し、「宇宙ランドも暗くしたら宇宙みたいになるんじゃない？」と話し合いながら、考える姿が見られた。



宇宙ランド完成

そこで教室の一部を「宇宙ランド」として構成し、園児が製作した作品を取り入れ、パーテーションを用いて空間を区切り、黒のビニールを壁面に張ることで背景を暗くし、惑星や星がより映える環境を整えた。こうした工夫により、園児が「宇宙に来たみたい」と想像しながら宇宙ランド遊びを楽しんだ。このような環境の再構成により、製作遊びは次第にごっこ遊びへと発展していった。

《園児の変容》

これまでなかなか活動が続きなかった園児も、「昨日のつづきしよう」「今日はどの星をつくらうかな」と、自分から遊びを思い出し、関わろうとする姿が増えていった。また、「宇宙ランドのチケットを作りたい」と遊びの内容を広げる声も聞かれるようになった。チケット作りの場面では、「大人はいくらがいいかな」「子どもは無料かな」など、友達同士で相談しながら考える姿が見られた。さらに、「子どもには、チケットと一緒にモモタマノの実をプレゼントしよう」と身近な素材を生かしてルールを決め、考えを共有し合いながら遊びを進める様子が見られ、遊びに必要な約束事を自分たちで考えようとする姿へと変容していった。物づくりに苦手意識のあったA児は、友達と話し合いながら製作に取り組み、イメージを膨らませながら活動する姿が見られた。文字に興味のあるB児は、看板作りを通して文字を書くことを楽しみ、自分なりの役割をもって遊びに関わる姿が見られた。また、C児は宇宙人になりきって友達を誘い、「ワレワレハ、ウチュウ人です・・・」と宇宙人をイメージし会話を楽しむ姿が見られた。



いらっしゃいませ。こちらへ並んでください。

緑の大きい、ももたまの木の
実ください。



どうぞ。これが一番大きいももたまの木の
実ですよ。

《考察》

帰りの会でその日に楽しかった「宇宙ランド」での遊びについて園児同士が発表し合い、体験を共有する場を設けたことで、「明日もやりたい」「続きが楽しみ」といった期待をもって翌日を迎える姿が見られた。友達と相談しやすい場や振り返りの機会を整えることで、遊びは一日で終わることなく、自然と翌日へとつながっていった。また、保育教諭が答えを示すのではなく、園児の考えを引き出す関わりを意識したことで、園児同士の対話が生まれ、協同的な遊びへと発展していった。園児が意欲的に遊び込めるよう、園児の姿を丁寧に読み取りながら、環境や援助を見直していくことが、園児の主体的な遊びを育てる上で重要であると考えられる。

IV 実践の振り返り

1 成果

園児の「やってみたい」「こうしたい」という思いを丁寧に受け止め、興味や関心に応じて環境構成や援助を工夫したことで、登園後すぐに遊びに再開したり、友達と協力しながら継続的に遊びに関わる姿が見られるようになった。また、看板作りなどを通して自ら役割を見つけ、主体的に遊びに参加する姿へとつながった。

2 課題

園児一人一人の興味や関心に対応しきれなかった場面もあり、遊びへの参加に差が見られた。今後は、園児同士の考えや気づきを共有する時間を意識的に設け、より多くの園児が主体的に関われる環境と援助の工夫が必要である。

V 今後の実践に向けて

本実践を通して、園児の主体性を育むためには、園児の興味や関心を丁寧に捉え、その時々に応じて環境を見直し、再構成していくことの重要性を改めて実感した。今後は、園児のつぶやきや行動を記録し、次の環境構成や援助につなげていきたい。また、園児が遊びを思い出しながら活動できるよう、作品の掲示方法や活動の振り返りの場の工夫など、遊びの継続性を支える環境づくりをより一層充実させていく必要がある。園児同士が考えを伝え合い、協力しながら遊びを深めていけるよう、保育教諭は答えを急がず、園児の思考を支える言葉がけを心がけていきたい。

これからも、園児の主体的な遊びの姿を大切にしながら、環境構成と援助の在り方を振り返り、改善を重ねていくことで、園児が充実感や満足感を味わいながら活動に取り組める保育の実現を目指していきたい。

《主な参考文献》

内閣府・文部科学省・厚生労働省（2021）『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』フレーベル館

大豆生田啓友（2023）『子ども主体の保育をつくる56の言葉』学研プラス

内閣府・文部科学省・厚生労働省（2022）『園児が心を寄せる環境の構成』フレーベル館

発見を楽しんだり、考えたりする子を育む —身近な環境に触れ、遊びに取り入れるための環境構成と援助の工夫—

那覇市天妃こども園 保育教諭 糸数 菜津美

I テーマ設定の理由

幼保連携認定こども園教育保育要領では、領域「環境」のねらいに、(2)「身近な環境に自分から関わり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする」と記されている。また、内容の取扱い(2)「幼児期において自然の持つ意味は大きく～(中略)～園児が自然との関わりを深めることができるように工夫すること」とされ、園児と自然との出会いを意図的に展開していくことが重要であると考えられる。

本学級は4歳児(3年保育)25名が在籍しており、全員が集団保育の経験がある。それぞれが好きな遊びを見つけ、一人でじっくり取り組んだり、保育教諭や友達と一緒に楽しんだりしている。本園は、園庭整備中のため戸外遊びの環境が限られており、自然に触れる機会が少ない。そのような中でも、小さな裏庭ではプランターの草花や小さな生き物に触れて楽しむ姿があり、興味の高さを感じる。遊ぶ環境に制限がある中でも、身近な自然や素材に触れ、その感触を五感で味わいながら遊びに取り入れ、発見を楽しんだり考えたりする子を育むための環境構成や援助の仕方を工夫していきたいと思い、本テーマを設定した。

II 課題に対する具体的な手立て

- 1 園児の発達段階や、現在の興味関心を理解する。また、一人一人の興味関心の違いにも配慮する。
- 2 園児の様子から遊びの広がりや予想し、発見したり考えたりすることを楽しめるよう環境構成や援助の工夫について考える。
- 3 実践を省察し、環境構成や援助を見直し、保育教諭の関わり的重要性への理解を深める。

III 課題解決に向けた取組 (実践)

〈実践事例1〉 身近な花を使った「色水遊び」の取り組み(6～7月)

裏庭では、進級児を中心に、ビニール袋を使っての色水作りを楽しんでいた。園児が夢中になって楽しんでいる色水作りを通して、発見したり考えたりすることを楽しめるよう環境構成と援助の工夫を行った。

(.....は、発見したり考えたりしている姿)

(A児の実態)

裏庭に出るとジョウロを使って草花への水やりを楽しんでいる。友達が色水を作っている姿を見て興味を持ち、保育教諭に「ビニール下さい」と言って袋をもらい、同じように水と花を入れて色水を作ろうとした。しかし、なかなか色が変わらずにビニール袋を投げ捨ててしまう姿があった。



(保育教諭の読み取り)

- ・水や草花への興味関心が高いようだ。
- ・遊びに必要な物を理解しているが、やり方がわかっていないのではないかと。
- ・袋の外から指で花をすりつぶすことが難しいのではないかと。
- ・自分の思っていた結果にならず、遊びが中断してしまったのだろう。

(○環境構成と●援助の工夫)

- すりつぶすことに気付けるように、袋ではなくコップを準備する。
- じっくり取り組めるように環境を設定する。(机、いす、シート)
- まずは保育教諭と一緒に楽しめるように誘ってみる。
- 友達も同じ場で遊ぶことで、関わりを仲立ちしていく。

(保育教諭の願い) 興味を持った遊びを楽しめるようにしてあげたい！
「すりつぶす」という感触が味わえるようにしたい！



(A児の変容)

- ・指で花をすりつぶしたことですぐに水に色が付き、「できた！」と成功を喜ぶ姿が見られた。
- ・「お花きれいだね」「お水気持ちいい」など、感じたことを保育教諭に伝える姿があった。
- ・一度作り方がわかると、「もっとやりたい」と次々に花を入れて繰り返し楽しむようになった。

(1か月後・・・)

(A児の実態)

- ・ビニール袋を使った色水遊びを楽しむ姿が見られるようになった。花だけでなく、葉や土などを使って色水を作ることを楽しんでいる
- ・友達が道具を使って色水を作る姿を見て同じようにやってみるが、色があまくつかずに悩む姿があった。
- ・裏庭から室内に戻る時に、「もっとやりたかった」と言う姿があった。

(保育教諭の読み取り)

- ・花をすりつぶすことで水が色づく楽しさや、水に触れる心地よさを繰り返し楽しんでいる
- ・花や葉、土などの自然物との触れ合いを楽しんでいる。
- ・道具に興味はあるが、使い方がよくわかっていないのではないかな。
- ・「もっとやりたかった」という言葉に、色水遊びに対する意欲と探求心の高まりを感じる。

(○環境構成と●援助の工夫)

- 遊びの続きを楽しめるよう、遊戯室にブルーシートを敷き、水汲み用のバケツ、大判雑巾数枚、テーブル、色水遊びの道具、素材(花、葉、ツルなど)を十分な量を用意する。
- 友達が道具を使う様子を近くで見ると、道具の使い方に一緒に気付きながら、色水作りを楽しむ。
- 遊ぶ様子を見守りながら、必要に応じて友達とのやりとりや、道具の貸し借りの仲介をする。

(保育教諭の願い)

「もっとやりたい」を実現させてあげたい！



(園児の変容)

- ・道具の使い方がわかり、友達から必要な道具を借りようとするなどの関わりが見られた。
- ・「どうなっているのだろう」と、じっくり素材や道具と向き合う姿が見られた。
- ・「コップから葉っぱの匂いがする」と保育教諭に教える姿があった。
- ・色の違いに気づき、友達と見せ合ったり、色水を混ぜ合わせてみたりする姿があった。
- ・「楽しかったからまたやりたい」と満足そうに伝える姿があった。

(評価と改善)

A児の発達に応じて色水の作り方を工夫し、保育教諭と一緒に成功体験をしたことで、「楽しい」という気持ちを味わうことができ、「もっとやりたい」という思いに繋がったと考える。遊戯室での色水遊びでは、道具の使い方を考えたり、友達とやりとりをしたりする姿が見られた。また、花だけでなく、葉やツルを用意したことで、「どうなっているのだろう」「どんな匂いだろう」などと考えながら遊ぶ姿が見られ、身近な自然への好奇心が育まれただろう。色水を混ぜ合わせることで色が変わること気付く姿があり、色への興味の高まりを感じた。子ども達の探求心を次の活動へと繋げる方法を考えていく。

〈実践事例2〉 涼を感じるアイス・パーティ(8月)

ある日、『ばばばあちゃんのアイス・パーティ』という、氷が出てくる絵本の読み聞かせをした時に、園児から「やってみたい」という声があがり、みんなでアイスパーティをするための準備が始まった。「どうやって氷を作ろうか？」と相談し、自分達で考えて作った氷を使ってのアイスパーティを楽しんだ。

(クラスの実態)

- ・どうやって氷を作るかという問い掛けに、「水を冷凍庫に入れる」「ジュースがいい」などの意見が出た。
- ・これまで絵の具の色水、染め紙、水性ペンでのにじみ絵などを楽しんだ経験から、色や水に対する興味関心が深まっている。

(保育教諭の読み取り)

- ・氷が水からできていることを理解しているようだ。
- ・「ジュース」というイメージが共有できているので、色水をジュースに見立てて氷にしたらどうだろう。

(○環境構成と●援助の工夫)

- 色がきれいにしやすい水性ペンを教材に選び、園児と一緒に美味しそうな「色水ジュース」を作って凍らせた氷を用意する。
- 3原色の氷も多数用意しておく。
- テーブルにビニールを敷くことで水をはじきやすいようにしておく。
- 園児の気付いたこと、発見したことなどに共感していく。
- 一人一人が何に興味を持ち、何を楽しんでいるのかを読み取りながら遊びを見守っていく。



(保育教諭の願い) 子ども達の思いを叶えてあげたい！
色への関心をさらに深めていきたい！

(園児の変容)

- ・「冷たい」「固い」「溶けてきた」「ずっと持っている痛い」など、氷の感触や特性を言葉にして伝える姿があった。
- ・バットの中やテーブルの上で氷が溶けていく様子を見ながら、混ぜてできた色に気づき、「青と黄色で緑になった！」と発見する姿があった。
- ・「葉っぱいれてみたい」と言って、花や葉を混ぜる姿があった。

(評価と改善)

園児の興味関心と経験を繋げるために「色水」と「氷」を遊びに取り入れたところ、これまでの経験を活かしながら新たな発見を楽しむ姿が見られただろう。「絵の具の色水でもできるんじゃない?」「次は葉っぱも入れたい」と言う園児がおり、更なる遊びの広がり、身近な環境を遊びに取り入れようとする姿が育まれていると考える。園児の声を受けとめ、さらに遊びを発展していくための環境構成と援助を工夫していく。

IV 実践の振り返り

1 成果

- ・意図的な環境構成が、園児が自分から身近な環境に関わり遊びに取り入れていく姿へと繋がった。
- ・園児の実態や興味関心を理解しながら、言葉かけや援助の工夫を行ったことで、様々な経験を活かしながら発見を楽しんだり、考えたりする姿へと繋がった。

2 課題

- ・保育教諭が園児の思いを受け止め、共に発見を楽しんだり考えたりすることが大切であることを理解しながら、さらに友達同士の関わりの中で遊びを深めていけるような環境構成と援助の工夫が必要である。

3 実践を通しての自身の考え・気づき

- ・園児の興味関心と、保育教諭の意図を組み合わせる遊びを展開していくことの大切さを改めて学んだ。

V 今後の実践に向けて

- ・友達と一緒に遊ぶ中で発見や思考を楽しめる環境構成や援助を工夫し、豊かな感性を育てていく。

〈主な参考文献〉

文京区立お茶の水大学こども園 2020年 『遊びを広げて学びにつなぐ 思いをつなぐ保育の環境構成 4・5歳児クラス編』 中央法規
内閣府・文部科学省・厚生労働省 2018年 『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』 フレーベル館

幼児理解を深め、主体的な活動へ繋がる環境の構成と援助の工夫

—製作遊びを通して—

那覇市 開南こども園 保育教諭 入里 史佳

I テーマ設定の理由

近年、デジタル化が進み、幼少期から動画投稿サイトやスマートフォンに触れる機会が増え、家庭内にデジタル機器が当たり前にある日常を過ごしている。利便性の向上と同時にデジタル機器のメリットを享受しつつも、身体的、精神的発達への影響、対人関係の発達への影響、生活リズムの乱れなどの課題があげられている。これらの課題を解決するためにも、こども園では、乳幼児期にふさわしい生活を展開する中で、自然の中での体験や同年代の園児との関わり、直接的な体験を通して人と関わる力や思考力、感性や表現する力などを育み、社会と関わりながら生きていくための基礎を培うことが大切である。

幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説の基本には「保育教諭等は園児が自ら安心して身近な環境に主体的に関わり、環境との関わり方や意味に気付き、これらを取り込もうとして、試行錯誤したり、考えたりするようになる幼児期における教育における見方・考え方を生かし、その活動が豊かに展開されるよう環境を整え、園児と共によりよい教育及び保育環境を創造するように努めるものとする」とある。また「安定した情緒の下で自己を十分に発揮することにより発達に必要な体験を得ていくものであること考慮して、園児の主体的な活動を促し、乳幼児期にふさわしい生活が展開されるようにすること」と示されている。保育教諭等は園児一人一人の行動の理解と予想に基づき、園児と人やものとの関わりが重要であることを踏まえ、教材を工夫し、物的・空間的環境を構成しなければならない。園児の実態を的確に把握し、それに即した適切な指導をしていくことが重要であると言える。

本学級は5歳児（2年保育）男児12名、女児10名、計22名（進級児13名、近隣の6園から8名、家庭保育1名）が在籍する。生活習慣や友達との関わり方に個人差が見られ、これまでの経験を生かした遊びを自ら楽しめる子や積極的に気の合う友達と好きな遊びを楽しむ姿も見られる。しかし、好きな遊びを見つけれず、傍観している子や遊びが継続せず、次々と遊びを変えていく子も見られる。また、好きな活動には喜んで参加するものの、集団での行動を苦手とする子もいるなど、一人一人の発達の違いが大きい。

そこで、園児一人一人が興味をもって環境に主体的に関わり、充実感や満足感を味わう体験が製作遊びを通して積み重ねていけるように、園児の理解を深めながら主体性と意欲を引き出すことへ繋がる保育環境の構成と援助の工夫を研究していきたいと考え、本テーマを設定した。

II 課題に対する具体的な手立て

1 造形表現の発達論に関する文献からこどもの発達段階を知り理解を深める

(1) 造形表現の発達の基礎

ピアジェの発達段階と乳幼児期の子どもの造形表現に見られる発達段階

年齢区分	発達段階説	ものでつくる時に見られる発達段階	表現遊びの姿のキーワード
0～2歳ころ	感覚運動的段階	探索する（つぶす・投げる等）	探索・身振り・指差し、見立て
2～4歳ころ	象徴的思考段階	見立てる、組み合わせる	構成遊び・平行遊び・ごっこ遊び
4～7歳ころ	直感的思考段階	形や色から発想してつくって遊ぶ	共通のイメージ・協同遊び

2～7歳ころには言語機能・運動機能ともに発達が著しく、物事を自分のイメージを使って区別して認識できるようになる時期。

2 造形表現指導における保育者の役割

① 間接的な援助	自発的な活動が生まれるように子ども達が能動的に動ける場や時間、手が届くところに選択可能な環境を用意しておく。もの・空間的環境による援助。
② 直接的な援助	子どもの思いに共感し、感情や行為、言葉で肯定的に返し、安心して表現してよい等の表現しやすい状況作り。なんでも話せ、仲間・憧れのモデル集団への参加を促す頼りになるリーダー、困った時に助けてくれる養護者。行動と言語による援助。

3 活動形態に応じた援助

活動形態	主導者	遊びの例	動機づけ	① 間接的な援助	② 直接的な援助
造形表現 遊びの中からの	子ども	作りなど 砂場のケーキ	主に内発的	空間 ：ねらいに沿って遊びのスペース作りの確保、作って遊ぶ環境づくりの工夫 もの ：自由に利用できる教材、用具の準備	行動 ：観察と読み取り、遊びへの参加 不必要な介入は避ける 言語 ：表現しやすく意欲のもてる言葉かけ、遊びの発展につながる情報ヒント、問いかけ
造形表現 設定型の	保育者	季節の製作など	主に外発的 <small>活動の過程において 内発的に移行</small>	空間 ：適切な指導計画による活動しやすい場の設定と発展的な活動が可能な場の確保 もの ：活動を引き出すような選択可能な材料・用具の設定。発展を想定したものの準備	行動 ：適切な活動提示、誘導、モデル 言語 ：自己決定、自己表現、意欲的な取り組みにつながる言葉かけ、造形的な表現力につながる情報提示、達成感が得られる肯定的な心情の表明 (共感する、感心する)

Ⅲ 課題解決に向けた取り組み（実践）

実践事例「作るって楽しいな」～七夕製作を通して～

《園児の姿》

6月に入り、保育教諭や友達と安定した関係を基盤に、様々な素材を使って絵本で見たロボットを真似て作ったり、作ったもので遊んだり、友達との関わりに広がりを感じる姿が見られるようになってきた。しかし、中には友達と遊びを傍で見ている子や設定した活動の方が安心して過ごせる子がおり、ブロックなどの単純に組み立てて作れるような遊びが多くなったり、空き箱に興味を示しても、作りたいイメージがもてず、テープで繋げるだけの遊びになってしまい、遊びが広がらなかつたりする姿も見られる。また、ハサミや、のりなどの用具の使い方に慣れずに製作遊びに消極的な子もいる。七夕集會が近づいてくると、短冊の願い事を親子で書いてきたり、点つなぎで星を描いて遊んだり七夕に関心をもって遊んでいる。

《保育教諭の願い》

- ・いろいろな遊びに興味をもち、面白さを感じて「もっとやりたい」「こうしてみたい」などの思いをもち、遊んでほしい。
- ・環境に意欲的に関わりながら、多様な素材に触れ、試したり工夫したり試行錯誤しながら作る楽しさを感じてほしい。
- ・集中力を保ちながら最後までやり遂げる体験をして達成感を味わってほしい。
- ・気付いたことを伝えたり、友達と作ったものを見て真似してみたりと自分とは違う表現に触れてほしい。

《環境構成と援助の工夫》

七夕製作でハサミやのりの使い方が分かり、切ったり、貼ったりしながら作る楽しさを感じられるようにし、一人一人の作るペースに応じた援助を考えながら、製作を進められるようにした。

① 間接的な援助	② 直接的な援助
空間 ：七夕祭りの写真や笹飾りの作り方と意味などが見やすい製作コーナー作り、作ったものを飾れるスペースを設ける。 もの ：七夕行事にちなんだ絵本や紙芝居・製作の材料（星の点つなぎ・折り紙・染紙・すずらんテープ・のり下敷・手拭きなど）を用意する。	行動 ：作り方やのりの使い方などを簡潔にまとめ掲示する。見本を掲示し、必要な用具や材料を分類しながら用意し、作ってみたいくなるようにする。 言語 ：肯定的な言葉をかけ、自分でやろうと思ったことや完成できた時には嬉しさに共感したり、次の意欲が持てるように「こんなものが作れるよ」「こうしてみる？」とモデルを示してみたり、一緒に作る楽しさを感じられるようにする。

《製作活動の園児の変容》

(製作遊びにあまり興味を示さない消極的なA児)

笹飾りを作ろうとするが「できない」と途中で他の遊びへ行ってしまふ。「一緒にやろう」と誘ってみても、始めはなかなか応じなかったが、保育教諭と他の子が一緒に作る姿を見て、やってみようとする時もある。簡単な輪つなぎができるようになったことや褒められることが嬉しくなり、完成したことを喜ぶようになった。作り方がわかると「もっと長くしたい」「次はこれを作りたい」と気持ちが表れてきた。見守りながら、一緒に作ることで楽しさを感じ、自分なりの目的をもち継続的に作る意欲へと繋がった。

(その後の園児Aとクラスの遊びの様子)

7月頃のA児は製作遊びを楽しむようになり、海の生き物の絵を切り抜いて遊ぶことに夢中になり、じっくりと遊ぶ姿が見られるようになった。近くで遊んでいた子たちが魚釣りをイメージし、身近な素材を使って釣り竿や釣り堀作りが始まった。色や形から発想して、共通のイメージをもつことに繋がり、直感的試行段階の姿がクラスの中で見られるようになった。好きな遊びから友達との関わりが広がっていった。

8月頃には「お化け屋敷を作ろう」「お店屋さんをしよう」と遊びに必要な物を作り、イメージを共有し、ごっこ遊びが継続するなど、クラスの遊びの変化も見られた。

七夕製作

輪つなぎを「長くしたい」と継続して作り完成した笹飾り



好きな遊びを見つけ、じっくり遊び、釣りのイメージを共有して友達と一緒に遊ぶ姿。



遊びに必要な物を作り、作ったもので遊んでいる姿。

「お化け屋敷で使うんだ」と作ったものを嬉しそうに話しながら遊ぶ姿。

くじ引きの景品作り



《考察》

- ・製作活動に興味をもち意欲的になれるような物的環境の工夫ときっかけづくりや子どもの思いに共感するなどの直接的な援助の工夫を行ったことで、消極的な子も「先生と一緒にやってみようかな」と思う気持ちになったと捉える。
- ・完成したことが充実感や満足感になり、「次はどんな飾りを作ろうかな」と一緒に作る楽しさを感じて「笹飾りを作る」というその子なりの目的をもった活動になったと考える。
- ・「できた」と達成感を味わうことが集中力や物事を考える力、友達と関わって遊ぶなどの社会性の成長にも繋がったと考える。
- ・共通の体験が遊びのきっかけとなり、主体的に遊びを進めていこうとする姿に繋がったと考える。

IV 実践の振り返り

1 成果

- ・年齢や発達に合った、活動の計画、扱いやすい教材を準備していくことが、園児の興味を向けることに繋がった。
- ・様々なものに触れ、そのものを使うことからいろいろな遊びに広がりが見られるようになった。日常的に触れていく環境の工夫が主体的な活動に繋がった。

2 課題

- ・幼児理解を深め、自発的な活動からどのように遊びが展開していくか予想し、主体的な活動が展開していけるような環境作りと援助方法を見直し、指導の改善を行う。

V 今後の実践に向けて

- ・一人一人の遊びの傾向を観察し、遊びの中で経験できることを指導計画で明確にした保育実践をしていきたい。
- ・自発的な遊びにつながるきっかけづくりが必要な子へも好奇心を刺激する魅力的な保育環境を作り、こどもも主体の保育を目指したい。

〈主な参考文献〉

内閣府 文部科学省 厚生労働省 2018 『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』 フレーベル館
請川 滋大 2020 『子ども理解』 萌文書林 榎 英子 2008 『保育をひらく造形表現』 萌文書林

園児が夢中になって遊びこむための環境構成と援助の工夫

— ‘やってみたい’ を実現するための環境構成と援助の工夫—

那覇市立那覇こども園 保育教諭 安里 笑美子

I テーマ設定の理由

近年の幼児の育ちについて、多くの情報に囲まれた環境にいるため、世の中についての知識は増えているものの、その知識は断片的なものが多く、学びに対する意欲や関心が低いとの指摘がある。幼児期は、知識を教えられ身に付けていく時期ではなく、遊びながら学んでいく時期である。

そのため、こども園等においては、保育教諭等や友達と一緒にその関りを広げたり深めたりすること、興味や関心に基づいた主体的な活動や具体的な体験を通して多くの学びを保障していくことが求められる。幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説において、教育及び保育の実施に関する配慮事項に、「園児が自ら周囲に働き掛け、試行錯誤しつつ自分の力で行う活動を見守りながら、適切に援助すること」と示され、園児にとって魅力的な環境を構成し、意欲的に取り組みたくなる活動を計画していくことが大切であるとされている。また、幼保連携型認定こども園の役割として、「園児の自発的な活動としての遊びを十分に確保することが何よりも必要である。」と示され、夢中になって遊びこむことができるような環境構成や援助の工夫が必要だと捉える。

本学級は、5歳児クラス（2年保育）男児9名、女児12名、計21名が在籍しており、9名が新入園児で全員が集団保育を経験している。保育教諭等との関わりを通して安心して園生活を過ごし、自分の好きな遊びや園生活や行事を取り入れ友達と遊ぶ姿が見られる。一方、遊びが断続的で、同じ遊びを繰り返すが展開があまり見られない様子や、自分の考えやイメージをうまく伝えられず、友達との遊びが深まらない姿がみられる。

このことから、自ら興味関心をもって関わりたくなるような環境構成と援助の工夫をすることで、園児が夢中になって遊びこむ経験を重ねることができるのではないかと考え、本テーマを設定した。

II 課題に対する具体的な手立て

- 1 園児の実態把握を行い、幼児理解を深める。
 - ・保育教諭が園児と共に遊ぶ中で、一人一人の興味関心や実態を肯定的に捉え、必要な援助について理解を深める。
- 2 遊びこむための環境構成の工夫
 - ・園児一人一人の興味関心に応じて主体的に関われるよう、「やってみたい」という気持ちや意欲を引き出し、じっくり取り組める環境となるようにする。
- 3 遊びこむための援助の工夫
 - ・遊びの内容を具体化し、友達と共に遊びを広げていくために、園児の思いやイメージを問いかけによって引き出し、共有できるようにする。
 - ・一人一人の発達の状況や必要に応じて関わり方を工夫し、園児が安心して遊びに取り組み、遊びを深めていけるようにする。

Ⅲ 課題解決に向けた取組（実践）

実践事例1：イメージを共有して遊びを進める姿から

【幼児の実態（6月）】

- ・友達とままごとやごっこ遊びを楽しんでいる。遊びは断続的で、継続する時間は短い。
- ・保育室にあるものを使って遊ぶ姿は見られるが、必要なものを考えたり作ったりしながら遊ぶ姿は少ない。

【園児理解】

- ・友達と遊ぶことが好きな子が多く、遊びを楽しんでいる。
- ・好きな遊びを楽しんでいる様子が見られる一方で、遊びを継続して深めていく姿は十分とは言えない。
- ・「次はこうしたい」「こうしてみよう」という思いや見通しが、言葉や行動として表出する場面は少ない。

【保育教諭の願い】

- ・「やってみたい」「次はこうしたい」という思いを友達に伝え、自ら環境に関わりながら、継続的に遊びを楽しんでほしい。
- ・友達と一緒に、遊びを展開していく面白さや満足感を味わってほしい。

【環境構成】

- ・廃材、布、絵の具などの材料や道具を準備し、必要に応じていつでも使えるようにする。
- ・作品などを置く場所を設け、翌日以降も継続して遊びに取り組みできるようにする。
- ・じっくり遊べる時間を保障し、遊びが途中で途切れないようにする。

【援助の工夫】

- ・「やってみたい」「次はこうしたい！」という思いを友達に伝え、自ら環境に関わりながら、継続的に遊びを楽しむために、「次はどうしたい？」「何が必要かな？」等の問いかけを行い、やりたいことのイメージを具体化し、共有できるようにした。
- ・友達と一緒に、遊びを展開していく面白さや満足感を味わえるように、幼児一人一人の遊びの様子に応じて見守りや言葉がけを行い、遊びを継続できるようにした。
- ・担任間や保育教諭等と遊びの様子や一人一人の姿について話し合い、幼児理解を深めた。

【変容】

- ・様々な廃材や道具を準備し、一緒に遊びながら問いかけを行ったことで、「こんなふうに作ってみよう」「ここに、この布を置いてみよう」等、友達と遊びのイメージを共有しながら、遊びに使うものを作り始める姿がみられるようになった。
- ・製作物の保管場所を設けることで、登園後すぐに遊び始めたり、遊んだ後に自分達で片付けたりする姿がみられるようになった。
- ・「もっとやりたい」「また明日もあそぼう！」と友達と話し、継続的に遊ぶ姿が増えた。
- ・周囲の友達も興味を示して一緒に作り始めたことで、友達との関りが増え、遊びが広がっていった。

実践事例2：表現遊びの姿から

【幼児の実態（11月）】

- ・運動会を終え生活発表会に向けた取組が進む中、友達同士で立ち位置や振り付けを決めて、歌ったり踊ったり、表現遊びをする姿がある。
- ・友達の様子を見て参加する子や、見ている子がいる。

【園児理解】

- ・自分達で、役や立ち位置等を決めて遊んでいる。
- ・狭い場所で行っているため、思い切り表現する楽しさや満足感を感じられないのではないかと。
- ・歌って踊る友達に興味をもっているが、離れたところから見ているため直接的な関りは少ない。

【保育教諭の願い】

- ・思い切り表現する楽しさを味わいながら、友達と繰り返し楽しんでほしい。
- ・踊っている子も見ている子も、同じ場で一緒に楽しさを味わってほしい。
- ・イメージを共有し、自分達で必要なものを選んだり考えたりしながら遊びが広がるといいな。

【環境構成】

- ・思い切り歌ったり踊ったりできる場所や時間を保障する。
- ・曲や音楽を準備し、いつでも歌ったり踊ったりできるようにする。
- ・遊びに必要なものをいつでも作って使えるよう、材料や道具を用意する。

【援助の工夫】

- ・思い切り表現する楽しさを味わいながら、友達と繰り返し楽しむために、担任や保育教諭等と幼児の姿について共有しながら理解を深め、環境構成や援助について共通理解をもって保育に生かす。
- ・踊っている子も見ている子も、同じ場で一緒に楽しさを共有するために、一緒に歌ったり踊ったりすることで、遊びを継続し楽しめるようにする。また、お客さんとして参加することで、他の友達も一緒に楽しみながら関わられるようにする。
- ・イメージを共有し、自分達で必要なものを選んだり考えたりしながら遊びを広げるために、友達の考えや

意見を伝え、新しい気付きや考え方につながるよう、必要に応じて声掛けや問いかけを行う。

- ・ドキュメンテーションや情報機器を活用し、自分達の遊びを振り返ることで、気付きや新しいアイデアを伝え合ったり、共有することにもつなげたい。

【変容】

- ・踊る場所やじっくり取り組める時間を保障することで、何度も繰り返し楽しむ姿がみられた。それを見て、「やりたい」「仲間に入れて」と、加わる子が増えた。
- ・やりたい遊びのイメージを自分達で共有し、観客席やチケットなど必要なものを作って遊びに取り入れる姿がある。それまで興味をもっていなかった子も観客として参加し、一緒に楽しむ機会が増えた。
- ・遊びが終わる時間になると、「もっとやりたい」「終わりがたくない」という声が聞かれるようになり、「またやろうね」「次は〇〇からね」など、遊びに見通しを持って取り組む姿が見られるようになった。

実践の振り返り

【成果】

- ・環境構成と援助を工夫することで、「やってみよう」思いや意欲が引き出され、言葉で思いやイメージを伝えたり、必要なものを自分達で作って遊びに取り入れたり、遊び込む経験を重ねることができた。
- ・友達の気付きや考えを共有したことで、興味や関心が広がり、活動のきっかけや遊びの展開へとつながった。
- ・園児の思いと環境や援助の工夫が重なると、自ら周囲の環境に働き掛けて様々な活動や遊びを生み出し、必要感や興味関心、遊びや活動の見通しをもって展開していくようになった。
- ・遊びの内容やイメージを具体化する援助として、すぐに答えを出さずに問いかけることで、友達と共に環境に関わりながら遊びを広げていくことができた。

【課題】

- ・園児と遊びや活動を一緒に行い幼児理解を深めることができなければ、興味や関心、実態を捉えられず、必要な環境構成や援助について、検討することが難しい。また、環境構成や援助の工夫が適切でない場合は、遊びや活動が断続的で、展開が見られない。
- ・多くの園児が興味や関心を持つ遊びや活動だけでなく、一人で遊ぶ環境、好きな友達と遊ぶ環境など、園児の体験が豊かになるような環境構成や援助の工夫が必要だと考える。

【気づき、考え】

- ・やってみようという思いを引き出し、実現できる環境を整えることが、幼児が自ら周囲に働き掛け、試行錯誤しながら自分の力で活動していく姿につながることを改めて感じる事ができた。活動の主体が園児であることを常に意識し、活動が生まれやすく展開しやすいように意図をもって環境を構成していくことを大切にしていきたい。

V 今後の実践に向けて(課題の改善策、今後取り組んでいきたいこと)

今後は、幼児が安心感や見通しをもって自ら環境に関われるよう、日々の関わりを通して築いた信頼関係を基盤に、幼児理解に基づいた環境構成や援助の工夫を継続していきたい。また、園生活の中で捉えた幼児の姿や育ちを職員間で共有し、振り返りを行いながら指導計画に反映させていくことで、課題の改善につなげ、幼児一人一人の育ちを園全体で支えていきたい。

〈主な参考文献〉

- 内閣府・文部科学省・厚生労働省 2018 『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』 フレーベル館
- 内閣府・文部科学省・厚生労働省 2022 『幼保連携型認定こども園における園児が心を寄せる環境の構成』 フレーベル館
- 内閣府・文部科学省・厚生労働省 2021 『幼児の思いをつなぐ指導計画の作成と保育の展開』 チャイルド本社

自分のよさに気づき、主体的に活動に取り組むための環境構成や援助の工夫

— 自分が認められる体験やごっこ遊びを通して —

那覇市立城北こども園 保育教諭 幸良 亜希子

I テーマ設定の理由

近年の社会において、少子化や核家族化、人間関係の希薄化等、子どもを取り巻く環境は常に変化している。また、令和5年度のこども家庭庁の「我が国と諸外国のこどもと若者の意識に関する調査」によると、日本の子ども・若者は、他国と比べて自己肯定感が低いという調査結果が出ている。自己肯定感を育むためには、自分を大切に思い、自分のいい所(長所)を認め、小さな成功体験を積み重ねることが大切であるとされている。

幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説「人間関係」の内容の取扱いによると、「集団の生活の中で、園児が自己を発揮し、保育教諭等や他の園児に認められる体験をし、自分のよさや特徴に気づき、自信をもって行動できるようにすること。」とある。また、「園児は自分が認められることで友達によさも認められるようになっていく。」と記されている。これらのことから、保育教諭が、園児一人一人のよさを認めていくことが、園児の自信となり、認められる体験を積み重ねていくことで、友達によさに気付くことに繋がるため、保育教諭や周りの友達に認められるという体験は大切であると考えた。

本学級は、5歳児(2年保育)計18名が在籍しており、活発で明るく、いろいろな遊びや活動に積極的に参加する子が多い。一方で、遊びや生活の場で困ったことがあると、自分の思いを言葉で伝えることが難しい様子や、人前に出ると自信のなさや緊張から、自分の気持ちを表現することが苦手な様子が多く見られる。

これまでの私自身の保育を振り返ると、一人一人違う個性をもち、それぞれの長所がたくさんある中で、一人一人のよさを伝えることが十分ではなかったこと、さらに、園児の「やってみたい」という意欲を汲み取りながら活動を進めていくための援助や環境構成の工夫が十分でなかったと考える。

そこで、本研究では、周りの人に自分が認められる体験を通して自信へと繋げたり、自分の気持ちを伝え、相手の気持ちに気付いたりする経験を積み重ねていくための援助や環境構成の工夫を行うことで、自分のよさに気づき、主体的に活動に取り組めるようになるのではないかと考え、本テーマを設定した。

II 課題に対する具体的な手立て

1 自分が認められる体験を積み重ねるための保育の展開について

- (1) 一人一人の園児理解を深めるとともに、ありのままの自分が認められているという安心感を抱けるような言葉掛けや援助の工夫を行う。
- (2) 保育教諭が園児一人一人のよさや特徴に気づき、いろいろな場面で園児の認められる体験を積み重ね、自信へと繋げていけるような援助を行う。

2 相手の気持ちに気付く経験を積み重ねるための援助について

- (1) 園生活の中で、様々な活動やごっこ遊び等を通して友達の思いや考えに気づき、お互いの考えを認め合い、充実感を味わう体験を積み重ねることができるよう援助の工夫を行う。
- (2) 保育教諭が園児同士の思いを繋ぎ、関わりを深めていくための言葉掛けの工夫や、環境構成の工夫を行う。

III 課題解決に向けた取組(実践)

◆研究事例1 一人一人のよさをクラスで共有するための援助の工夫「びっくりまん み〜つけた！」


《園児の姿(5月下旬頃)》

園生活を進めていく中で、友達の輪が少しずつ広がり、好きな遊びを見つけて友達や保育教諭と一緒に楽しく遊ぶ姿が増えてきた。しかし、新しいことに挑戦することに不安を抱いたり、自分の気持ちを友達や保育教諭に伝えることが苦手な場面が見られたりと、自分に自信をもてない姿が見られた。

《保育教諭の願い》



- 自分のよさに気付いて、自信をもってほしい。
- 自分の気持ちを友達や保育教諭に伝えながら、遊びを進める楽しさを感じてほしい。

《◎保育教諭の援助》	《☆環境構成の工夫》	《・園児の変容》
<p>◎園児の頑張っている姿や、良いところをたくさん見つけ、具体的に褒めることを繰り返すことで、自信へと繋がるような言葉掛けを行う。</p> <p>◎帰りの会の時間に、「びっくりまん」を紹介し、その日見つけた園児の良いところを全体の場で共有する。</p> <p>〇〇さんが、困っている友達を助けていたよ！どんな気持ちになったかな？</p> <p>〇〇さんが、フラフープに挑戦していたよ。諦めないで頑張ったんだね。</p>	<p>☆園児自身が見つけた友達の良いところや、友達に言われて嬉しかった言葉などを書いて掲示するスペースを設け、自分や友達の良いところに気付けるような環境構成の工夫を行う。</p> <p><ふわふわ言葉></p> 	<p>・自分が認められる体験を通して、自分のよさにも気付くことができ、遊びの中で友達や保育教諭に自分の思いを伝えようとする場面が増えてきた。</p> <p>・友達とアイデアを出し合いながら、新しいことに挑戦し楽しんでいる姿が見られた。</p> <p>〇〇さんが、トイレのスリッパを並べてくれたよ！</p>

《考察》

- ・保育教諭が園児一人一人のよさや特徴に気付き、園児のありのままの姿を認めることで、園児の安心感へと繋がり、自信や意欲をもって活動に取り組む園児の姿へ繋がったと考える。
- ・園児を認める援助や言葉掛けを繰り返すことで、自分のよさだけでなく友達によさにも気付き、自分の思いを伝えながら遊びを進めたり、友達との関わりを楽しんだりする姿へと繋がっていったと考える。

◆研究事例2 自信や意欲を育むための工夫「お祭りごっこを通して」

《園児の姿（7月下旬～8月頃）》

空き箱や芯などの廃材や花紙などの素材を使って、たこ焼きやジュース作りが始まった。隣のクラスの友達が教室で作った「迷路」に招待してくれたことをきっかけに、「にじ組はお祭り屋さんをしよう！」とお祭りごっこが始まっていった。自分の思いやアイデアを言葉にしながら遊びを進める子もいるが、『やってみよう』という自分の思いを友達や保育教諭に言葉で伝えることが難しいA児の姿も見られた。

《保育教諭の願い》



- 自分の思いや考えを、友達や保育教諭に伝えることができるようになってほしい。
- 自分に自信をもち、友達と遊びを進める楽しさや充実感を感じてほしい。

《◎保育教諭の援助》	《☆環境構成の工夫》
<p>◎園児から出てきたアイデアを受け入れ、全体の場で広げたり共有したりすることで、自分の思いや考えを安心して伝えることができるような援助を行う。</p> <p>◎園児の思いや考えを引き出すような問いかけや、園児同士の思いを繋ぐ言葉掛けを行うなど、園児が主体となって遊びが進められるような援助の工夫を行う。</p> <p>◎自分の思いや考えが認められたり、実現したりした時の喜びや充実感を味わえるような援助を行う。</p>	<p>☆園児がイメージを実現できるよう、花紙や画用紙などの素材や、割り箸や紙コップ、空き箱などの材料を用意する。</p> <p>☆今後の遊びの展開を予想しながら、必要な材料を事前に用意したり、園児同士の思いを繋ぎ、一緒に必要なものを考える。</p> <p>☆ごっこ遊びのコーナーを、園児と一緒に作り、継続して遊びが楽しめるようなコーナーの工夫を行う。</p>
<p>(お祭りごっこの準備が始まり、段ボールで看板作りを行っていた。友達同士で倒れない方法を考え、ガムテープで補強したりするが、何度も看板が倒れてしまう。友達が工夫しながらもうまくいかず、諦めようとしている姿を近くで見ていたA児。)</p> <p>A児：「この看板、すぐに倒れちゃうね。」</p> <p>先生：「本当だね。すぐに看板が見えなくなっちゃうね。どうしたらいいんだろう・・・？」</p> <p>A児：「牛乳パックを、もっと高く重ねたらいいんじゃない？」</p> <p>先生：「へー！なるほど！いい方法だから、友達にも教えてあげる？」</p> <p>A児：「(恥ずかしそうな表情をしながら…)うん！」</p> <p>先生：「みんなー！A児さんが、看板が倒れない良い方法を考えたみたいよ！教えてもらおう！」</p> <p>A児：「(緊張した表情を見せながら…)牛乳パックを もっと重ねたらいいと思う。」</p> <p>友達：「いいね！やってみよう！」</p>	
<p>《・A児の変容》</p>	
<p>・自分のアイデアで看板作りが成功した経験が自信へと繋がり、これまでは思いを伝えることが苦手だったA児から、「プレスレットを小さくしたら指輪にもなるよ」「〇〇も作ってみたいな」などと自分の思いや考えを伝えようとする姿が見られてきた。</p>	

《考察》

- ・保育教諭がA児のアイデアを紹介し、他児へ認められる経験をしたことで自信へと繋がり、友達や保育教諭と言葉のやり取りを楽しむ気持ちや、自分の気持ちを伝えようとする意欲へと繋がっていったのではないかと考える。
- ・保育教諭が、友達との関わりを広げていく援助を行ったことで、友達とアイデアを出し合いながら遊びを進めていく楽しさや充実感を味わうことへと繋がり、友達関係が深まってきた。

◆実践事例3 主体的な活動へと繋げていくための援助の工夫について「獅子舞作り楽しいな！」

《園児の姿（9月～12月）》

ダンスやエイサーなど、人前に出て発表したり、披露したりすることが苦手なB児。クラスの友達が、夏休み期間中にお祭りなどで見た獅子舞に興味をもち、獅子舞作りを楽しんでいる姿を見ていた。B児も興味はある様子だが、なかなか自分から参加することができずにいた。

《保育教諭の願い》



- 自分の興味関心のある遊びを、友達と一緒に思い切り楽しんでほしい。
- 「やってみたい！」という気持ちを大切に、自信をもって取り組んでほしい。

《◎保育教諭の援助》	《☆環境構成の工夫》	《・園児の変容 *B児の変容》
<p>◎保育教諭も一緒に獅子舞作りを楽しみ、B児や他児を遊びの中に誘うような言葉掛けを行う。</p> <p>◎「どうやって獅子舞を作ろうか?」「何色にする?」と、イメージを引き出すような言葉掛けを行う。</p> <p>◎保育教諭も園児と一緒にイメージを共有しながら、獅子舞作りの楽しさを味わう。</p> <p>◎友達同士で獅子舞作りを楽しめるよう、興味を示している園児同士を繋ぎ、友達関係を広げながら遊びを楽しめるような援助の工夫を行う。</p>	<p>☆画用紙や絵の具、毛糸やペットボトルのキャップなど、園児と一緒に必要な材料を考え、イメージしたものを実現できるような材料の工夫を行う。</p> <p>☆自分で試したり工夫したりできるように、園児の取りやすい場所や高さに材料を用意したり、素材や大きさごとに分けて用意し、表示を貼って分かりやすくするなど工夫を行う。</p> <p>☆室内遊びの時間に、作った獅子舞を披露できるような場所の確保を行う。</p> <p>☆獅子舞を飾るコーナーを設けることで、他児への興味関心へと繋がるような工夫を行う。</p>	<p>・あまり興味を示していなかった園児も、友達が楽しそうに獅子舞を作ったり、披露している姿を見て「自分もやってみたい!」と獅子舞作りが広がっていった。</p> <p>*「こんな獅子舞を作ってみたい!」と、獅子舞の写真を保育教諭に見せるなど、獅子舞作りに興味を示すようになった。</p> <p>*「ここに毛をつけたい!」「獅子舞の歯はペットボトルのキャップがいいな!」などと、自分なりのイメージを言葉にして伝えながら、獅子舞作りを楽しんでいた。</p> <p>・B児の作っている獅子舞を見て、クラスの友達も獅子舞作りに興味を示し、クラスで獅子舞作りが盛り上がりつつあった。</p> <p>*「発表会で獅子舞を見せたい!」と、獅子舞を作るだけでなく、人前で披露したいという意欲にも繋がり、獅子舞作りから表現遊びへと発展していった。</p>

《考察》

- ・園児の興味関心を保育教諭が捉え、「やってみたい!」という気持ちを実現できるような援助や環境構成の工夫を行ったことで、園児の「もっとやりたい!」「次はこうしてみたい!」という意欲へと繋がり、主体的に活動に取り組む姿に繋がっていったと考える。
- ・園児の興味関心を保育教諭が認め、友達同士の繋がりを深められるような援助を行ったことで、「発表会で披露してみたい」という自信や意欲へと繋がり、主体的に取り組む姿へと繋がったと考える。

IV 実践の振り返り

1 成果

- (1) 保育教諭が園児一人一人のよさを認め、ありのままの園児の姿を受け止めていくことで、自分のよさに気付くことに繋がった。
- (2) 保育教諭や友達など周りに認められる体験を積み重ねることが自信へと繋がり、友達や保育教諭に自分の気持ちを伝えながら、主体的に活動に取り組む姿へと繋がった。

2 課題

- (1) 自分の思いを友達に伝えながら遊びを進めていく園児もいれば、自分の意見を伝える前に譲ったり、思いを伝えたりすることが難しい園児もいる。自分の思いを伝えながら遊びを進める楽しさを味わうことができるよう、自分のよさに気付き、自信をもって取り組めるような援助をさらに工夫していく。
- (2) クラス全体での「お祭りごっこ」などでは、その場の雰囲気を楽しんだり感じている姿はあっても、「主体的に遊ぶ楽しさを味わう」という面ではまだ課題が残る場面もあった。今後は、クラス全体での活動であっても、一人一人の興味関心の違いなども考えながら、一人一人が主体的に遊ぶ楽しさを味わえるような工夫を行っていく。

V 今後の実践に向けて

- ・園児一人一人のよさを認めるために、園児と一緒に遊ぶ中で、コミュニケーションやスキンシップを大切にしたり、具体的な言葉で褒めたり励ましたりするなどの援助を行う。また、グループ活動などで自分の思いを伝えたりする場面を積極的に取り入れ、お互いを認め合う経験を通して温かい学級の雰囲気作りを行う。
- ・園児一人一人の興味関心を捉える中で、園児の「やってみたい!」という気持ちや考えを伝え合う場を作り、成功体験を積み重ねることで、自信へと繋がるような援助を行っていく。

《主な参考文献》

内閣府 文部科学省 厚生労働省 2018 『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』 フレーベル館
 柴崎正行 2013 『子どもが育つ保育環境づくり』 株式会社 学研教育みらい

友達との関わりの中で伸び伸びと表現する保育の展開

—幼児理解に基づいた造形活動を通して—

豊見城市立上田こども園 保育教諭 小嶺 千紘

I テーマ設定の理由

描く・作る・素材に親しむ・イメージを広げる等、表現や造形活動は日々保育の中で展開され、子ども達にとっても身近な活動である。個の楽しさから時に、友達と関わりながら豊かな表現や協同的な活動へ繋がるなど幅広い展開がなされる。本学級は5歳児（3年保育）計20名。進級児が多く気の合う友達と遊びや生活を積極的に進める中で、様々な物を描いたり、作ったりしながら遊びに取り入れる姿がある。一方、経験の差や苦手意識のある子どもも多く、思いや考えがあっても「できない」と自信が持てずにいる子や、自分の表現を友達と比べてしまい、本来の楽しさを感じる事ができずにいる姿もある。

幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説の「表現」の領域 1 ねらいにも（1）「いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ。」（2）「感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。」（3）「生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。」とある。そのことから、子ども達が主体的に遊びや生活の中で伸び伸びと表現する心地よさや楽しさ、周囲の人や物と関わりを十分に味わう経験を重ねてほしいと考え、本テーマを設定した。その手立てとして、幼児理解を深めながら、一人一人の興味や関心を捉えた活動や援助の工夫、友達とのつながりに視点を置き、研究を進めていく。

II 課題に対する具体的な手立て

1 幼児理解に基づいた環境構成と教師の援助の工夫

- ・子どもの気持ちを受け止め、一緒に喜んだり、楽しむ中で安心感を持って表現活動を楽しめるようにする。
- ・身の回りの道具や用具、様々な技法や素材との出会いなど、好奇心を引き出せるような活動と環境構成の工夫を行う。

2 幼児の主体的な遊びを中心とした保育の展開

- ・一人一人が「やってみよう」「面白そう」と興味や意欲を持って取り組めるような活動の工夫。
- ・友達との関わりを深め、様々な表現が生まれ共に満足感や充実感を味わえるようにする。

III 課題解決に向けた取組（実践）

1 実践事例「色々な表現方法の楽しさを感じて」（4月～6月）

【幼児の実態】

クレヨンや色鉛筆、マジックなどこれまで親しんできた経験のある画材を遊びに取り入れながら遊ぶ姿が見られ、友達のしていることに興味を持ち真似て自分の遊びに取り入れる姿がある。一方、やりたい気持ちはあるが、どう表現していいかわからなかったり、素材や道具の使い方に戸惑う子どもも多い。

【保育教諭の願い】

- ・様々な表現方法に触れ、興味を広げて欲しい。
- ・自分なりの発見や表現の楽しさを十分味わって欲しい。

【○環境構成 □教師の援助】

- 自由に描いたり作ったりする事を楽しめるように、様々な素材を準備する。
- 経験した技法を、繰り返し遊びの中で取り入れられるような環境構成を行う。
- 一人一人のイメージや表現を受け止めながら、どんなことに楽しさや面白さを感じているのか内面理解に努める。
- 友達のアイデアや考えの面白さに気付けるように援助し、互いに刺激を受けながら活動を進めていくようにする。

【幼児の変容】

こいのぼり製作では、うろこの形をクレヨンで色を塗ったり模様を描き、切り取って台紙に貼り付け自分

のこいのぼりが完成。個の満足感に繋がった。その後、絵本を通し、「こいのぼりに乗っていきたいところ」が話題となり模造紙を用意すると、気の合う友達数名で行きたい町や鯉のぼりの背中に乗った自分などイメージを膨らませて描く姿が見られた。また、実際の野菜や植物を見て描く楽しさを感じる経験や、スタンプやスタンプ、絵の具などを取り入れた活動を通し、技法の面白さ、道具の特性の発見を保育教諭や友達に伝え興味の広がりを感じた。なかでも、苦手意識を持っていた子は、満足感を感じ友達に自分のイメージを伝えたり、作った物、描いた物を嬉しそうに見せる姿も見られるようになってきた。



じっくり・満足に



様々な技法を知り楽しむ・発見する



気の合う友達と

【考察】一人一人が満足や達成感の経験を繰り返し味わうことで、表現活動への意欲の高まりに繋がる。環境においては子ども達が日々手に取って試したりできる構成・用具の準備(画板や画用紙・絵の具など)を行うことで繰り返し楽しさを味わう事ができた。また、この時期は気の合う友達とイメージを共有する事は出来たが人数が増えると思いが伝わらず上手い出来ない事も多かった。

2 実践事例「お祭りごっこを通して」(9月~10月)

【幼児の実態】

段ボール迷路やくじ引き遊び、食べ物作りなど、作って遊ぶ楽しさを感じる姿が活発になってきた。

また、1ヶ月間遊びを継続する中で子ども達から「他のクラスを招待したい」という声が聞こえ始めた。

【保育教諭の願い】

- ・気の合う友達と遊びを楽しんでいるが、みんなで一体感を感じながら遊びも関わりも広がって欲しい。
- ・自分達で作った物で、周りが楽しんでくれる喜びを経験して欲しい。(自信につなげたい)

【〇環境構成 □教師の援助】

□各お店のコーナー作りや、お祭りやお店に必要な物を子ども達と相談しながら共に環境作りを行う。

□子ども達のイメージを形にしていく方法など、話し合う中で考えやアイデアを引き出し一緒に実現していく。

□一人一人が楽しく参加できるように配慮しながら、クラス全体で楽しい雰囲気作りをしていく。

□友達と相談する機会を設け、自分の考えを伝え、他者の考えに触れる経験を重ねていけるようにする。

【幼児の変容】

- ・気の合う友達同士で楽しんでいた事が、みんなで「お祭りごっこ」という共通の遊びになったことで、自分達で商品や遊び方を工夫したり、色々な表現を認め合う機会になった。また、自分だけの考えでは難しい事も、友達とイメージや考えを出し合う事によって、素材を検討し、より細かな部分にこだわる姿も見られた。
- ・他のクラスの友達をお祭りごっこに招待することで、看板・呼び込み・案内係など役割を楽しみ、自ら積極的に遊びに関わるようになった。
- ・これまでの経験から、自分の知識・考えとして取り入れながら遊びを進める自信にもつながった。



お客さんが沢山。嬉しいな♪



かき氷屋さん(絵の具で味付け)

【考察】主体的な遊びを大切にしながら、友達とつながりが持てる遊びの展開に見通しを持ち、子ども達と話し合い実現していく事で、仲間とつながり、それぞれの表現やイメージを楽しむことができた。また、一人一人のアイデアを受け止め、共に試したり、形になっていく喜びに共感することで遊びが継続し深まっていった。

3 実践事例「劇遊び 大道具作り・衣装作りを通して」(11月)

【幼児の実態】

大道具作り：船を作ろう！と張り切って「大きな船」を作った子ども達。段ボール迷路を作った経験から、自分達でアイデアを形にしていく。しかし、大きすぎて舞台に運ぶまでに壊れてしまった。みんなで乗れる船を作るにはどうしたらいいか、話し合い再び作り始めた。

衣装作り：作る事に意欲的な2名の子が衣装の製作を始めた。これまでの経験を生かしながらイメージを膨らませ楽しく活動を進めている。その姿に、他の子も刺激を受け「やりたい！」と広がった。

【保育教諭の願い】

大道具：前回の失敗経験から、次の形のイメージを共有して試したり、仲間で知恵を合わせながら実現できるようにしたい。

衣装：劇遊びへの意欲や期待感を大切に、楽しんで自分のお気に入りの衣装が作れるようにしたい。

様々な素材や道具を選び取ってイメージを実現できるようにしたい。

【○環境構成 □教師の援助】

○子ども達と必要な材料や素材を話し合いながら準備する。

□イメージを共有しながらみんなで試したり、工夫したりして遊ぶ楽しさが味わえるようにする。

□課題や発見を全体で共有しながら、クラスみんなで協力できるようにする。

【幼児の変容】

・船作りでは、みんなで話し合った事をデザイン画にして進める姿が見られ、イメージを共有したい気持ちや「みんなで乗れる船を作りたい」という仲間意識の高まりが見られた。形にしていく過程において、話し合い活動を繰り返したことで、大道具作りが協同的な関わりに繋がる姿が見られた。

・衣装作りでは、様々な形や色、素材を組み合わせ友達と表現を認め合いながら意欲的に取り組んでいた。

友達に刺激を受けながら



みんなのイメージ通りの船が完成!



【考察】失敗の経験やイメージの広がり、
「こうしたらどうだろう」と力を合わせて考え、共通の目的を見出し、協力しながら進める経験となった。関わりが深まると共に、自分の力も発揮されていき自己肯定感も高まった。

IV 実践の振り返り

《成果》

- ・幼児理解を深め、その子なりの表現を温かく受け入れる援助を行うことで、安心して自己表現する姿につながった。
- ・人との関わりを深めていくことで、イメージの広がり主体的な活動への意欲が高まり自己発揮をしながら過ごせるようになった。
- ・様々な素材や技法に出会うことで、面白さ・不思議さ・発見等、直接的体験となり知的好奇心が高まった。

《課題》

- ・自分なりの思いが伝えられるようになり、協同的な表現活動も増えてきた。折り合いがつかない場面も多いが、互いのイメージを大切にしつつ発達に応じた場所・物・教師の援助を引き続き検討していく。

V 今後の実践に向けて

子ども達が、これまで重ねてきた育ち(知識・技能の基礎)を、自ら今後の活動の中で活用し、深い学びに繋げていけるようにしたい。これから教育計画5期に入っていく中で、改めて主体的な学びを大切にし、就学へ育ちを繋いでいけるように架け橋期カリキュラムも意識していきたい。そのためには、幼児理解に努め、心を動かされる体験を通し豊かな感性・表現を大切にし、適切な援助をしていきたいと思う。

《主な参考文献》

- ・内閣府 文部科学省 厚生労働省 『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』 フレーベル館
- ・平田智久、小野和(監修) 池田純子、伊藤裕子(編著) 『3・4・5歳児 造形表現が深まるヒント』ひかりのくに株式会社

わくわく食べる子ども達の育成

—食べる意欲を育む食育の工夫と保育教諭の援助の在り方—

豊見城市立上田こども園 教諭 氏名 赤嶺 友海

I テーマ設定の理由

本学級は、3歳児（3年保育）16名で、全員が新入園児である。集団経験はあるものの小規模園や企業内託児所から入園する子、集団経験が初めての子等、家庭的な背景は様々であり、経験の差も大きい。

クラスの実態として、ほとんどの子が食に関する興味・関心が薄く、好きな物以外は自分で食べ進めようとせず、保育教諭の援助を待つ等の姿がある。幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説の「健康」の内容（5）に「保育教諭や友達と食べることを楽しみ、食べ物への興味や関心をもつ」とあり、“楽しむ”ことが食育の基本となる。また、「第3節 食育の推進」のなかにもこども園での食育のあり方が記されており、子ども達が豊かな人間性を育み、生きる力を身に付けていくために食育を通した活動は重要な取り組みの一つであると感じる。そこで、3歳児が楽しく“食”に興味関心を持ち、食べる意欲を引き出すための声かけや活動の工夫、家庭との連携を通し、子どもの内面（心の育ちとしての“食”）にどのような変化があるかを探りたいと思い、本テーマを設定した。

II 課題に対する具体的な手立て

- ① 食事時間がワクワク楽しい時間となるような保育教諭の援助の在り方
- ② 食べ物に興味関心を持ち、自分から食べてみたくなるような環境の工夫
- ③ 家庭との連携の在り方

III 課題解決に向けた取組（実践）

実践事例1：「楽しみながら、食べ物に興味関心をもつ取り組みの工夫」

《幼児の姿》

- ・ 食べ物に興味関心がなく、自分で給食を食べ進めようとせず、保育教諭が介助すると食べる子が多い。
- ・ 苦手な物は泣いて食べることを拒んだり、離席したりする。

《読み取り》

- ・ 「食べたい」という意欲が少ない。「食べる」ためのステップとして楽しい雰囲気の中で食べ物への興味や関心、親しみの気持ちを育むことが基盤になるのでは？食材との出会いを大切にしていこう。
- ・ 雑穀米や初めて見る食材など、どんな味かわからない不安から食べようとしなないのかな？

「楽しく食べる」ためのステップを意識した援助を行う

1.その食材を知らない → 2.知ってもらおう → 3.興味を持たせる → 4.触れてもらう → 5.食べてもらう

① 声掛けや関わり方の見直し

「一口食べれる？」から「今日はどんなお野菜が入ってるかな？」「なんだかいい匂いがするね」等、結果を求めるのではなく、**食べる前の心の動き**を大切にしていこう。

② 旬の野菜で野菜スタンプ

7月（オクラ・ゴーヤー・きゅうり・ピーマン）



遊びながら、野菜に触れたり匂いを嗅いだりすることで、**興味関心の芽を育む。**

11月（蓮根・さつまいも）



③栽培とクッキング

栽培活動や収穫体験、クッキングを通して、楽しく食に触れていけるような活動の取り組み。



夏野菜でピザ作り

雑穀米で
おにぎり作り

玉ねぎの栽培

二十日ネギの栽培

ヒラヤーチー作り

発表会で“おおきなかぶ”
するにあたり、実際にカブ
の種をまいて、育てる経験

発表会で『おおきなかぶ』

かぶの収穫

試食

《幼児の変容》

- ・泣いたり離席したりと食べることを拒んでいた子が、援助や声かけ、食育活動の工夫を積み重ねてきたことで、給食の時間を心待ちにしたり、自分から食べようとする意欲が見られるようになった。
- ・野菜スタンプを通して野菜に触れる中で、色や形、匂い、大きさの違いに気付いたり、スタンプのできる形を喜んだり、遊びながら野菜に親しんでいた。
- ・栽培活動を通して野菜の生長や収穫を喜んだり、クッキング、試食を通して、自分たちで育てた野菜を楽しい雰囲気の中で食べる事ができた。

《考察》

- ・“食べた” “食べられなかった” の結果を求めるのではなく、自ら食べてみようとする気持ちを育む過程を大事にしてきたことで、泣いて食べることを拒んでいた子も、食べてみようかな…と思う気持ちの育ちにつながったと思われる。
- ・声かけや関わりを見直したことで、食事時間が“頑張る”ものから“楽しい”に変わったのではないかとと思われる。
- ・五感を通して食に触れる活動を行ってきたことで、楽しく食材と出会い、野菜に親しみの気持ちもてるようになった。

実践事例2：「野菜に親しみの気持ちをもってほしいな」

《幼児の姿》

- ・給食時間『すごいぞ やさいーず』の本を見せながら給食に使われているお野菜を紹介すると、「これ食べたなら目がキラキラになるの?」「にんにんにじゃーだ」「今日のお野菜なあに?」等、興味津々の子どもたち。

《読み取り》

- ・野菜に名前をつけたら（ネーミング）、苦手な野菜にも親しみの気持ちが芽生え、自ら食べてみようとするきっかけになるかもしれない。保護者と一緒に野菜の名前を考えてもらおう！

《●環境構成 ◎援助の工夫》

- みんなで名前をつけた“お野菜さん（イラスト）を自由に”を手に取れるよう、ウォールポケットにいれておく。
- 給食時間に「今日はえのきのよきよきちゃん入ってるね」等と、ネーミングのついた野菜を、皿の写真に貼りだして掲示していく。
- ◎“苦手…”と食べようとしない子に、「これは〇〇だよ」とお野菜さんをそばで見せどんな野菜なのかを知らせたり、「私（野菜）どんなにおいがかうかいでみて」など、楽しく会話のやり取りをしながら食べてみようとする気持ちにつなげていけるようにする。

親子で名前を考えている姿



《幼児の変容》

- ・給食を見ながら「味噌汁にほうれん草のひらりんちゃん入ってる」「にんにんじゃー（人参）は毎日入ってるね」等と嬉しそうに知らせる子どもが多く野菜に親しみをもっている姿が見られるようになった。
- ・「この名前、僕（私）が付けたんだよ」と自分で名づけた野菜がある事を喜び、親しみにつながった。
- ・“苦手…”と食べようとしなかった子ども、自分から食べてみようとする姿が増えた。また、おかわりに来る子どもが5月頃は2人程だったのが、12月にはクラスの半数以上がおかわりするようになった。

《考察》

- ・野菜に名前をつけたり、どんな野菜を食べているのか知ること、食材への興味や関心、親しみの気持ちが芽生え、自分から食べてみようとするきっかけになったのではないと思われる。

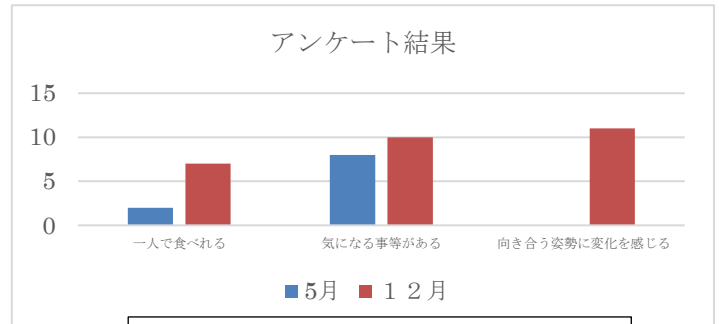
実践事例3：家庭との連携を図るための工夫



食育コーナーの設置



給食参観の実施（5月と9月）



食育アンケートの実施（5月と12月）

《●環境構成 ◎援助の工夫》

- 園での食育の取り組みを、保護者に発信できるように食育コーナーの設置。

（今日の献立やドキュメンテーション、おすすめの絵本や声掛け変換表、野菜等を掲示）

- ◎給食参観を通して、園での食事の様子や保育教諭の関わり・声かけ等の仕方などを観てもらったり、家庭での様子を聞いたりして連携を図る場とする。
- ◎●アンケートをとり、家庭での食の様子を把握する。→集計結果を食育コーナーで掲示。

《考察》

- ・園での取り組みの様子を発信したり、給食参観を行ったりすることで、家庭と連携しながら食育活動を行えたのではないだろうか。また、アンケートを通して入園当初に比べ、子ども達が“食”に対して意欲的に向き合えるようになっている内面の成長が伺えた。

IV 実践の振り返り

《成果》

- ・食育に関する知識を高めるとともに、声かけや関わり、援助の仕方、環境構成等を工夫（結論を急がず、食を通して一人ひとりの子どもとしっかり向き合い心と心を通わせながら丁寧に関わる）してきたことで、自分から“食べてみよう”とする内面の育ちにつながった。

《課題》

- ・家庭との連携を図れるよう努めてきたが、意識して取り組んでくれる家庭と、そうではない家庭と様々であり、連携の難しさを感じた。引き続き、保護者の気持ちに寄り添いながら、情報発信・連携していけるよう努めていく。



おかわりに並ぶ子ども達



V 今後の実践に向けて

- ・楽しく食に触れ、自分から食べてみたいと思えるような環境、保育内容の工夫を継続して行っていくとともに、食育の年間計画を見直していきたい。
- ・子ども達一人ひとりの育ちを家庭と共有しながら、引き続き連携を図るための取り組みを工夫する。

《主な参考文献》・内閣府 文部科学省 厚生労働省 平成30年『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』フレーベル館
・全国国立幼稚園・こども園園長会 幼稚園じほう 特集『わくわく食べる すくすく育つ』
・青春出版社 『偏食の教科書』 藤井葉子（監修） 山口健太

園児の探究心を育むための環境構成と援助の工夫

—身近な環境に関わり、遊びこむ体験を通して—

糸満市立糸満南こども園 保育教諭 玉城 昇太

I テーマ設定の理由

近年、インターネット環境の発達により、直接体験をしなくても知識として様々な情報が飛び込んでくる。しかし、幼児期は自分の生活を離れて知識や技能を一方的に教えられて身につく時期ではなく、自発的活動としての遊びを通して、人と関わる力や思考力、豊かな感性が育つとともに、生涯にわたる学習意欲や態度の基礎となる好奇心や探究心が培われていく。

幼保連携型認定こども園教育・保育要領の第1章第1節の1『幼保連携型認定こども園における教育及び保育の基本』では「園児が自ら安心して身近な環境に主体的に関わり、環境との関わり方や意味に気づき、これらを取り込もうとして、試行錯誤したり、考えたりするようになる幼児期の教育における見方・考え方を生かし、その活動が豊かに展開されるよう環境を整え、園児と共によりよい教育及び保育の環境を創造するように努めるものとする。」と示され、『環境』の領域において「周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもって関わり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う」ことが目的とされている。

本学級は、5歳児21名が在籍している。園児の実態としては、遊びに意欲的だが、製作ではある程度作った後は飾ったままであることが多く、遊びを継続していくという点で課題を感じる。これまでの自身の保育を振り返ると、「これをやりたい」「こうしたらどうなるだろう」「明日も続きがしたい」と思えるような、環境の構成や援助の工夫が十分ではなかったと考える。

そこで、園児一人一人の興味や関心を捉え、園児が自己を発揮しながら遊びに夢中になり、探究心を育てるような環境の構成と援助の工夫を探っていきたいと考え、本テーマを設定した。また、その手立てとして、園児と共に遊びを振り返り、次の活動へ活かせるように様々な記録と対話のツールも活用したい。

II 研究内容

1. 探究心を育むための保育教諭の援助の仕方や環境の構成

(1) 園児の質問に丁寧に答える

→園児の質問に真剣に耳を傾け、丁寧に答えることで、探究心を育む。

(2) 失敗を恐れずに挑戦できる環境をつくる

→失敗しても大丈夫だと伝え、色々なことに挑戦できる環境を整える。

(3) 一緒に楽しむ

→園児と一緒に遊びや発見を楽しんだり、疑問を共有したりすることで、探究心が芽生えるようにする。

(4) 様々な体験をする

→自然に触れたり、地域行事や伝統文化などを見たりすることで、新たな興味や関心が広がるようにする。

2. 様々な記録と対話のツールを活用する

(1) 保育ウェブ

→園児が取り組んでいること、必要なものなどを文字で書いたり、写真やイラストを貼ったりすることで可視化し、考えを整理しやすくする。また、それを使ってクラスでイメージの共有をする。

(2) ドキュメンテーション

→・園児が活動している様子を撮り、いつでも見られるように写真で掲示することで、自分の活動を振り返ったり、友達の活動を知ることによって興味や関心をもてるようにする。
・保護者へ配信し、園児の園生活の様子や成長を知らせる。また、それをもとに会話のきっかけづくりにつなげる。

III 課題解決に向けた取組 (実践)

○実践事例：「旗頭を作ってみよう」

<園児の姿>

・9月後半、地域行事の糸満大綱引きが近づいていて、園児も「今度見に行く」と楽しみにしていたり、中には「お姉ちゃんが出演するから応援に行く」と話す園児もいる。10月の大綱引き翌日、見てきたことを楽しそうに話し「自分たちでも旗頭作ってみよう」と意欲的な姿が見られる。

<保育教諭の願い>

- ・地域行事・伝統文化の『道ズネー（糸満大綱引き）』に興味・関心をもち、調べたり表現したりすることを楽しんでほしい。
- ・友達と思いや考えを伝えあい、イメージを共有して取り組む楽しさを味わってほしい。

園児の姿



自分たちでも旗頭を作りたい
長い棒が必要だね
上にはピンクの花があったよ
箱に紙で作った花を貼って、棒の上につけよう
『かりゆし』って旗もついてた
画用紙に書いて貼ろう

イメージの共有



『かりゆし』ってどうゆう意味？
お家でお父さん、お母さんに聞いてみる
『かりゆし』が『幸せ』っていう意味で『ゆがふう』が『平和』なんだって

興味・関心からの
気づき・発見



棒をもっと長くしたい
ガムテープで棒と棒をくっつけたけど曲がっちゃう なんて？
ガムテープが足りないんだよ もっとくっつけよう
セロハンテープでくっつけてみたら

友達と作り上げていく楽しさ



園児から出たアイディアや見たことを大きな紙に書き出し保育ウェブをつくる。参考になる旗頭の写真や表現している園児の写真を交えながらどんどん広げていく。



お客さんに見てもらいたい！
他のクラスにチケットを配って見に来てもらおう！



お父さん、お母さんにも見ってもらいたい！
発表会があるからそこで見せよう！

他クラスに見てもらうことで自信へ繋がり
発表会で披露することで達成感、満足感を
感じている

保育教諭の★援助○環境構成

○遊びのイメージを膨らませたり、必要な物を作ったり出来るよう、色々な素材や材料、用具を園児が手に取れる場に用意しておく。（段ボール・画用紙・空き箱・テープ・ガムテープなど）

★園児が主体的に活動する姿を見守り認めていき、自分の思いや考えを友達と伝えあえるように必要に応じて仲立ちする。

★探究する面白さを保育教諭も一緒に感じながら、気づきや発見に共感し、遊びを見守っていく。

★友達の取り組みの様子や良さに気づいて伝えようとする姿を認めたり、クラス全体で伝え合える時間を設けたりする。

★上手くいかず困っている時にはその姿を認め、何に困っているかを聞いたり、どうするとよいかを一緒に考えて取り組めるようにする。

○作った物で繰り返し遊べるように、置いておく場所を整えたり、作り足したり直したりできるように必要な材料を用意する。

★友達と考えを出し合う機会を意図的に設けたり、考えたことを実際に取り組んでみたりすることで目的を共有し、協力して取り組む楽しさを感じられるようにする。

○自分たちで遊びを考えたり、必要な物を作ったりできる時間や場を保障して、じっくりと遊びこめるようにする。

★友達と気持ちを合わせて表現する楽しさに共感し“みんなで一緒に活動しよう”と目的をもち意識しながら進めていけるようにする。

<その後の変容>

- ・実際に見た経験や写真、絵本を通して地域文化に興味関心をもち「かりゆしの意味ってなんだろう」と疑問をもって調べてみたり、「旗頭の上には神様がいるから、上のところは地面につけないんだよ」と友達と伝え合ったりする姿が見られるようになった。
- ・友達の取り組んでいる姿を見て「仲間に入れて」「自分もやりたい」と関心をもち加わり、楽しんで友達と一緒に取り組む姿が見られるようになった。
- ・一緒に旗頭に必要なものを作ったり、表現遊びをしたりする中で、相手の考えを聞いたり、自分の思いを伝えたりしながら遊びを進める姿が見られるようになった。

<考察>

- ・地域文化の話題を取り上げ、園児と一緒に保育ウェブを書き込んでいき、学級で見えるところに置くことで、より旗頭や道ズネーなどに興味をもって調べたり、表現するなど関わる姿が増えたのではないかと。
- ・保育ウェブやドキュメンテーションを作成していく中で互いの思いや考え、イメージが共有でき、一緒に遊びを進める楽しさを味わうことができたのではないかと。
- ・園児一人一人が遊びを十分に楽しむことで自信につながり、「お客さんにも見てもらいたい」と異年齢児を招待して見せたり、発表会で保護者にも披露することができ達成感・満足感につながったのではないかと。

IV 実践の振り返り

<成果>

- ・実際に見た経験や写真、絵本、保育ウェブなど複数の情報源が結びつき、園児が「かりゆしの意味って？」「旗頭の上には神様がいる」など、自ら疑問をもち調べようとする姿が見られ、地域文化への興味、関心をもつことができた。
- ・「もっと棒を長くしたい」「どうしたら曲がらないかな」など、試行錯誤しながら解決策を探る姿が見られ、考える力が育った。
- ・保育ウェブをもとに、園児同士が思いや考えを伝え合い、必要なものを作ったり役割を相談したりしながら遊びを進める姿が増えた。また「仲間に入れて」「自分もやりたい」と主体的に関わったりと、友達とイメージを共有しながら協同的に遊びが深まっている様子が見られた。
- ・保育室だけでなく廊下・遊戯室へと活動が広がり、「お客さんに見てほしい」と異年齢児や保育教諭を招待するなど、表現したい気持ちが高まっていった。また、発表会で保護者に披露できたことで、「楽しかった」「今度は外でもやりたい」と園児一人一人が達成感・満足感を味わうことができた。
- ・園児の言葉や気づきを記録と対話のツールを使って可視化することで、遊びが途切れず、翌日以降の活動にもつながった。また、経験していない園児も写真や絵本を通してイメージをもつことができ、活動に入りやすくなった。

<課題>

- ・記録は主に保育教諭と一緒にを行い、園児自身が主体的に書き加えたり見返したりする仕組みがまだ不十分で、記録の主体性をさらに高める必要がある。
- ・棒を長くする工夫など個々の試行錯誤は見られたが、「どうしたらうまくいくか」を他の園児にも関心をもたせ、アイデアを出し合う場を十分に設けることができなかつたので、より時間と場をつくる工夫が必要である。
- ・活動が広がるにつれ、場所の確保や製作物の管理が課題となり、環境構成の継続的な調整が難しかった。
- ・文化・自然など色々なものに触れる機会はあるが、園児一人一人の興味・関心の度合いを把握し、取り組むきっかけづくりを複数用意する工夫が必要である。

V 今後の実践に向けて

- ・園児が自分で写真を貼る、絵を描く、言葉を書き加えるコーナーを設置し、『今日の気づき』『明日やりたいこと』を園児と一緒に書き込む時間を設定することで、記録を“園児が主体的に使うツール”へ発展させる。
- ・探究のプロセスを共有するミニ対話の時間をつくり「どうしてそう思ったの?」「どうしたらうまくいくかな?」など、園児同士が考えを出し合う場を意図的に設定する。また、うまくいった工夫を園児が友達に説明する時間をつくることで学び合いが深まり、探究する気持ちをさらに広げていけるようにする。
- ・製作物を作る場所や置き場など、継続的な環境を維持するためのルールを職員間で共有したり、保育ウェブやドキュメンテーションを職員間でも見える化し、援助の方向性を揃えることで、チームとしての保育の質を向上させる。
- ・地域文化、自然、生き物、生活素材など、様々な興味の入り口を用意し、探究が生まれる環境を整え、園児が主体的に関われるようにする。

<主な参考文献>

- ・内閣府 文部科学省 厚生労働省 平成30年3月 『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』 フレーベル館
- ・妹尾正教/社会福祉法人仁慈保幼園 令和6年4月 『ドキュメンテーション・ポートフォリオ・保育ウェブ・対話 保育の質を支える仁慈保幼園のツールたち』 Gakken

一人一人が安心して自己発揮し、共に育ち合うための環境構成と援助の工夫 —友達と思いや考えを伝え合う遊びや活動を通して—

糸満市立真壁こども園 保育教諭 大城 由利子

I テーマ設定の理由

近年、核家族化や地域とのつながりの変化により子ども同士が関わり合う経験が少なくなっている。また、デジタル機器や個別化された遊び、生活環境の中で一人で完結する遊びに慣れている子どもも多くみられるようになってきている。そのような中で、友達とイメージや思いを共有しながら遊ぶ経験が十分でないまま集団生活を送る姿が見られる。幼保連携型認定こども園教育・保育要領の「人間関係」のねらいでは「身近な人と親しみ、関わりを深め、工夫したり、協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい、愛情や信頼感をもつ」と示されている。さらに「一人一人を生かした集団を形成しながら人と関わる力を育てていくようにすること。その際、集団の生活の中で園児が自己を発揮し、保育教諭や他の園児に認められる体験をし、自分のよさや特徴に気づき、自信をもって行動できるようにすること」と記されている。これらのことから園児の主体性を育むためには、園児が発達に必要な体験をしたり保育教諭や友達との出会いの中で一緒に遊ぶ経験を重ね心のつながりのある温かい集団を育てたりすることが重要であると捉えた。

学級の実態として『「4歳児（6年保育）」計13名』である。気の合う友達と好きな遊びを楽しむ子、保育教諭とのかかわりを喜ぶ子などさまざまな姿がある。また遊びが継続しない、思いが通らないとすぐに泣いたり相手を責めて怒ったりしてトラブルになる姿も見られる。身支度やルールのある遊びでは「おうちの人が準備しないから忘れた」「先生が言ったから」「友達もやってるから」「わからない」など「自分」ではなく、「他者」のせいにする姿が多い。これまでの私自身の保育を振り返ると、トラブルが起きると園児の思いを聞き代弁して園児の思いを先回りして言葉を添えることがあった。自分の気持ちを存分に表出する場や怒りや悲しさなどの気持ちをコントロールする力をつけるための援助の方法を探っていく必要があると感じる。また、遊びが継続しないと環境を再構成はするもののまた遊びが続かないことがあった。考えてみると、そこには環境があるものの園児の興味や関心、気持ちに寄り添う環境の工夫が足りないのではないかと感じる。保育教諭が園児の心に寄り添い、園児のよさや特徴を認めることで安定し、園児同士も互いのよさに気づき、のびのびと自分の思いを表現し自信を持って園生活を送れるようになるのではないかと考える。

そこで本研究では室内外の環境を園児の興味関心に沿って日々整えていくことで遊びの充実を図り、園児と一緒に発見を楽しんだり考えたりしたことを取り入れながら園児が自分らしさを発揮し活動する楽しさを感じていけるような環境の設定や援助の工夫をしていきたいと考えテーマを設定した。

II 課題に対する具体的な手立て

- ① グループやペアで遊べるコーナー、活動を設定することで友達と自然に関わる場を作る。（温かな居場所、集団づくり）
- ② 自分たちで育てた野菜を収穫し、調理方法や食べ方を話し合う場を作る。「野菜の食べ方や調理の仕方をお家の人に聞く」ことで家庭とのつながりをもつ。聞いたことや考えたことを皆に伝え、一人一人の表現が認められ、自己肯定感や自信を持ち自己発揮できる環境作り。
- ③ 園児自身が決めたルールや仲間で話し合ったことを可視化した環境の構成。考えや思いを共有し、協同して園生活を送るための援助や環境構成を行う。

III 課題解決に向けた取り組み



実践事例1「当番活動の始まり ～友達とつながる一歩～」

〈幼児の姿〉

6月、製作が好きなA子が給食のメニュー表を作り「みんなの前で給食時間にメニューを発表したい」と伝えてきた。みんなの前で何度か発表するうちに他児からも「自分もやりたい」「なんでA子だけ？いいなあ」との声が上がる。そこで子どもたちから声を拾い、グループを作って当番活動を開始することになった。

〈保育教諭の願い〉

- ・A子はこれまで遊びや製作など自分の興味のあることには進んで取り組んでいたが、着替えや片付け、集まりといった生活の場面において集団とは別で行動することが多かった。当番活動がA子をきっかけに始まる事で友達とのつながりや集団で過ごす喜びを味わってほしい。
- ・クラスの目標としては、当番活動を通して友達との関わりを広げ、自信や意欲を持って園生活を楽しんでほしい。

環境構成・援助の工夫	グループの名前決め、グループ表作りの様子
<p>☆園児の「やりたい気持ち」を大切にし当番活動を任せることで主体性を引き出すようにした。</p> <p>☆グループ分けの際は性格や関係性を考慮して、関わりが広がるように配慮した。</p> <p>☆A子に対して無理な声かけはせずに友達からの自然な誘いが出る時には「一緒にやると楽しいね」「友達が待っていてくれるよ、嬉しいね」と共感できるように声かけした。</p> <p>☆グループ名を決め、グループ表の作成をすることで友達と活動に取り組む機会を作った。</p> <p>☆グループ活動が楽しめるように園児の声を拾いながら当番の役割を決める話し合いをその都度行っている。</p>	 <p>「名前なにがいい？」</p> <p>「シンカリオンがかっこいい」</p> <p>「いぬがいいなあ」「新幹線が好きだから新幹線にしよう」</p> <p>「先生決まった！」の言葉に尋ねてみると、みんなバラバラ意見のグループも。保育教諭も中に入り、伝えあいの橋渡し。</p>  <p>「〇〇はこっちにかいてね！」</p> <p>「いいよ！じゃあ、ウルトラマンかくね」「かわいい虹も描きたい！」グループで思いを共有しながら一緒に当番表作り。友達の気持ちに耳を傾け、互いに認め合う姿が見られました。</p>

〈幼児の変容〉

- ・グループ活動を始めたことで同じグループのB男やC子が「A子も一緒にテーブルを運ぼう」「当番始めるからおいで」「着替えの時間だから一緒にやろう」と声をかけてくれた。最初は戸惑っていたA子も誘われるとテーブルを用意したり、着替えたり、給食の挨拶をしたりした。活動後には笑顔も見られ、グループの友達とのやりとりが増えていった。その後は「今日はお当番だ！」と自分から動く姿もありグループ活動以外の時間も関わって遊ぶようになり仲間として認め合うようになっていった。

〈考察〉

- ・園児の遊びから始まった活動を取り入れた事で、「役割をもつ」「友達と協力する」姿につながった。
- ・関わりが薄かった子同士が“同じ目標”に向かって関わることで、安心感や仲間意識が育まれた。
- ・「グループのつながり」が自然な関わりのかきかけとなり園児の自信や行動の変化につながった。

実践事例2 「自分たちで育てた野菜をクッキングして食べよう」

〈幼児の姿〉

育てていた二十日ネギが伸び、「みんなで食べよう」「どうやって食べる？」という園児の声が聞かれるようになった。そこで、みんなで話し合いの場を設けたところ「ネギ苦手」「火を通したら食べられるから焼いたらいいんじゃない？」「パフェがいい！ネギパフェにしようよ」「そばにいれたい」「お母さんに聞いてみよう」など一人一人の思いや経験をもとにした意見が出た。家庭で食べたことがある料理として「ヒラヤーチー」が上がり、最終的にはネギパフェとネギ入りヒラヤーチーを作ることになった。

〈保育教諭の願い〉

- ・友達の思いや考えを聞き合いながらみんなで決める経験をしてほしい。
- ・安心できる雰囲気の中で、自分の思いを表現し、受け止め合う経験を重ねてほしい。

〈環境構成・援助の工夫〉

- ・話し合いの場では、イメージがつきやすいように「お家ではどうやって食べているか」「どんな調理方法があるか」など具体的に問いかけ出てきた意見を黒板に書き何がいいかを考えられるようにした。
- ・好きなソースを選択したり、ネギの量を調整できるようにしたりグループで相談しながら進めた。

〈幼児の変容〉

- ・クッキングという共通の楽しみを持つことで友達の意見に耳を傾ける姿が見られるようになった。
- ・「自分たちで育てた」「自分たちで決めた」という経験が満足感や自信につながった。

〈考察〉

- ・育てる活動からクッキングへとつなげることで、園児が主体的に関わる姿が多くみられた。保育教諭が一つの答えに導くのではなく、園児自身が考えたりお家の人に聞いたり、友達の思いを受け止めながら選択肢を広げたことで自分なりの参加の仕方を見つけ、喜んで活動することができた。

実践事例3 「カブトムシを育てたい！」

〈幼児の姿〉

9月、玄関でカブトムシを発見したB男が「クラスで育てたい！」と大興奮で友達や保育教諭に見せていた。他クラスもカブトムシを飼っていたこともあり、「自分たちのカブトムシ」がかわいくて仕方がないB男と子どもたち。友達と一緒に図鑑を開き、カブトムシの種類を調べたり、重さはどれくらいなのか計ってみたりと興味津々に関わっている姿が見られた。

〈保育教諭の願い〉

- ・育て方、疑問を友達と相談し説明する経験を通して考えを伝え合い、共に学び合う姿が育ってほしい。
- ・「カブトムシを育てたい」という思いを大切に、主体的な探求や試行錯誤「調べてみたい」「試したい」「気付いたことを伝えたい」という気持ちが循環する環境をつくりたい。

〈環境構成・援助の工夫〉

- ・安心してかかわるための場を作る。昆虫ケース、土、餌、虫眼鏡などを保育室にコーナー化し、見たい時に見れる、触れられるなどかかわり方も選択できる環境や声かけをする。
- ・対話が生まれるように園児と一緒に園児の気付きを書き込むドキュメンテーションを作成する。
- ・学びを深められるように、図鑑や写真資料、保育教諭が調べたことを園児に伝えるなど自分たちで自発的に調べる場所や時間を確保する。

図鑑を見てお家づくり。「土を入れて、葉っぱも入れよう」「エサはゼリーを入れよう」



自分で確かめたい！
「角は何センチ？」

探究心

〈幼児の変容〉

- ・図鑑や実物を見比べながら「小さい角がここに生えてるんだよ」「雄と雌どっちかな」「赤ちゃん（幼虫）は土の中にいるって、赤ちゃん見つけよう」と問いや気づきが生まれ対話が活発になっている。
- ・「土を替えたい」「エサをあげたい」「枝も葉っぱもいれようよ」とそれぞれが役割を持つことで、関わりが少なかった子どもも主体的に関わる姿が増えた。

〈考察〉

- ・園児の興味関心を起点に環境を構成したことで、一人一人が主体的にかかわることができたのではないかと感じる。観察コーナーやお世話をするための場所など活動に参加する入り口が複数ある環境を整えたことで友達に聞く、教える、伝えるといった対話が自然と起こり、共に育つ姿の土台となった。保護者にもドキュメンテーションを通して園児の興味関心や活動を通じた育ちを発信しているが十分に伝わっているかはわからない。今後も継続的に遊びや生活からの育ちと学び、成長を共有していけるような発信に加え、日々の姿を知らせ家庭と園がつながり合う保育をすすめていきたい。

IV 実践の振り返り

- ・話し合いの場を意図的に設けたことで一人一人がクラスの一員として認められているという安心感が育ち、共に考え、共に決める経験が園児の主体性につながっていった。
- ・当番活動、クッキング、自然や生き物の世話といった体験を通して、「こうしたい」「それは違うと思う」「じゃあ、こうしてみよう」と思いを言葉で表す姿が増えた。様々な経験をしたことで、次は何を育ててクッキングするか、虫を見つけると自分たちで調べて飼育する用意や相談をするようになった。
- ・活動に消極的になりやすい子や苦手意識を持つ子への関わり方、思いはあるものの言葉で表現するのが難しい子への援助の在り方などの工夫が必要。また、全体での話し合いでは積極的に意見を出す子の声为中心になりやすく、思いをうちに抱えがちな子の気持ちをどのように引き出していくかが課題である。

V 今後の実践に向けて

少人数やペアでの話し合いを増やし安心して思いを出せる場を作ったり、言葉での表現が難しい子には絵や写真、実物を使った援助を取り入れてみたりする。生活や遊びの中で話し合いや選択の場をさらに意識的に取り入れたり、記録やドキュメンテーションを活用し、育ちの過程を園児や保護者に可視化していく。今後も一人一人の思いを大切にしながら友達と関わり、共に育ちあう保育を積み重ねていきたい。

〈主な参考文献〉

内閣府・文部科学省・厚生労働省 2018 『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』 フレーベル館
文京区立お茶の水女子大学こども園 2020 『思いをつなぐ 保育の環境構成 4・5歳児クラス編』 中央法規出版

園児の発想を膨らませ「つながる遊び」の保育実践の工夫 —ドキュメンテーションの活用を通して—

糸満市立糸満南こども園 保育教諭 久高 里佳子

I テーマ設定の理由

幼保連携型認定こども園教育・保育要領総則には、「活動を充実することは(～中略～)園児が活動に没頭する中で試行を巡らし、心を動かしながら豊かな体験をしていくこと」、思考力の芽生えにおいて「園児が不思議さや面白さを感じ、こうしてみたいという願いを持つことにより、新しい考えが生み出され、遊びが広がっていくことを踏まえる。(～中略～)園児が他の園児との意見や考えの違いに気付き、物事をいろいろな面から考えられるようにすることやその良さを感じられるようにしていくことが大切」であると示されている。園児の「遊び込む姿」「夢中になって遊ぶ姿」は、心豊かな体験につながる。そのためには自分の発想を試したり、他者の考えを聞いたり、協同したりしながら遊びや活動に没頭し、充実感や満足感を味わえるような保育環境が必要であると考えます。

本学級は「4歳児(3年保育)」計11名が在籍している。園児の実態として、興味のある遊びに主体的かつ意欲的に取り組み、その中で友達と関わりながら遊びを楽しむ姿が見られる。一方で、遊びの継続や工夫及び展開に課題を感じる。その要因として、少人数であることや特定の友達と遊ぶ姿が多く、豊かな発想や気付きにつながりにくい為だと考える。加えて私自身、園児理解に基づいた遊びの振り返りをうまく活用できず、園児の気付きや思い、考えなどを活かした援助に課題があることも要因の一つと考える。

そこで、本研究ではドキュメンテーションを活用し、園児の発想を広げながら「遊びがつながる」「友達とつながる」「明日へつながる」をキーワードに保育実践研究を行っていきたいと考え、このテーマを設定した。

II 課題に対する具体的な手立て

- 1 園児の様子に応じて、遊びや経験がつながるような活動を選ぶ。
- 2 園児の様子や気づき、発見などを記録する。
- 3 写真や動画を用いて園児との振り返りを行う。
- 4 園児に向けたドキュメンテーションを作成する。



振り返り時に使用した写真や園児の言葉を記入し作成。

III 課題解決に向けた取組 (実践)

1 実践事例

【園児の実態】

- ・友達との関わりが深まり、遊びの中で自分の考えや思いを伝えたり、相手の思いを受け止めたりし、相談しながら自分たちで遊びを進める姿が見られる。
- ・振り返りの際、友達遊びに興味をもって話を聞いているが、後日その遊びに興味を示す姿は少なく、特定の友達といつもの遊びをしていることが多い。
- ・クラス全体としてのつながりや、協力することへの意識の弱さを感じる。

(1) パラ・バルーン遊びを通して (9月～)

園児の姿	◆環境構成 ◎保育教諭の援助
《パラ・バルーンに興味をもつ》 ・バルーンが動く様子を感じたり、表現する方法を知ること で楽しむ姿が見られ、繰り返し試している。	◎園児がパラ・バルーンに興味をもち、楽しんで取り組めるような技から繰り返し取り組めるようにする。

- ・少しずつクラスで息を合わせて取り組む技も、保育教諭の合図を聞きながら、隣の友達と顔を見合わせたり「こうするんだよ」と教えたりして楽しんでいる。
- ・技が増えていくと振り返りの場で、好きな技を発表する姿が見られたり、「運動会で保護者に見せたい」という思いが出てきたりしている。

《運動会に向けて》

- ・自分たちの演技を見て、力を合わせて表現している姿に気づき、感じたことを思い思いに伝えている。そのなかで、「花火」のボールが飛んでいないことに気づき理由をみんなまで考え「動きが違う（息が合っていない）」ことに気づき、みんなで成功する方法を考える。
- ・「みんなで動きを合わせる」「先生の合図でバルーンを降ろす」と、息を合わせることの大切さに気づき始めている。

《次の日から》

- ・「花火」を意識して息を合わせようとする姿から、すべての表現において、クラス全体や友達を意識し、息を合わせて表現しようとする姿が増えている。

◎少しずつ新しい技の難易度をあげること
で、おもしろさと力を合わせることの大切さを感じられるようにする。

◆◎振り返りの場で、運動会で見せたい技を考える場を設ける。園児の思いを受け止めながら、音楽に合わせた表現を構成していく。

◆◎どのようにバルーンを表現しているか実感することができるように、演技中の写真や動画を撮影し、振り返りの場で見る（※ドキュメンテーション作成）。



◎一人一人の思いを受け止めながら、どうしたら技が成功するか、園児の考えをまとめていく。



(2) 遠足に行こう！（10月～）

園児の姿	◆環境構成 ◎保育教諭の援助
<p>《イメージしたことを表現する》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・塗りに興味をもち、各々弁当作り遊びに取り組む。 A児「弁当カバンに入りたい」 ・カバンの作り方を考えたり、友達と相談するが、方法が思いつかず難しそうにしている。 ・保育教諭のカバンを見て、必要な材料を選び友達と一緒に作り進めている。 B児（カバンに弁当を入れ）「どこか行きたい」 A児「どこ行く？」 ・友達同士で相談し、遊戯室へ行くことを決める。そこで遠足ごっこが始まった。 	<p>◆◎月末にある遠足に期待感もてるように、弁当の塗り絵を用意する。</p> <p>◎保育教諭がカバンをつくり、「先生はこんなカバン作ってみた」と提示してみる。</p> <p>◎遊戯室とクラスを行き来しながら、他児がしている遊びに興味を持てるように、「遊戯室に遠足ごっこを見てくるね」などさりげなく知らせる言葉かけをする。</p> <p>まずは遊んでから、お弁当ごっこしよう！</p>
<p>《振り返りの場》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保育教諭が提示する写真を見ながら、思ったことや感じたことを発表している。 A児「明日もやる。明日はC児も一緒に行く」 ・他児も写真を見たり話を聞きながら興味をもっている。 D児「明日、弁当作って一緒に行きたい」 	<p>◆◎今日の活動のドキュメンテーションを作成し、掲示する。</p> <p>◆振り返りから、翌日の遊びで必要になりそうな教材を用意する。</p>
<p>《次の日（雨天）》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・遠足ごっこに必要なものを友達と一緒に準備する。 D児「何からするの？何が必要？」 A児「弁当が必要だよ。あとカバンも！水筒も持ってきて」 	<p>◎友達同士で準備を進める姿を見守りながら、必要に応じて手助けする。</p>
<p>《振り返りの場》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・遠足ごっこの振り返りの中で、「遠足も雨だったらどうするの？」と、遠足の日の天候に不安に感じている。 <p>《てるてるぼうず作ろう！（雨天）》</p>	<p>◎遊びの様子や振り返り時の園児の話から、絵本『あした えんそくだから』の読み聞かせをする。</p> <p>◎園児の思いを受け止め、必要な材料を園</p>



<ul style="list-style-type: none"> ・雨天と遠足への期待感から E児「先生、てるてるぼうず作ったらいいよ。俺、作り方わかるから教えるよ（昨年度の経験）」 ・保育教諭に教えながら作り始める。 F児「俺も作りたい。どんなして作るの？」 E児「いいよ。作り方教えるよ」 ・友達同士作り方を教えたり、工夫しながら作り進める。 ・友達がてるてるぼうずを室内の窓に貼っている姿を見て、 E児「ここだと空に見えないよ。だから雨やまない」 G児「テラスの窓は！？空から見えるんじゃない！」 ・考えを伝え合い一緒に納得のいく場所を探し、飾っている。 《振り返りの場》 ・写真を見ながら思い思いにてるてるぼうずについて話す。 ・どうしたら晴れるかについて、様々な考えが出る。 H児「チョコレートあげるから、晴れにしてくださいって言わないと！」 ・H児の一言から、自分のてるてるぼうずにお願いしている。 	<p>児と一緒に集める。</p> <p>◆材料を手に取りやすい場所に配置する。</p> <p>◎園児の作る姿を見守りながら、途中で必要と感じた材料を用意したり、苦戦している園児の手助けをしたりする。</p> <p>◎てるてるぼうずを飾る場所を考える際、互いの思いがうまく伝わっていない場面では仲立ちをする。</p> <p>F児：どうやって作るの？</p> <p>E児：まずは、材料を準備しよう。</p> <p>空から見える場所に飾ろうと、どこがいいか2人で考え中。</p>  
---	---

IV 実践の振り返り

1 成果

振り返りの場に視覚教材（写真や動画）を用いることで、友達の姿や遊びへ関心が広がり、より一緒に楽しむ姿が見られるようになってきている。遊びの中で、自分の思いや考えを伝えながら、互いに発想やイメージを共有することで、遊びが盛り上がり、継続したり、次の遊びへつながったりし、遊びの充実へとつながっている。また、クラス全体の「仲間」としての意識が育まれている。加えて、振り返りの場で使用した視覚教材や園児の言葉を、そのままドキュメンテーションとして可視化していくことで、園児の姿の読み取りや自身の保育の振り返りができ、教材準備や環境の再構成へ見通しをもって取り組むことができた。

2 課題

振り返りやドキュメンテーション作成時、一日で取り組んでいた全ての遊びの写真を提示した為、一つ一つの遊びの読み取りや気づきが弱かったと感じる。また、写真を撮ることに集中してしまうこともあり、園児の遊びに共感したり、一緒に夢中になって楽しむことが難しかった。

V 今後の実践に向けて

園児と一緒に遊びを楽しむ中で、「今日はこの話題を取り上げたい」「この活動時の、ここでの気持ちを共有したい」など、保育教諭側からの視点も持ち、園児と保育教諭の双方主体での振り返りを行うことで、写真や動画もポイントを絞って撮れるのではないかなと思う。またドキュメンテーションを活用する遊びを選び、紙媒体での写真を用い、振り返りを行いながら園児と一緒にドキュメンテーションを作成していくことで、園児がより遊びの過程や展開の仕方を実感し、これまでの経験から様々なイメージを膨らませ、互いの考えや思いを伝え合っていくことで、自分たちで遊びを創造していく力へつながると考える。こうした姿が継続していくことで、「明日」だけでなく、『日々つながる』保育への実践になると感じた。

〈主な参考文献〉

- 文部科学省 平成30年3月 『幼保連携型認定こども園 教育・保育要領解説』 フレーベル館
- 佐伯絵美 令和7年10月 『月間保育とカリキュラム 子どもの姿 振り返りノート&ドキュメンテーションの作り方BOOK』 ひかりのくに株式会社

一人一人が安心して自己発揮できる環境の構成と援助の工夫

～保育教諭や友達との関わりを通して～

糸満市立喜屋武こども園 保育教諭 名嘉山 一未

I テーマ設定の理由

乳幼児期は、人格形成の基礎を培う重要な時期であり、この時期に周囲の大人が安心できる関係を築き、自分の思いや考えが表現できる経験を重ねることで、園児の中に自己発揮の芽が育ち、自信や自己肯定感のある人格の基盤が形成されていくと考える。

しかし、近年少子高齢化や核家族化、情報化社会の発展、価値観の多様化等、園児を取り巻く環境が大きく変化し、様々なひと・もの・ことに触れる「体験」や「関わり」が少なくなってきた。

幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説「人間関係」の内容の取扱いにおいて、「集団の生活の中で、園児が自己を発揮し、保育教諭等や他の園児に認められる体験をし、自分のよさや特徴に気付き、自信をもって行動できるようにすること」と示されている。園児が安心して自分を表現できる環境の中で、自分の思いを言葉にしたり、遊びの中で工夫したりする経験を通して、自分の思いや考えを相手に伝え合う等の自己発揮ができるように援助していくことが求められている。

本学級は、5歳児13名が在籍し、優しく互いに思いやる様子が見られるが、自分の考えを伝えたり、一人で行動することには自信がない姿が見られる。複数年、同じ友達と少人数での園生活を過ごしていることもあり、言葉にしなくても周りの子が気付いて動いたり、一人で最後まで自分の力でやり遂げる経験が少なかったりすることも要因の1つではないかと考える。

そこで本研究では、一人一人の思いに寄り添いながら言葉を引き出したり、多くの人と関わり、様々な活動を体験していきながら、自己を発揮できる環境の構成と援助の工夫を研究したいと考え、本テーマを設定した。

II 課題に対する具体的な手立て

- 1 安心して園生活が送れるような環境の構成と援助の工夫をする。
 - ・一人一人の思いに寄り添い、共感しながら信頼関係を築いていく。
 - ・好きな遊びを通して、思いや考えを表現できるようにする。
- 2 外部講師を招聘して公開保育を行い、保育実践・振り返りをする。
 - ・様々な視点から園児の姿を読み取り、幼児理解を深めていく。
- 3 一人一人のポートフォリオを作成し、友達や保育教諭、保護者と活動を振り返る。
 - ・自分自身や友達の良さ、頑張っていることを感じ、次の活動への意欲や自信がもてるようにする。

III 課題解決に向けた取組（実践）

実践事例1 「やりたい!」「一緒にやろう!」 ～段ボールでの家作りを通して～（4～7月）

〈園児の姿〉

- ・入園、進級した4月、表情が固く、恥ずかしさで自分の思いを担任に言えずにいることがある。
- ・製作することを楽しむ子が多く、倉庫にあった大きな段ボールを見て「使いたい!」と話し、クラスで家作りが始まった。「屋根作りたい」「窓は?」「ここ切ってドアにしよう」等とイメージを広げながら作ることを楽しんでいる。

〈保育教諭の願い〉

- ・新しい環境に慣れ、安心して園生活を過ごせるようになってほしい。
- ・保育教諭や友達と作ることを楽しみながら、自分のイメージややりたいことを表現してほしい。

〈環境の構成と保育教諭の援助〉

- ・イメージしたものを作って楽しめるように必要な素材を一緒に考えて用意したり、「カーテンみたいでいいね」「電話と充電するところも作ったんだね。いい考えだね」と一人一人の考えを認めたりしながら、遊びを一緒に楽しんでいった。

- ・帰りの会等での振り返りを通して、工夫して作った物や場所を発表したり、家の作り方をみんなで考えたりする場を作り、自分の思いを伝える喜びや嬉しさを味わい、受け止めてもらう安心感がもてるようにしていった。



テレビ、電話、充電器、窓、ドア、家の模様作り



屋根作り（段ボール、新聞紙、カラーポリ袋）

〈園児の変容〉

- ・「先生、見て！トイレも作った！」「窓作りたから切ってください」と自分の思いや考えを保育教諭に伝える姿が増えていった。
- ・帰りの会での振り返り時、屋根が崩れて困っていることを投げかけると、他の遊びをしていた子も「棒つけたら？」「椅子置いたら倒れないよ」と作り方を一緒に考え、翌日一緒に作ったり、「できた」と喜びを共有しながら一緒に遊ぶ姿が見られた。
- ・ソフトブロックで秘密基地、廃材を組み合わせて猫カフェ等、段ボールで作った家のように屋根や出入口を作って楽しむ姿があり、遊びが広がっていった。

〈考察〉

- ・作った家を置く場所を確保し、いつでも遊べる環境を整えたことで、自分の居場所があるという安心感につながり、また自分の作った物がそのままあることで「～やりたい」「続きしよう」と行動に表れるようになったと考える。
- ・作る楽しさを味わったり、自分の考えを認めてもらえたりしたことで、自分の思いを伝えることが多くなったと考える。
- ・自分のイメージしたものを作ろうと素材を選択し、表現する経験を積み重ねることで、安心して自己発揮する力を育んでいったと考える。

実践事例2 「楽しかった！」「出来るようになったよ！」（9～11月）

〈園児の姿〉

- ・友達と一緒にいることで安心して活動に取り組む姿があり、「何しているの？」「一緒にやってもいい？」と友達と関わりながら遊ぶことを楽しんでいる。
- ・園庭では、縄跳びやフラフープ、サッカーやコロコロドッジボールを楽しんでいる。親子遊具作りで作った竹馬に誘うと、興味をもつ姿はあるものの「難しい」「足痛いから終わる」とすぐに諦めたり、「できないからやらない」と自信のなさから見ているだけの姿がある。

〈保育教諭の願い〉

- ・友達と一緒に取り組む中で、繰り返し試したり、挑戦したりする楽しさを味わってほしい。
- ・楽しかったことや頑張ったことを振り返り、満足感や達成感を味わう中で、次の活動へ自信をもってほしい。

〈環境の構成・保育教諭の援助〉

- ・夢中になったり、挑戦したりした活動や行事の後に、写真と園児の思いをいれたポートフォリオを作成する。作成後は玄関に掲示し、担任以外の職員や保護者と活動の楽しさを振り返ったり、共有できるようにする。
- ・気持ちに寄り添う言葉掛けをしたり、小さな成功を一緒に喜んだりし、挑戦する姿を認めていく。
- ・親子で作った竹馬を園で保管したり、補助足をつけた竹馬を用意したりし、挑戦する意欲につながるようにする。



〈園児の変容〉

- ・ポートフォリオの写真を見て、遊びの中で「これは～だったよ」教え合ったり、「次は～やりたい」と話したりする姿が増えていった。
- ・活動を振り返ると「楽しかった」だけでなく、その活動の中で感じたこと、どのように試したら出来たのか等を具体的に伝えるようになってきた。
- ・竹馬に挑戦する姿が増え、「今日は滑り台のところまで歩いた」「次は自分でのる」と自分なりの目標をもつようになった。また、「前見て歩くんだよ」と教え合ったり、「頑張れ」「できたね」と励まし合ったりする姿が見られた。



〈考察〉

- ・ポートフォリオを基にした保育教諭の言葉掛けにより、園児の思いを認める関わりが深まり、安心して自己発揮できる環境作りにつながったと考える。
- ・保育教諭や友達、保護者と楽しさを共有したり、頑張りを認めてもらえることで自信につながったと考える。
- ・園児が自分の取り組みや思いを言葉で説明したり、周りの人と共有したりする機会が増え、自己表現が活発になったと考える。

IV 実践の振り返り

1 成果

- ・生活や遊びの中で、園児の思いを受け止め、共感的に関わることで、自分の思いや考えを言葉や行動で表現しようとする姿が増えた。また、友達の考えを聞こうとする姿が増え、相手の思いを認め合う関係性の育ちが見られた。
- ・製作の過程では、イメージしたものを形にしようと試行錯誤を重ね、思うようにいかない場面でも方法を考え直したり、保育教諭や友達に伝えたりする姿が見られた。自分の考えを伝え、園児なりに援助を求める経験は、自己発揮を支える大切な機会となった。
- ・園児自身がポートフォリオを振り返ることで、「できたこと」や「がんばったこと」に気付き、自己肯定感や自己発揮につながる姿が見られた。保育教諭にとっても、園児の興味・関心や成長を再確認する機会となり、日々の保育の見直しや次の援助につなげることが出来た。

2 課題

- ・少人数の友達同士では思いを伝え合う姿は多く見られるが、初めての場や人前での発表になると緊張が強くなり、思いを言葉にすることが難しい。
- ・自己発揮の仕方や程度には個人差があり、積極的に表現できる子と、思いを内にためやすい子との差がある。自己発揮が苦手な子に対して、どのような記録や振り返りの仕方がよいのかについて、継続的に検討していく必要がある。

V 今後の実践に向けて

- ・遊びの中で試したり、工夫したりする姿、そして結果よりも過程や挑戦を認め、「やってみよう」「自分なりに表現してみよう」とする気持ちを大切にしていく。
- ・「認められた」「受け止めてもらえた」という経験を積み重ねる中で自己発揮を育てていけるよう、今後も一人一人の思いや表現を大切にしながら、安心して自分を出せる環境の構成と援助の工夫をしていく。

〈主な参考文献〉

- ・内閣府・文部科学省・厚生労働省 平成30年 『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』 フレーベル館
- ・幼保連携型 認定こども園 教育・保育要領ハンドブック 2017年告示板 学研

友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わうための環境の構成と援助の工夫

～自然物との関わりや活動の充実を通して～

糸満市立喜屋武こども園 保育教諭 垣花 類

I テーマ設定の理由

近年、共働き家庭の増加や少子化、地域での遊び場の変化等、幼児を取り巻く環境は急速に変化している。保育施設以外で「平日、一緒に遊ぶことが多い人」についてのアンケート結果では、「母親」が86.0%、「友達」が27.3%となり、友達と一緒に遊ぶ割合が以前よりも大幅に減っていることが分かっている。（ベネッセ教育総合研究所「幼児の生活アンケート」）さらに、インターネットやゲームに触れる機会が多くなっていることから、園児同士の会話もそれらに関する話題が多いように感じたり、自分の世界に入り込んで遊んだりする姿が多く見られる。

幼保連携型認定こども園教育・保育要領人間関係内容(8)では、「園生活の中で、園児は他の園児と一緒に楽しく遊んだり活動することを通して、互いのよさや特性に気付き、友達関係を形成しながら、次第に人間関係が広がり深まっていく。」と示されており、集団生活の中で、園児一人一人が十分に自己発揮しながら友達と関わり、様々な出来事を通して一緒に遊ぶ楽しさを十分に味わうことができるように援助していくことが求められている。

本学級は、4歳児、10名が在籍している。園児の実態としては、いろいろな遊びに興味・関心をもち、自分のやりたい遊びを楽しんでいるが、個々で遊んだり、平行遊びが多く見られる。また、すぐに新しい遊びに飛びつくものの、なかなか遊びが継続、発展せず、次々と遊びが移っていく姿も見られる。

そこで、園児がどんなことに心を動かし、興味・関心をもって遊びを楽しんでいるかを見取り、園児が遊び込めるような環境の構成と、友達と一緒に遊ぶ楽しさが味わえるような援助の工夫を研究したいと考え、本テーマを設定した。

II 課題に対する具体的な手立て

- 1 園児の遊びを読み取り、幼児理解を深める。
- 2 園児が生み出す活動の展開に合わせて、環境の再構成と保育教諭の援助の工夫について探る。
- 3 保育実践を行い、振り返りをする。（外部講師を招聘した公開保育）

III 課題解決に向けた取組（実践）

実践事例1 虫捕り遊び ～バッタの世話を通して～

〈園児の姿〉

- ・5月頃から、園庭では虫の幼虫や蝶をよく見かけるようになり、「早く、お外に遊びに行こう！」「昨日と同じ蝶々が飛んでいる！」等、わくわくした表情で、保育教諭に知らせる姿が見られる。また、園庭では、虫取り網を持って蝶を追いかけて、初めてバッタを捕まえると周りの人に見せて喜び、見たり触れたりしていた。

〈保育教諭の願い〉

- ・自然と触れ合う体験を通して、生き物に親しみ、気付きや発見したことを友達や保育教諭と共有しながら、思う存分に関わって遊ぶ楽しさを感じてほしい。
- ・自分の思いや考えを保育教諭や友達に受け止められる温かさや喜びを味わってほしい。

〈環境構成・援助の工夫〉

捕まえたバッタを
広いお家に引越
そう！



バッタって跳ぶの!?

羽根があるよ!



お洋服脱いでいる!

バッタが眠っている...



- ・友達と一緒に観察出来るように、大きめの飼育ケースや図鑑、バッタの成長過程の写真を掲示して観察コーナーを設けた。
- ・園児の気付きや発見を受け止め、保育教諭も一緒に驚いたりして、ワクワクした気持ちで世話ができるようにしていった。また、友達と伝え合う場を設け共有することで、興味や関心が深まるようにした。
- ・園児の問いや予想に保育教諭も頷き、生き物の気持ちを考えようとする姿を大切にしていた。

〈変容〉

- ・保育教諭の側にいることが多かった園児も、登園してすぐにバッタの様子を見て楽しむ姿が見られるようになった。また、友達と一緒に自然のポケット図鑑をもって、園庭にいる生き物と照らし合わせてみたり、気付きや発見したことを友達や保育教諭に話す姿が見られるようになった。
- ・バッタの死を目の当たりにしたことで、クラスのみならず悲しい気持ちを共有し、世話の方法や命について、自分の考えを伝えたり、友達の思いも聞こうとする姿が見られるようになってきた。

〈考察〉

- ・バッタの世話を通して、「ワクワク、ドキドキ」する気持ちを感じたり、友達や保育教諭と伝え合い共感してもらうことで、さらに興味、関心が高まり、自分の思いをのびのびと表現する姿が見られるようになったのではないかと。さらに、自分の思いが伝わる嬉しさを味わうことで、友達を遊びに誘う姿も増え、一緒に遊ぶ楽しさを感じることができるようになってきたのではないかと。
- ・死んでしまったバッタを、眠っているかもしれないと思い、世話を続ける子どもの姿に寄り添うことで、バッタの色の変化に気付き、死を目の当たりすることとなった。その出来事が、命について考えるきっかけとなり、次からは、逃がそうとするなど、いたわる姿がみられるようになってきたのではないかと。

実践事例2 泥んこ遊び ～友達との関わりを広げて～

〈園児の姿〉

- ・梅雨の時期に入り、園庭には大きな水たまりが出来る日が多く見られた。子ども達はすぐに裸足になり、水たまりをそっと歩くと、「ぬるっとする！」と友達と顔を合わせて笑顔になったり、足の指の間から空気が抜ける感覚を不思議に感じたり、みんなの足跡でいっぱいになった園庭を見て、「足の迷路だ！」と言葉にする姿が見られた。また、バケツ等の容器に泥を入れると、「ココアです！」「チョコレート屋さんです！」と言い、ごっこ遊びへ発展していった。

〈保育教諭の願い〉

- ・身近な自然を感じながら、友達とイメージを共有したり、イメージを広げながら、友達と一緒に遊ぶことを楽しんでほしい。
- ・自分の思いを伝えたり、相手の思いを受け止めながら遊びを進めてほしい。

〈環境構成・援助の工夫〉



- ・子どもの遊びを読み取りながら、日陰にテーブルを準備したり、道具を徐々に揃えてイメージが広がるようにしていった。
- ・翌日も遊びの続きができるように、作ったものを飾れるようなコーナーを設けた。

〈変容〉

- ・泥んこ遊びを繰り返す中で、少しずつ遊びが変化していき、自分なりにイメージをもちながら遊びを楽しむ姿が見られた。
- ・友達とイメージを共有することで、さらに遊びが広がる様子が見られた。また、普段関わりの少ない友達同士でも、活発に言葉を交わしたり、一緒に遊ぶ姿が見られた。その後の生活でも、友達との関わりが増えている。

〈考察〉

- ・泥んこ遊びを楽しむ園児の姿に合わせながら、テーブルや道具等を用意したことで、イメージを広げながら遊びが継続していったのではないかと。
- ・部屋の近くに作ったものをそのまま置けるコーナーを設けたことで、翌日も遊びの続きができ、さらにご

っこ遊びが盛り上がったのではないかと。また、一緒に遊ぶ園児が増えたりと、周りへの刺激にもなり、友達との関わりの広がりが見られるようになったのではないかと。

実践事例3 リレーごっこ ～友達との繋がりを感じて～

〈園児の姿〉

- ・5歳児が園庭でリレーごっこをする様子を見て、一緒に走り出す姿が見られた。また、バトンを用意すると、子ども達は嬉しそうにバトンを手に走り出し、「はい！〇〇さん！」と友達に渡していた。

〈保育教諭の願い〉

- ・リレーごっこを通して、友達との繋がりを感じたり、関係が深まるような経験をしてほしい。

〈環境構成・援助の工夫〉

- ・「1本のバトンで走りたい！」という子ども達の思いや願いを尊重し、1本のバトンで楽しむリレーごっこを存分に楽しめるように、時間や場を保障した。
- ・自分達ですぐに遊び始められるように、手の取りやすい場所にバトンやビブス、音楽を用意した。



〈変容〉

- ・「楽しい！」「もう一回！」と走ることに気持ち良さや心地よさを感じ、繰り返し楽しむ姿が見られた。
- ・「ぱんだ組はみんな仲間だよ！」等の声もあり、1本のバトンで友達との繋がりを感じていた。また、存分に楽しんだ後は、自分達で男の子チームと女の子チームの2チームに分かれる等、遊びの展開も見られた。

〈考察〉

- ・「1本のバトンで走りたい！」という子ども達の思いや願いを尊重し、楽しむことで、次第に友達の存在の大きさに気付き、みんなで誘い合って遊び始める姿が多く見られるようになったのではないかと。
- ・今楽しんでいる遊びを存分に楽しむことで、次は2チーム（男の子チーム、女の子チーム）に分かれてリレーごっこをする等、遊びの展開が見られたのではないかと。また、女の子チームが先に終えた事を、男の子チームは不思議に思い、この経験が数の違いに気付く出来事となり、次からは人数を合わせようと意識するようになったのではないかと。

IV 実践の振り返り

- ・幼児理解に努め、一人一人の個性を温かく受け止めたり、それぞれの好きな遊びを大事にしながら、信頼関係を築いていったことで、園児が自己を発揮しながら活動できるようになった。
- ・研修での公開保育や、職員での保育カンファレンスの振り返り、週案会等での話し合いを行うことで、様々な視点での子ども達の気付きもあり、自身の保育を見つめ直すことができた。また、環境の再構成や援助の工夫を探ることもでき、園児のもっとやりたいを引き出せるような環境づくりができた。
- ・一人一人の好きが様々な経験へと繋がり、次第に周りの友達にも目が向くようになった。また、友達との関わりが深まり、互いの良さを認め合える関係ができたことで、思いや考えを受け入れながら、遊びが深まり、友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わうことができた。

V 今後の実践に向けて

- ・毎日保育する中で、この関わり方で良かったのか等、悩むこともあったが、環境の再構成や自身の保育を振り返ることで、日々の子どもの援助に繋がることを理解した。今後も、保育教諭も一緒に遊びながらワクワクし、子どもの「やりたい」を引き出したり、子どもの心が動いた瞬間を見逃さないようにして、子どもと共に保育を楽しみたい。

〈主な参考文献〉

- ・内閣府・文部科学省・厚生労働省 平成30年 『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』 フレーベル館

一人一人が安心して自己発揮し、共に育ちあう環境構成と援助の工夫

～心動かす体験や友達や身近な人との関わりを通して～

糸満市立真壁こども園 保育教諭 安里 健志

I 研究テーマの設定理由

幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説の「人間関係」のねらい(2)では「身近な人と親しみ、関わりを深め、工夫したり、協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい、愛情や信頼感を持つ。」と記されている。こども園での生活の中では、何より保育教諭との信頼関係を築くことが大切である。また、園児は他の園児や保育教諭と触れ合う中で自分の感情や意志を表現し、自己の存在感や他の人々とともに活動する楽しさを味わい、気の合う友達をみつけ目的を共有するようになる。ときには、園児同士の自己主張のぶつかり合いによる葛藤など関わりを深める体験を通して、互いに理解し合う経験やより良いものにするための工夫なども見られるようになる。保育教諭はそうした経験ができるような環境構成や丁寧な関わりが大切であると考えた。

今年度の5歳児クラス(6年保育)は、18名のクラスである。ほとんどの園児が進級児のため進級当初から友達と一緒に簡単なルールのある遊びや体を動かす遊びを楽しむ園児が多く積極的に関わる姿が見られる。一方で自分の思いばかりを主張し、互いの思いや考えに気づけず遊びや活動が止まってしまうことがある。そこで、園児が心動かす体験を通して意見を伝え合い協力し共に育ちあえるような環境構成と援助の工夫の研究を進めていく。

II 研究の内容

1 心動かす体験とは

遊びを通しての心動かす体験とは、園児同士が遊びを通して、喜びや驚き、感動を覚え、心が豊かになる体験のことである。遊びは、園児同士の好奇心や探求心を刺激し、創造力や思考力をはぐくむだけでなく、自己肯定感や社会性を高めるなど、心身の発達に重要な役割を果たしていく。

2 共に育ちあう環境構成と援助の工夫とは

(1) 一人一人が安心して生活できるような環境構成

園児が明るく伸び伸びと行動できるのは、精神的に安定した状態の時です。この状態が主体的に環境にかかわるようになる。そのためには、自分(園児)を認めてくれる大人や、支えてくれる友達との信頼関係を築いていくことが重要である。

(2) 他の園児と共通の目的が実現する喜びを味わう

園児同士が協同して遊ぶ中でそれぞれのアイディアを出してきます。一緒に遊ぶ中で試行錯誤したり、みんなで話し合ったりする。成功したり、失敗することを通して、様々な心を動かす出来事を友達と共有し、相手の感情にも気づいていけるようになる。園児同士が互いに関わりを深めることで一緒に工夫したり、時には気持ちに折り合いをつけたりする大切さに気付いていけるようにしていく。

3 課題に関する具体的な手立て

- ① クラス全体で話し合う場を設け、意見を出し合えるような環境構成していく。
- ② 遊びが発展していけるよう、園児と一緒に必要な用具や材料を用意し、一人一人がアイディアを出し合いながら遊びが進められるようにしていく。また、個々のアイディアをつなげられるよう保育教諭が見守ったり必要に応じて仲立ちとなり援助していく。

III 課題解決に向けた取り組み(実践)

実践事例 1 「みんなで作ったプール」

《幼児の姿》

6月、砂場遊びを楽しむ園児たち。一人の子が砂場にプールを作り始めた。その様子を見ていた他の子が「一緒にやろうと」一緒に作り始めた。完成すると自分たちで水に足をつけて楽しんでいった。その様子を見ていた他の子が「プール入りたい」と入っていた。人数が多くなってきて、「もうは入れないよ」と作った子たちは困っていた。クラス全体で話し合う場を設けそれぞれの考えや思いを話し合った。その中でどのようなプールにしていきたいか園児の意見が多く出ていった。「みんなが入れるようなプールにしようよ」「広いプールがいいな」「二人じゃ作れないよ」それぞれの意見をまとめていくと、「みんなで大きなプールを作ろう」ということになった。翌日、役割を決め協力しながら砂場でプールを作る姿が見られた。みんなで作ったプールが完成すると「やったー」「気持ちいい」と嬉しそうにしていた。

《保育教諭の願い》

- ・みんなで一緒にプール作りを楽しんでほしい。
- ・話し合うことを通して、自分たちで遊びを進めてほしいな

《環境構成》

- ・クラス全員で話し合う場を設け、自分たちの意見を伝えられるような場を用意していった。
- ・園児が自分たちでできるように場や時間・用具を用意した。

《援助の工夫》

- ・保育教諭も一緒に話し合いに参加し、発表する姿を見守り、意見や考えを伝えやすいように仲立ちして全員が話し合いに参加できるようにしていく。
- ・園児の言葉や意欲を受け止めていく。

《幼児の変容》

- ・友達と力を合わせてた成功体験を通して自信がつき、自分たちで何度もプールを作ったり、異年齢児に作り方を伝えたり一緒に進める姿が見られた。

《考察》

- ・話し合いを通して、他の園児にも遊びが広がり、「プール作り」という共通の目的を持ち遊びを進めることができた。
- ・共通の目的に向かいそれぞれが役割を考え、協力しながら作る姿が見られた。今回の経験を通して、遊びや生活面で話し合うことが増えていった。

実践事例 2 「一人じゃできない」を「一緒だとできた！」に

《幼児の姿》

・進級当初から、製作遊びが好きな子が多く廃材で自分のイメージを形にして遊ぶ姿が見られる。個人個人でイメージしたものを作る姿は見られるが、友達と一緒にイメージを共有しながら一緒に作ることは少なかった。10月に物語の読み聞かせ後、一人の女の子が「物語に出てくる動物を作りたい」と廃材を使い作る姿が見られた。その様子を見ていた他の子も「動物づくりしたい」と動物づくりが広がっていった。

《保育教諭の願い》

- ・友達と一緒に遊ぶ中で、共通のイメージをもって遊びが広がってほしいな
- ・友達と協力して遊びを進めていく楽しさを味わってほしいな。

《環境構成》

- ・作りたいものが表現できるように身近な素材や廃材、図鑑や動物が出る絵本を用意し、自分たちで製作遊びが楽しめるような環境を整えた。
- ・作ったものを飾ったり、遊びに活かせるよう園児と一緒に相談しながら場を広げたり場を整えた。

《保育教諭の援助》

- ・園児のイメージした物を形にできるよう、一緒に考えたりアイデアを出しながら援助した。試行錯誤する姿や出来上がったときの嬉しさを共感した。
- ・園児同士が話し合う場面を作りながら、必要に応じて保育教諭が仲立ちしたりして遊びが進められるようにしていった。



どうやったらくっつくかな？



海作りたいな

《幼児の変容》

- ・キリン作りをする園児たち。始めは一人で作ろうとしていたが、なかなかうまく首が繋がらなかった。友達と一緒に考えを出し繰り返し試すことで、「割り箸使ってみよう」という考えにたどり着き、完成させることができた。
- ・動物が増えてくる中で、Kさんは「海を作りたい」とカラーポリ袋やスズランテープを使って海を作り始めた。「動物園に海はないよ」「おかしいよ」という意見が出たのでクラス全体で話し合う場を作った。自分が行ったことがある動物園をイメージしている子。動物園では見たことがない動物を作って楽しんでいる子。それぞれの思いを受け止め、イメージを共有しながら楽しめるように話し合う中で「どこにもないひまわり組の動物園にしよう」と共通の目的をもち、みんなで一緒に動物園作りを楽しんでいた。

《考察》

- ・動物づくりを通して、自分なりに考えたり、工夫したり主体的に遊びにかかわる姿が見られた。その中で、個々のアイデアをみんなですつなげていくことで、「みんなでやると楽しい」という経験につながっていったのではないかと考える。
- ・友達とイメージや考えを伝え合いながらたくさん失敗を重ね、試行錯誤したり友達と相談したり協力する楽しさを味わうことができた。

IV 実践の振り返り

話し合いの場を設けたり、園児が自分たちで考え、選び、工夫できる環境構成を行ったことで、「自分の思いを伝えたい」「友達と一緒に成し遂げたい」という気持ちが引き出された。その結果、園児同士で役割を意識しながら協力し共通の目的に向かって遊びを進める姿が多くみられるようになった。また、保育教諭が園児の思いや考えを受け止め、必要に応じて仲立ちとなる援助を行うことで、園児は失敗や葛藤も経験しながら話し合いによって解決しようとする姿勢を身に着けていった。試行錯誤を重ねる中で、友達と相談したり考えを伝えたりしながら協力する楽しさを味わう姿が見られたことは大きな成長である。

V 今後の実践に向けて

- ・園児同士の話し合いが深まるまでに時間を要し、思いの強さから意見がぶつかる場面も多く見られた。その際、どの程度保育教諭が見守るのか、仲立ちとなるのか判断が難しく援助の在り方について今後も継続して検討していく必要がある。
- ・主体的な遊びを支える環境構成について、活動が展開するにつれて素材や場の再構成が求められる場面があり、継続的な見直しの重要性も感じた。今後も園児一人一人の姿や集団の状況を丁寧に捉えながら柔軟に環境を整え、安心して自己発揮し、共に育ちあえる保育を進めていきたい。

〈主な参考文献〉

- 文部科学省 2018 『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』 フレーベル館
無藤 隆 2017 『幼保連携型認定こども園教育・保育要領ハンドブック』 学研プラス
加藤 繁美 2012 『0歳～6歳心の育ちと対話する保育の本』 学研教育出版

自信をもって行動する子を育む — “探究プロセス” を大切にした保育実践を通して—

南風原町立北丘幼稚園 教諭 氏名 永山 知佳

I テーマ設定の理由

幼稚園教育要領解説「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」(2)「自立心」において、幼児が自信をもって行動するようになるためには、「いろいろな遊びから自分がやりたいことを自分で選んで行動し、少し難しいこともやってみてきた満足感を味わうなどの体験の積み重ねの中で生まれることに留意する必要がある」そして、「幼児期に生まれた自立心は、小学校生活において、自分でできることは自分でしようと積極的に取り組む姿や、生活や学習での課題を自分のこととして受け止めて意欲的に取り組む姿、自分なりに考えて意見を言ったり、分からないことや難しいことは、教師や友達に聞きながら粘り強く取り組んだりする姿など、日々の生活が楽しく充実することにつながっていく。」と述べられている。

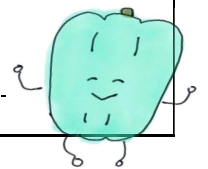
本学級は、5歳児(男子18名、女子12名)計30名である。自然環境に恵まれた園庭にて、身近な生き物に親しみをもって関わる中で、生き物の特徴や変体の過程、飼育の仕方にも興味や関心をもち、試したり、調べたり、発見したりと楽しんでいる。また、入園当初にアサガオやヒマワリの種まきをし、毎日大切に世話をする中で、芽が出て、葉が増え、ぐんぐん背が伸びていく様子など、生長に感動し、喜ぶ姿が見られ、植物への親しみ、興味や関心が高まっている。

そこで、今後、幼児たちが自然界の不思議に出会う時、「やってみよう!」「どうして?」と思ったことを、他者と対話することで刺激し合ってよりよい考えを生み出しながら、その物事に納得いくまで探究を続け、「そういうことだったのか!」「やっとなんか!」と満足感を味わうなどの体験を積み重ねていけるよう“探究プロセス”を大切にした保育実践を工夫していきたい。

II 課題に対する具体的な手立て

- ① ときめき・はてな・ひらめき・学ぶ楽しさの「感覚」に着目し、幼児の心の動きを捉える
- ② 主体的・対話的で深い学びの視点から“探究プロセス”を大切にした保育実践を工夫する

探究プロセスのポイント	幼児のつぶやき例	・教師が大切にしたいこと ◆保育実践の工夫
ときめき 感触・感覚・感動 残念・葛藤 (心が動かされる)	やってみたい!・気になる! 知りたい!	・幼児がどんなことに心を動かしているのか(ときめいているのか)、気付いたり感じたりすることができる教師の感性が大切 ・幼児の思いに寄り添う柔軟性をもつこと ◆興味や関心が高まっていくような働きかけ
はてな 試行錯誤・気付き 疑問	なぜ?・どうして? どうなるのかな?	・幼児と共に悩む、考える、諦めない姿勢をもつ ◆誰かの疑問(はてな)をその場にいる仲間と、または学級全体で共有する場をもつ ◆幼児の視点から対話を深めていく
ひらめき 予想・予測・比較 分類・確認	○○かもしれない ○○になりそう ○○は同じだけれど△△は違う	・幼児なりの考えを大切に受け止め、幼児同士の考えをつなぐ ◆対話が深まるような発問を工夫する ◆幼児なりのいい考え(ひらめき)を実際に試してみることができると支える
学ぶ楽しさの「感覚」 規則性・法則性 関連性等の発見と活用	○○だから△△になった そういうことだったのか! やっとなんか!	・教師と幼児たちが一緒になって、納得いくまで試行錯誤していく経験を大切にする ◆体験を振り返る中で、その時々感情や、気付き、疑問などを共有し、新たな目的や意欲につながるようにする。(体験の広がり・深まり)



III 課題解決に向けた取組み(実践) 『ピーマン だいさくせん!』5月上旬～

《はじめに》

畑に夏野菜を植える時期がやってきた。例年は、キュウリなどのウリ科の野菜も栽培してきた。しかし今年度は、県内でセグロウリミバエが大量発生しその感染拡大防止のため、ウリ科野菜の栽培自粛要請が出ている。そこで教師は、どんな風に幼児に投げかけていこうか考えた。栽培自粛要請を考慮し、ウリ科野菜を省いた他の夏野菜を提案する?、本当にそれでいいのか?、考えを巡らせたのち、これから夏野菜を育てていく上で、まずは、夏野菜への興味や関心をどうもたせられるかが大切だと保育の方向性をきめた。

そこで、クラスの集まりにて、「1組の畑に、夏野菜を植えたいと思っているんだけど…」と話題に出してみた。



「ピーマンのお家を作ろうと思っています。試してみてもいいですか？」
「頑張って下さい。ビニールのお家だと夏は暑くて、育てるのが難しいと思うので、専門の人に相談してみてもいいですね。」



『ピーマンだいさくせん』始動。使えそうな素材を選んで、ピーマンのお家を作る幼児たち。友達とアイデアを出し合い、協力しながら進める姿が見られた。



「ネットの下が開いている！」「セグロウリミバエが侵入してきそう！」「僕、キャンプした時に、とんかちで押さえたことあるよ！」
「それいいね！セグロウリミバエの侵入を防ぐんだ！」



「俺たち、ピーマンクラブ！」「毎日、監視しに来るぞ！」と、大張り切り。これまで控えめなところがあり、自信なさ気だったA君が、特に、“ピーマンを守る！”という正義感から、生き生きとしていた。



「大変！ピーマンに穴が開いているよ！」「もしかしてセグロウリミバエの仕業かも！」



「ピーマン1つだけ…」
「みんなの分足りない」
「沢山できてほしい…」
「専門の人に聞いたら、教えてくれるかも！」



ピーマン博士（専門の人）が来てくれて、ピーマンを沢山増やす方法など、質問する幼児たち。「なるほど〜！」



「ピーマンを増やすためには、ピーマンを強くすることも必要なんだって！」ピーマン博士と、支柱を立てたよ！



ピーマン博士から習った、“ピーマンを強くする液”を作る。米のとぎ汁と、カルピス、納豆を1粒…！いい感じ！



「太陽に当てて一週間待つって言うんだよ！」「ここが太陽当たる！」「次のお弁当の日が一週間だね」



「“ピーマンを強くする液”パンの匂いがしたよ」「よし！発射！セグロウリミバエも寄ってくるな〜！」



試行錯誤しながら育てたピーマン、沢山実り、収穫、調理、みんなで美味しく食べることができた。『ピーマンだいさくせん』大成功！

IV 実践の振り返り

ピーマンの赤ちゃん（苗）をほっとけない幼児の思い、『ピーマンだいさくせん』を本当に試してみてもいいのかという心配、ピーマンを守りたいという正義感、もっと沢山実ってほしいけど、なんで増えないんだろう？という不思議など、幼児の思いに寄り添い、教師と幼児たちが一緒になって、納得いくまで試行錯誤していったこの経験は、今後出会うであろう自然界の不思議に、問いをもち続け、難しいことに出会っても、諦めずに物事に向き合い、他者と協働してよりよい考えを模索していく探究心を育むことにつながっていくと考える。また、自分たちが考えたことを実際に試行錯誤し、「やっとなってきた！」という満足感を味わう経験は大きな自信となり、その後の園生活において生き生きと自己発揮する姿にもつながった。

V 今後の実践に向けて

今後も、幼児自身が心から納得いくまで試行錯誤していけるよう、“探究プロセス”を大切にしたい保育実践を工夫していきたい。

〈主な参考文献〉 文部科学省 2018 幼稚園教育要領解説

秋田喜代美、松本理寿輝 監著 2024 遊び・学びを深める日本のプロジェクト保育 協働探究への誘い

学びの芽生えを育むための環境構成と援助の工夫 一心を動かし、主体的に遊ぶ子の姿を通して―

南風原町立翔南幼稚園 教諭 嘉陽 知華

I テーマ設定の理由

近年の子どもたちは、情報化の進展によって、知識は増えているものの、断片的で受け身なものが多く、学びに対する意欲や関心が低いとし、偏った体験を余儀なくされている。

そこで、幼児教育では、子どもの生活経験がそれぞれ異なる状況を考慮して、子ども一人一人の特性や発達の過程、課題に応じた指導を行い、資質・能力を育てていくこと、子どもとの信頼関係を築き、子どもが身近な環境に主体的に関われるようにしながら、よりよい教育及び保育の環境が求められる。

幼稚園教育要領解説によると、「幼児期の教育においては、幼児が生活を通して身近なあらゆる環境からの刺激を受け止め、自分から興味をもって環境に主体的に関わりながら、様々な活動を展開し、充実感や満足感を味わうという体験を重ねていくことが重視されなければならない」と記されており、「幼児が環境とのかかわり方や意味に気づき、これらを取り込もうとして、試行錯誤したり、考えたりするようになることが大切である」とも示されている。

本年度の学級の実態として、ほとんどの子が集団生活を経験し、教師や友達と一緒に遊びを楽しんでいるが、環境にどう関わったら良いのか戸惑い受け身になってしまう子（経験不足）や興味をもって遊び始めてもすぐに遊びから抜けてしまう子、自己発揮や自己実現の経験が少ない子などの姿が見られる。

また、子どもが成長する上で、実現や成功などのプラス体験はもとより、葛藤や挫折などのマイナス体験も含め、多様な体験をすることが不可欠であるとも記されている。幼児が環境に主体的に関わっていく力を育むためには、土台となる心情面を支えとし、興味や関心をもったことに、直接体験したり、思いの実現に向けて、考えたり、葛藤したり、試行錯誤したりしながら心を動かす経験を積み重ねていくことが必要ではないかと考える。

これらを踏まえ、幼児が主体的に遊ぶ姿から、遊びの中で子ども達が何を楽しんでいるのか、何に心を動かしているのか、一人一人の幼児理解に努めながら「心の動き」と「遊び」、「学びの芽」の育ちがどのように関係しているのかを探っていきたい。そのため様々な環境や教師の適切な援助を通して、幼児が自己決定感をもち、心を動かして遊びや生活を作っていく姿を捉えていきたいと考え、本テーマを設定した。

II 課題に対する具体的な手立て

- ①一人一人の幼児理解に努め、幼児自ら主体的に環境に関わる姿や発想、自己決定感を大切にし、遊びを展開できるような環境構成と援助を探っていく。
- ②幼児の遊びや活動の姿から、心の動き（心情の変容）やどのようなことを学んでいるのか読み取り、振り返りの充実を図る。
- ③理論研究や実践を通して「心の動き」や「遊び」、「学びの芽」がどのように関係しているのかを探る。

Ⅲ 題解決に向けた取組 (実践)

《幼児の姿 9月》(5歳児) 世界陸上ってかっこいい!ぼくたちにもできるかな?』



2学期が始まり、気の合う友達と体を動かして走ったり、竹馬ややつとこなどこれまで触れていなかった遊びにも興味を持ったりする姿が見られた。そんな中、東京世界陸上が開幕し、連日テレビで放送されていることが子ども達の遊びのきっかけとなった。

【教師の願い】東京世界陸上の感動や憧れを友達と再現しようとする遊びから、イメージしていることを実現していく面白さ、試行錯誤や様々な感情体験(心が揺れ動く)を味わう経験にしたい。

<p>幼児の姿(心の動き)</p>	<p>○教師の援助の工夫、読み取り☆環境構成 ♪学びの芽生え</p>
<p>世界陸上遊びとしてイメージをもち遊び始めると、<u>何度も友達と競走をしたり、世界の選手の真似をしたりと遊んでいる</u>。すると、それを見ていた子が、「走るだけじゃなくて、四角のものを飛び越えるのもあったよ」、「それ見たよ!トンネルみたいなやつ」、「それも作ってみたいな」と<u>見たことを共有し、言葉で伝え合ったことでイメージが膨らんでいる</u>。「それ、ハードルって言っていたよ」と友達同士で会話をしている。</p>	<p>○子ども達同士の何気ないつぶやきを拾いながら、<u>幼児の興味や関心を引き出していけるような言葉をかける</u>。</p> <p>☆暑い中、世界陸上遊びを繰り返している姿が見られたので、スタート地点に簡易テントを置き遊びが継続できるようにしていく。</p>  <p>♪身近な情報の獲得、憧れを再現したい!</p>
<p>友達と相談しながら作った牛乳パックハードル。<u>作り上げたハードルを園庭に持ち出して嬉しそうに並べていく子ども達</u>。すると、風で倒れていくことに気付いた。「先生、<u>風が強いとこのハードルは倒れちゃうよ</u>」、「<u>どうやったらいい?</u>」と困っている。</p> <p>自分たちなりに考えて「<u>ガムテープを牛乳パックの下にくっつけてみよう</u>」と試すことになるが、砂地と牛乳パックの相性が悪いことが分かる。</p> <p>「<u>倒れないためには、誰かが支える?</u>」、「<u>でもそしたら、跳べないよ</u>」と子ども達なりの試行錯誤は続き、「先生、<u>どうしたらいい?他に良い方法ないかな?</u>」と相談にきた。</p>	<p>☆遊ぶ場を整え、様々な素材や教具を用意する。</p> <p>○遊びの経験を活かしながら、自分たちで進めていく姿を捉え、子ども達なりに考えたり、失敗したりしながら新たな考えや気づきに触れられるようにしていく。</p>  <p>○子ども達なりの試行錯誤の様子から、遊び用に設置したテントから新たな解決策を見出せるように言葉をかける。</p> <p>(設置しているテントには重りとなるようにペットボトルを置いている)</p> <p>♪これまでの知識を活かし、新たな解決法へ</p>
<p>ヒントをもらうと、「<u>ペットボトルがたくさん必要だ</u>」と水を入れて用意する。すると、「<u>そのまま置いているだけだったらまた倒れた...</u>」、「<u>じゃあヒモで結ぶのはどう?</u>」と遊びが進む中で、互いの<u>考えを受け入れながら、作っていくことの楽しさを感じている</u>。</p>	<p>☆新たな素材を子ども達と相談しながら用意し、ハードル遊びが継続できるようにしていく。(ペットボトル、ヒモなど)</p>  <p>♪新たな気づき!結ぶと倒れにくいんだ!</p>

〈幼児の変容〉友達同士で思い考えを出し合い遊びの実現に向かう姿、試行錯誤、葛藤する場面に出会い、より本物のように再現したい気持ちも高まっている。

【教師の援助の見通し】好きな遊びをとことん続ける姿から、より直接的な体験を通して遊びの充実感や満足感を味わう経験ができないかと考え、近くの黄金森陸上競技場へ行くことを提案する。

幼児の姿（心の動き）	○教師の援助の工夫、読み取り ☆環境構成 🍃学びの芽
<p>本物の陸上競技場を目の当たりにし、「こんなに広いんだ」、「地面に番号がある」と発見や気付きを言葉にしている。実際に本物のハードルを見ると、大きさの違い、質感の違いなどを感じている。</p>	<p>○遊びの充実感や満足感を感じられるように、黄金森陸上競技場へ行く事を提案する。</p>  <p>🍃本物との出会い！感動体験！</p>
<p>選手になりきり再現する中で、服作りが始まる。選手の服にある国旗やマークを見て興味を持つ子ども達。その日の振り返りでは、「沖縄や南風原にはマークってあるのかな？」と疑問を持つ姿が見られた。</p>	<p>○振り返りの時間に、東京世界陸上の様子を学級でも見ることで、新たな気づきや発見に繋がっていきけるようにする。</p>  <p>🍃世界の国旗や言葉、表記があることを知る</p>
<p>翌日、沖縄県と南風原町のマークを見た子ども達は、「どこかで見たよ」、「南風原に住んでいるから南風原マークを服に入りたい」と服作りをし、『しょうなん世界陸上』（運動会）で披露した。</p>	<p>☆子ども達の気付いたことをまとめ、町章などの掲示を行った。</p> <p>○これまでの遊びを運動会にも取り入れ、達成感や充実感を味わう活動として進めていった。</p>
<p>町章を知ること、身近なところで使われていることを日常の中から発見している姿が見られ、地域のことを知る経験ともなった。</p>	<p>☆どんなものに南風原町のマークが使われているのかを学級でも取り上げ掲示する。</p> <p>🍃町章を知る！身近な生活から、学びへ！</p>

IV 実践の振り返り

- (1) 幼児が何に面白さや楽しさを見出しているのか、心が動く場面を捉え、環境構成や援助を進めてきた。一人一人の思いや考えを肯定的に認め、試行錯誤、失敗する経験を前向きに捉えていけるような言葉かけや援助をしたことで、幼児が自己発揮できる遊びに繋がったのではないかと考える。
- (2) 幼児が好きなことに何度も取り組み、遊びの充実感や満足感を感じる過程の中に、気づき、工夫し、できるようになったことを学びの芽として捉えることで、子ども達の主体的な遊びを実感することができた。教師の役割として共主体となって活動や遊びを支えていくことが重要ではないかと考える。

V 今後の実践に向けて

今後も、幼児が心動かされている場面を丁寧に読み取り、一人一人が主体的な活動や遊びの場面からどのような学びがあるのか、経験したことや学んだことを他の場面でどう活かそうとしているのか、学びの繋がりも引き続き探っていきたい。

〈主な参考文献〉

- 国立大学法人 文部科学省委託 ■令和6年 ■幼児期の教育において育みたい資質・能力の育ちをとらえる研究 ■無藤 隆 ■文部科学省 幼稚園教育要領解説 平成30年 ■子ども主体の保育をつくる56の言葉 ■令和7年 ■大豆生田 啓友

自ら環境に関わり、生き生きと活動する幼児の育成 —栽培活動をきっかけとした環境構成を通して—

宮古島市立 南幼稚園 教諭 氏名 伊良皆 恵美

I テーマ設定の理由

本園は5歳児保育のみを行っており、現在は全園児28名である。本来、異年齢が学び合う園生活においては、年長児が遊びの手本となり、伝承的に遊びが伝わって学び合う姿が見られる。しかし、本園は全員が新入園児の為、新しい環境へ適応するまでに時間がかかるということが課題である。幼児期の遊びは環境を通して行う教育であり、幼稚園教育要領解説において「環境を構成するということは、物的、人的、自然的、社会的など、様々な環境条件を相互に関連させながら、幼児が主体的に活動を行い、発達に必要な経験を積んでいくことができるような状況をつくり出すこと」と明記されている。また『黄金っ子 架け橋サポートガイド』（沖縄県教育庁義務教育課）では、「遊びを通して、多様な仕方で環境に関わり、思考を巡らし、想像力を発揮し、自分の体を使って、また、友だちと共有して、環境に様々な意味や関わり方を発見します。」と記されている。そこで、園児が安心して関わりたくなるような環境構成を見直し、主体的な活動を保障することで、友だちとの関わりも広がり、発達に必要な経験に向かうことができるのではないかと考え、本テーマを設定した。

II 課題に対する具体的な手立て

- ① 研究テーマに基づいて理論研究を行う。
- ② 園児の実態を把握し、課題を明確にする。
- ③ 環境の再構成と保育実践を行う。
- ④ 研究の成果と今後の課題をまとめる。

III 課題解決に向けた取組 （実践）

実践事例1. 『オクラちゃんの栽培を通して』（4月～6月）

《園児の姿》

入園したばかりの園児たちにとっては、保育園や家庭で親しんでいたレゴブロックやパズルなどの玩具が安心できる遊びであり、室内で過ごすことが多かった。園庭での活動を充実させる方法を模索していたところ、園児の保護者から「幼稚園で育ててほしい」とオクラの苗をいただいた。園児達は興味津々で、「オクラちゃん、かわいいね」「葉っぱがふわふわ」「どうして3本一緒に生えてるの?」と、観察し、会話を弾ませながら植え付けを行っていた。「オクラちゃん」の生長を見守るため、自然と栽培園に集まる姿が増え、水やりをした後に草花で色水遊びをしたり、まだ何も植えられていない畑の土を掘ってミミズを探したりするようになった。

《環境構成と園児の変容》

オクラちゃんの周りが園児たちにとって落ち着ける場所になっているので、栽培園を中心に園庭の環境構成を行うことにした。他にも育てたい野菜を園児たちと話し合いながら栽培した他、色水遊びに使える花を増やしたり、チョウの幼虫の食草や香りの違うハーブを育てたりした。土遊びができる箇所は残しておき、バトンスローや、キックスクーターの駐車を近くに設置することで、少しずつ活動範囲を広げて動的な遊びにも移行できるようになってきた。



実践事例 2. 『野菜の浮き沈み』（7月～8月）

《園児の姿》

みんなで育てたオクラや夏野菜を収穫し、家庭に持ち帰ったり、園で簡単に調理して試食したりすることを楽しんでた。ある日、連休明けにたくさん収穫できた野菜を洗っていると、オクラやナス、ゴーヤーがプカプカとたらいの水に浮いていた。「船みたい」「何で浮くのかな」「野菜って浮くんじゃない？」と不思議そうに何度も試していた。「カボチャは重いから沈むんじゃない？」「ミニトマトは軽いけど沈んだよ」という声もあった。



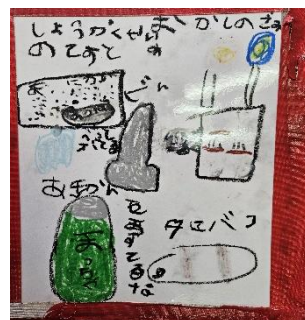
《環境構成と園児の変容》

色々な野菜の浮き沈みを試したいという園児の思いに応え、園で栽培していない野菜（カボチャ・ トマト）は家庭から持ち寄って試すことにした。浮いている様子をよく観察できるように、たらいではなく、空いている水槽を使った。重いカボチャが浮いたこと、小さなミニトマトが沈んだことにみんな驚いていた。「重いか軽いかだと思った」「真ん中に穴が空いているかどうかじゃない？」等、色々な予想をし、結局答えはでないままだったが、「また他の野菜を育ててやってみよう」と今後の栽培活動への意欲に繋がった。また、疑問に思ったことを実際に試せるという経験から、身近な事象に興味を持つ姿が増えている。

実践事例 3. 『思いを伝えるポスター作り』（10月～）

《園児の姿》

園庭にお菓子のゴミや空き缶が落ちていたり、栽培物が折れていたりすることが多くなった。教師と一緒にゴミ拾いをしたり、支柱を立て直したりするが、何度も繰り返していると「誰がやってるの」「先生、監視カメラ付けて」と怒る園児も出てきた。どうしたらいいか話し合うと、前年度の園児が作って掲示したままにしていた『ポイ捨て禁止』のポスターに気づき、「あれを畑に貼ったらいいんじゃない？」という声があがった。



《環境構成と園児の変容》

ポイ捨て禁止のポスターを貼り直そうと剥がしてみると、劣化していてボロボロになってしまい、「新しく書こう」ということになったので、画用紙、クレヨン、油性マジック、ラミネートフィルムを用意した。自由にポスター作りが始まり、「ゴミはぜったい捨てないで」「私たちはもう拾いませぬ」「ストップ」等、自分なりの言葉で気持ちを伝えようとする姿が見られた。ポスターを掲示した翌日はゴミが捨てられておらず、「読んでくれたね」「分かってくれたね」と満足そうな園児達だった。他にも話し合いの中で「砂遊びで作った砂山を壊されたくない」「段ボールの家に名前を書きたい」等の意見があり、普段の遊びの中でも園児が自ら必要な掲示を作るようになった。

IV 実践の振り返り

- (1) 「オクラちゃん」の栽培をきっかけに、少しずつ安心して活動できる場所が広がり、進んで環境に関わることができるようになった。栽培園は門のすぐそばにあるので、降園時に親子で会話を楽しみながら観察する姿も見られ、その日の出来事や気持ちを伝える場所にもなっている。
- (2) 野菜の浮き沈みの実験を通して、身近な事柄に疑問を持ち、予想したり、実際に試したりしてみようとする姿が増えた。なかなか答えが出ないことを面白がり、試行錯誤していく中で、遊びを通した探究心が芽生えていると感じる。
- (3) ポスター作りを通して、自分の気持ちを表現する方法が増え、相手に伝わる喜びを感じられるようになった。また、自分たちで園生活の場を整えようとする気持ちが芽生え、困っていることや意見を伝える園児が増えた。

V 今後の実践に向けて

- (1) 栽培活動を通して園児が環境に親しむきっかけとなったものの、主体的な遊びや活動が展開されるまでには時間がかかった。新しい環境に慣れてからは、今まで保育園や家庭で培った経験を活かして活動できていたので、園児の姿に寄り添った保育を心がけていきたい。また、入園後の不安が少しでも和らぐよう、保育園と交流の機会を増やすことも検討したい。
- (2) 野菜の浮き沈みの実験では、園児の探究心が深まるのを感じていたが、それが継続した学びに繋がるような援助が不十分だった。園児が遊びを通して気づいたことを可視化できるよう、掲示物や教材の工夫をしていきたい。
- (3) ポスター作りを通して自分の気持ちを表現しようとし、自分たちで環境を整えようとする気持ちが芽生えているが、思いを主張する姿が強く、相手の気持ちになって考えることは難しかった。今後は言葉で伝え合ったり、気持ちを調整したりする力も育ていけるよう、話し合う場を充実させていきたい。

〈主な参考文献〉

- 井上美智子 2012年 『幼児期からの環境教育』 昭和堂
高山静子 2017年 『学びを支える保育環境づくり』 小学館
仲本美央 2025年 『わくわくドキドキの環境から広がる遊びの世界』 風鳴舎

思いを伝え合い、人と関わる楽しさを感じるようになるための援助の工夫 —対話する活動を通して—

石垣市立あらかわこども園 保育教諭 荻田 倫子

I テーマ設定の理由

幼児期における「伝え合い」では、自分の思いや考えを言葉で表し、互いの話を聞き合う経験を重ねることが大切であり、このようなやり取りを通して、理解力だけでなく思考力や発想力、共感性や自己肯定感など多様な力が育つと考えられている。

近年、少子化・核家族化の進行、情報化・デジタル化によるテレビゲーム、インターネット・スマートフォンなどの室内遊び、ネットやSNSを通じたコミュニケーションの増加など、他者との関わりの手づかぬ、心の健康や自己肯定感の不安定さが幼児期から見え始めているとの問題が示されている。そこで、幼児施設においては、安全で温かい集団生活の場を保障し、他者との関わりや基本的な生きる力の獲得を通じて園児一人一人がかかけがえのない個性ある存在として認められるとともに、自己肯定感をもって育まれることが可能となる環境を整備することが求められている。幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説の領域「人間関係」内容の取り扱いでは、(2)「一人一人を生かした集団を形成しながら人と関わる力を育てていくようにすること。その際、集団生活の中で、園児が自己を発揮し、保育教諭等や他の園児に認められる体験をし、自分のよさや特徴に気づき、自信をもって行動できるようにすること。」また、領域「言葉」の内容の取り扱いでは、(2)「園児が自分の思いを言葉で伝えるとともに、保育教諭等や他の園児などの話を興味をもって注意して聞くことを通じて次第に話を理解するようになっていき、言葉による伝え合いができるようにすること。」とある。これらのことから、保育者は園児が安心した環境の中で人と関わり、思いや考えの伝え合いなど表現意欲が高まるようにしていくことが大切といえる。

本学級は、5歳児(3年保育)計22名のクラスである。進級児がほとんどで、慣れ親しんだ友達と過ごしている。しかし、自分の思いを相手にうまく伝えられず、一方的に自己主張をしたり人の嫌がることを言い合ったりする場面が多く見られる。その都度、自分の思いを言葉で伝え、相手の話にも耳を傾けられるように援助しているが、しばらくするとまた同じような場面が見られ、その後の気持ちの切り替えにも時間がかかっている。中には、自分の思いを内に秘めている様子の子も見られる。

これらを踏まえ、互いに思いを伝え合い、人と関わる楽しさを感じるようになるためには、対話する活動体験を重ねていくことが重要になるのではないかと考え、遊びや生活の中で自分の思いや考えを言葉にし、友達と共有、発展させる機会をつくるのが大切ではないかと考え、本テーマを設定した。

II 課題に対する具体的な手立て

- 1 クラスで輪になって対話を行う活動(サークルタイム)を取り入れた「伝え合い」の場の工夫
- 2 安心して自分の思いや考えを表し、相手の話を聞く楽しさが味わえるような環境構成と援助の工夫
- 3 子ども同士が互いに認め合い、協力していけるような援助の工夫

Ⅲ 課題解決に向けた取組（実践）

◆実践事例1：「輪になって話してみよう！」（5月～）

《園児の実態》

- ・年長クラスの雰囲気にも慣れ、室内外でそれぞれが個々に好きな遊びを楽しんでいる。友達がしていることに興味をもち、自分もやってみようとするが廃材の取り合いや道具の貸し借りで折り合いがつかずトラブルになってしまう。
- ・集まりの場で友達と一緒に、はしゃいだりおしゃべりをしたりと話を聞くことが苦手な様子である。

《保育教諭の願い》

- ・自分の思いを言葉で伝え、相手の思いにも気付き、受け入れて遊びを楽しんでほしい。
- ・人の話を聞く楽しさや話を聞いてもらったりする喜びを味わってほしい。

《環境構成》

- ・輪になって話してみる。みんなで顔を合わせ話すことで、自分事として受け止め参加できるようにする。
- ・朝の会、帰りの会も輪になって行い、みんなに話したいことや伝えたいこと、遊びの振り返りなど何でも話す時間をつくっていく。サークルタイムの雰囲気に慣れていくようにする。

《保育教諭の援助》

- ・子どもの声を引き出すような声かけで、子どもたちの自己表現を支えていく。
- ・子どもの声を聴き、「話さない」「友達の話聴く」参加の仕方も受け入れる。一人一人が安心して参加できるような雰囲気をつくっていく。

《園児の姿》

- ・輪になって座ることを喜び、人の話に耳を傾けるようになった。
- ・みんなに伝えたい、発表してみたいと意欲的に手を挙げる子や自分の考えや感じたことを言葉にして話す子が増えた。



《考察》

- ・保育教諭がみんなに伝えたいことがある時やクラスの問題解決の時など、輪になり顔を合わせる経験を積み重ねたことで、自然と人の話に耳を傾け、思ったことを言葉で表せるようになったと考える。
- ・朝の会や帰りの会でも輪になり進めたことで、みんなに自分の作品を紹介したい、捕まえた虫を見せたいなど、友達に伝えたい！という思いが芽生え、話を聴いてもらえる嬉しさや楽しさを感じるようになったと思われる。
- ・日によっては、姿勢が崩れたり動き回ったりと集中できないこともあった。その日の子どもたちの様子やテーマのある話し合いになる時は、椅子に座って行うなど対話がしやすい環境に配慮していく必要がある。

◆実践事例2：「色水ジュース屋さんオープン！」～R児のやりたいがクラス全体へ～（7月）

《園児の実態》

1年生と朝顔の色水でスライム作りを経験しその後、色水遊びが復活した。夢中になって色水遊びを楽しむ子が増える中、「また色水ジュース屋さん、やりたいな…」「前はあまりお客さん来てくれなかったんだよね。たくさん来てほしいんだけど…」「どうやったらお客さん来てくれるかな…」「スタンプとかつくったら来てくれるかも？」と、つぶやきながら考え込むR児の姿があった。

《保育教諭の願い》

思いをクラスみんなに伝え、考えを出し合ってみるのはどうだろうか。みんなで意見を出し合う楽しさが感じられたらいいな。協力して取り組むことを通して、相手の思いや友達よさに気付けたらいいな。

《環境構成》

- ・ R児に、サークルタイムで思いをみんなに伝えてみることを提案し、話し合う時間をつくる。
- ・ みんなの考えや決まったことを紙に書き出す。可視化し、わかりやすくする。

《保育教諭の援助》

- ・ 4月に転園してきたR児が、少しずつ自分を出してきている様子に配慮し、言葉を添えていくようにする。
- ・ 子どもたちから出た考えや意見を尊重し、何を言っても否定されないという安心感がもてるようにする。
- ・ 子どもたちの「やりたい」が実現できるよう、支えていく。

《園児の姿》

- ・ R児の話に興味をもち、イメージを膨らませながら積極的に自分の考えを話していた。「看板、あった方がいいんじゃない?」「お金、必要だよ!」「お客さんはもも組とばら組にしたら?」「おまけでゼリーあげる?」「スライム、ゼリーに似てない?」「スライム作りたい!」などの声があった。
- ・ 「いいね!」「これはどう?」「こうしたらいいんじゃない?」など、友達の話の聴いて、自分の考えを伝えていた。また、役割を分担し、準備からオープン当日までグループで協力する姿が見られた。

《考察》

- ・ クラスのみんなで考えを出し合ったことで、いろいろな意見があることを知り、対話が生まれていった。伝え合う楽しさを感じることができた。
- ・ 「色水ジュース屋さんをオープンしたい」という共通の思いをもち、協力し活動に取り組んだことで互いにつながる心地よさを感じながら、自分のよさや友達のよさに気付けたと思われる。

IV 実践の振り返り

1 成果

- (1) サークルタイムを重ねていったことで、遊びや生活の中でも対話が増え、安心して思いを伝え合うことができるようになった。思いがぶつかることもあるが、互いに話を聴く姿が見られるようになっている。
- (2) 話を聴いてもらう嬉しさから、「伝えたい」という表現意欲を高めることができた。
- (3) 「やりたい」を友達と一緒に実現したことは、それぞれの自信につながった。互いに声をかけ合い、自分たちで遊びを進める姿が見られるようになっている。
- (4) 行事に向けての話し合いになると、「ゆり組会議」という名で話し合いが進み、内容を自分たちで決めて楽しむようになった。生活発表会では、やってみたいこと、やりたいことに挑戦し、それぞれが自分の力を発揮することができた。互いに認め合いながら表現を楽しむ姿が見られた。

2 課題

- (1) 対話の形が発表の形になり、伝えて終わりにになってしまう場面があった。サークルタイムの取り入れ方を工夫し、さらに対話が深まるようにする。
- (2) ファシリテーターとして、声のかけ方や子どもの声の引き出し方などのスキル向上を図る。

V 今後の実践に向けて

- 1 サークルタイムを年少クラスから始めることで、年長になる頃には普段の生活や遊びの中においても友達同士で話し合うということができるようになるのではないかと。園全体で、サークルタイムに取り組んでみたい。まずは、「丸くなる」から始めてみたい。
- 2 サークルタイムを継続し、ファシリテーターとして中立的に対話を引き出していく。どのような声かけが効果的だったか、記録しながら振り返りを行いスキルアップを目指していく。今後も丁寧に子どもと対話することを意識し、伝え合う楽しさが感じられるような環境に配慮し、援助の工夫に取り組んでいく。

〈主な参考文献〉

- 内閣府・文部科学省・厚生労働省 2018『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』 フレーベル館
- 大豆生田啓友・豪田トモ 著 2022『子どもが対話する保育「サークルタイム」のすすめ』 小学館
- 大豆生田啓友 著 2025『子ども主体の保育をつくる56の言葉』 Gakken